
少年の日常

満月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

少年の日常

【Nコード】

N3029L

【作者名】

満月

【あらすじ】

主人公（星川 雫）の日常を描いた物語。

彼は友人たちとほのぼのした日々を送っていた。

第一話（前書き）

初の試みです。

なので期待するような物ではありません。
暇潰しでも読んでくれればうれしいです。

第一話

頭の中はぼんやりとしていた。

朝で眠気が残っているのかもしれない。

「兄さん？どうしたの？」

「いや、何でもない」

少女の質問に答えた。

星川 玲れいこそ俺の妹だ。

年下であるため俺は高校だが妹は中学。

そうやって別々お互い離れる。

当然だけど、とても心配なのだ。

兄としては。

「もう。変な兄さん」

「うぐ」

自覚している。

俺は妹想いはいいが、それがしつこいんだと。

もちろん可愛いのが故に愛しくてたまらないだけ。

なんというか、愛娘のようだ。

「それより、玲。何か困ったことはないか？」

今一番気にしていることを訊いてみる。

困ったように苦笑いしているのは見て分かる。

たぶんないんだろう。

良い友達にも恵まれているようだし、心配することではない。

それでも凄く心配なんだ。

「兄さんこそ、学校はどうなの？」

「俺か…？」

「うん。いつも私のことばかりだから」

どうと尋ねられても、一般的に過ごしていると思う。
だから大した答えがない。

「普通だ」

そう答えると玲はまた苦笑いをする。

どうやら求めている答えとは違ったようだ。

でもこれしか言いようがないと思う。

「それじゃわかんないよ。例えば、友達のこととか」

「友達か…。多くはない。俺はほとんど一人だからな」

「あれ？ そうなの？」

今度は意外そうにしている。

「俺は…無愛想らしいからな。近寄りがたいんだろ…」

「そうかな？ 私はそうは思わないけど…」

「家族だから、慣れてるだけだ」

そう、家族だから。

小さい頃からずっと一緒だった。

仲の良い兄妹で近所でも評判だった。

それは今もだ。

「小さい時の兄さんは…今と変わらないね」

昔から妹好きの俺。

なにか玲がやらかせば俺が罪を被る。

おかげで両親からは要注意だった。

済まなそうにしていた玲を慰める役も勿論俺だった。

そういえば、当時から俺は友達というものが少なかった気がする。

隣の家に住む少女。そしてそのまた隣に住む少年。

この二人ぐらいしか、気を許せる友達がいなかった。

あの二人は玲とも仲が良い。

そこがまた利点だ。

「あ、早くしないと遅刻しちゃうよ」

携帯の時計を見て玲が焦る。

今は登校時間だ。

ただゆっくりしたペースな為に、早く出ても遅れることもある。

「またね、兄さん」

「ああ…また」

手を肩まで挙げて俺は返事をした。

ここからは俺一人の時間だ。

他に出勤している人や、同じ学生もいる。

けどどれも他人だ。

別に仲良くしてる訳じゃない。

だから一人となんら変わりはない。

ただ玲がいなくなつて寂しいというのが本音。

あと半年もすれば同じ高校生だ。

今日までどこを受けるのか聞いたこともない。

親はどうやらどこでもいいと言っているらしい。

俺の時は随分規制の強いことだった。

親にとっては玲が利口で俺が手のかかる子なんだ。

それは俺が望んだことだ。

だから別に気に病んではない。

玲には親の愛情をたっぷり受けてもらいたい。

俺の分はもつたないから、玲にあげる。

そんなつもりで幼い頃から玲を持ち上げるようになってきた。

結果的に成功といった感じだ。

そんなことしなくても、玲なら今のように愛情を注がれていただ

ろうけど。

「おっはよー栗」

「おーっす。栗ー！」

背後から聴き慣れた声が俺の名前を呼ぶ。

俺の星川 栗という名前を。

そして二人は近隣に住む幼馴染の二人だ。

「ああ、翔。唯」

桂木 翔と柊 唯。

二人は幼少からの腐れ縁。

俺の数少ない友人。

そして気を許せる数少ない人物。

「今日もクールだね」

「唯は：いつも通りだな」

唯の毎度お馴染みの挨拶のようなものだ。

だから軽く受け流す。

「にしても、後から出てる俺らに追いつかれるとはな。遅すぎないか？」

「玲のためだ。：歩調を合わせてる」

「あ、そっぴやそっぴやだったな」

玲はなんというか、運動音痴だ。

学力はいいが、体育は苦手。

それは普通の徒歩ですら遅いという始末。

だがそれがまた可愛気のあるところだ。

「相変わらずシスコンなんだね」

シスコン：：。

そっぴや、そっぴや。

なんか頭の中でモヤモヤしていたものが減った。

最近になってその単語を聞いたから意味すら知らなかったが翔から聴き知った。

「シスコンは俺のステータスだ」

「あー：：。あんまりそれを他人に言いふらすなよ？」

「：：なぜだ？」

「恥ずかしい思いをしたくなきゃ言う通りにしろ」

やれやれと翔は大袈裟な表現をする。

唯は俺たちのやり取りを面白がって見ている。

これが俺の周囲の風景。

それがとても居心地がいい。

玲には及ばないが。

「うっわ！やばいやばい。おい二人共。走るぞ」

「あっ、待ちなさいよ翔」

「……………」

俺たちは校門に向かって走り出した。

これはいつもの光景ではないと、先に言うておく。

第二話

「またな、雫に唯」

「あ、あんたどうしてそんなに元気なのよ…?」

あれからずっと走りっぱなしだったからか、唯は息を切らしている。

それに対して俺と翔は元気だ。

「運動不足なだけだろ?じゃな」

翔は俺と唯とは別のクラスだ。

すぐ隣のクラスだから、会おうと思えばすぐに会える。

「俺たちも早く行こう」

「そうだね。…あ」

唯が何かに気がついたように視線を向ける。

自分も実際に気がついているのだがあえて無視していた。

俺もそちらを向く。

そこには長い髪の女性がいた。

この学校の副生徒会長の二年、紺野^{こんの}綾先輩だ。

「綾先輩。こんな時間に…また見回りですか」

「あら、星川くん。またギリギリの登校なのね?」

ちよつと強気な態度でそう話をして来る。

この人とは中学の時から顔見知りだ。

その時からこんな態度を取られている。

でもこれがお互いの接し方だから慣れていた。

「時間配分は俺の勝手です」

「そうね。あなたが遅刻しようと私には関係ないわよね」

なんだか冷たいような言い方。

しかし綾先輩は意外と優しい。

教師の受けもよく、同性からも異性からも好かれている。
たまにこちらにも優しい態度になるのだが稀。
けれどほとんどはちょっとツンとしている態度で接してくる。
「そうですね…。綾先輩も早く教室へ行った方がいいですよ」
「あ、あなたに言われなくても戻るわよ」
「そうですか。それじゃ」
「あ、待ってよ〜！」
その言葉を最後に俺は教室へ向かった。
あとから唯も付いて来る。

「お、今日も見張りかい」

「先生。おはようございます」

綾は教師へあいさつ。

この教師は雫たちの担任だ。

「こうゆうーのは風紀委員とかに任せればどうだい」

「いえ、心配はいりませんので」

「うーん。星川が気になるのならいつそのこと一緒に登校したらどうだ？」

「なっとな何を言っているんですか！私は教室へ戻ります！」

脱兎の如く綾は走っていった。

「廊下は走らないようにー」

教師は間抜けな声で言ったのだった。

チャイムが鳴り響く。

辛うじて俺たちは教室へ入ることが出来た。
担任はまだいない。

「ふっ、セーフね」

「鳴った後だから…アウトだな」

「先生がいなければいいのよ」

唯は見た目に似合わない台詞を言う。

普通に見てれば優等生なのだが。

成績も悪い方ではないらしいが、言動がどうもな。

たぶん、昔からこうだった。

「皆おはよう。明日は休日だから、今日も我慢しろよ」

担任の適当な挨拶により、俺の学校生活が開始された。

第三話

あつという間に午前の授業が終わり、昼食の時間となった。

「私はまた食堂に行くけど…事はどうするの？」

「玲の弁当がある。屋上に行ってくる」

「そっか。それじゃあね」

笑顔のまま唯は去る。

翔によると食事の時間では機嫌がよくなるそうだ。

今もその状態なんだろう。

「往くか」

そして俺も教室から移動した。

屋上はあまり人がいない。

こんな辺鄙な場所で食事をする人がそもそもこの学校では少ない。室内で済ませて友達と仲良く話す方がいいということだろう。

「ん…？」

どうやら先客がいたらしい。

その人の邪魔にならないようこっそり移動したつもりだった。

「あなたは…星川くん？」

「綾先輩？」

こんな所ではすぐに気付かれてしまう。

それにしてもこんな所で綾先輩に接触するとは思ってもいなかった。

「意外ですね。…綾先輩がこんな所で食事とは」

「別に私だってここでも食べます」

「俺も人のことは言えませんが、気にしないでください」

俺は何気なく先輩の横に座った。

「…なんですか先輩？」

「え？そ、その…何でとっ、隣に？」

「…？特に理由はないですけど」

理由はわからないが、どうやら先輩は落ち着きがないようだ。さつきから弁当を食べていないし。

…そついえば。

俺の視線は弁当箱へ向いた。

「先輩は自分で作るんですか？」

「え？ああ、お弁当のこと？いいえ、これは家政婦が作ってくれるの」

そして今気づいたかのように先輩は俺の弁当を見る。

「ああ…これは、妹が作ってくれたやつです」

「妹さんが？仲がいいんですね」

「もちろんです」

先輩の仲がいいんですねという台詞に条件反射で即答した。

珍しく先輩は驚いたような表情をしている。

「そ、即答されるとは思ってたわ」

「なぜです？本当のことですか」

「だって、ほとんどの人はこういうことは少し恥ずかしがりますし…。気を悪くしたかしら？ごめんなさい」

「いえ。ところで先輩もそついう仲が良い人をつくってはどつです？」

「え？」

「率直に言つと彼氏とか。綾先輩ならすぐにできるんじゃない？『知人』として応援しますよ」

「~~~~~！」

この言葉のどこがいけなかったのだろうか。

先輩は機嫌悪そうに戻ってしまった。

やっぱり嫌われているのだろうか。

「…食べるか」

休み時間のことも考え、少しペースを上げて再び食べ始めた。

昼食後やることもなくなった俺は教室へ引き返すことにした。
その途中、廊下で翔と出くわした。

「よう」

「翔か。…こんなところでどうした」

「ああ、トイレの帰りだ。ところでお前、なんかやらかしたか？」
どうということかと訊いてみた。

どうやら先程、綾先輩の憤慨した様子で去ったところを何人もの生徒が目撃したとのこと。

そして綾先輩がそんな姿を見せるのは基本的に俺が原因だと周囲が理解している。

そのため、怒っている原因は俺にあるんじゃないかと、大半は思っているらしい。

「迷惑だな。俺のせいにするなんて」

「お前じゃないの？」

「…俺だと思う」

「やっぱしな。一応、謝罪しとけよ？」

「機会があれば…」

まさかあんな短時間で起きたことが広まっているとは。

もしかしたら今までにもあったのかもしれない。

「それにしても、やっぱり綾先輩は凄いな…。あの人のこととなる
と、生徒が活気づく」

「まあ、そりゃそうだろうな。結構な数がファンクラブの会員らしいぞ？」

「クラブ？そんな部活あったのか…」

翔は苦笑いをする。

「どうやら非公式の集まりらしい。」

確かに綾先輩がそんな部活を許しそうもない。

「お前は気をつける。目、付けられてるからな」

「俺が？本当か」

「ああ。だつてお前、紺野先輩と仲良さ気じゃんか。下の名前で呼んでるし。軽く嫉妬されてんだよ」

「それくらい」

「そういえば、先輩の友人らしい人以外は『綾』と呼んでいるところは見えない。」

みんな「紺野」と苗字で呼んでいた気がする。

「ある意味、お前は紺野先輩に認められてるのかもな」
肩をぽんと叩かれた。

今まで考えたこともなかった。

どの時からだろう。

あの人を綾先輩と呼び始めたのは。

当初は紺野先輩と呼んでいたはずだ。

それは単純に下の名前を知らなかったからだが。

確か…そうだった。

あの日からだ。

中学の卒業式。

あの日のことを忘れるなんてな。

「俺…謝ってくる」

「そうか？よし行ってこい。がんばれよ」

『がんばれよ』の意味はわからなかった。

俺は早足で生徒会室へ向かった。

生徒会室の近くまで来た。

曲がり角を曲がればすぐだ。

そして俺はそのまま早足で曲がった。

「きゃ」

「つと…すまない」

そして誰かとぶつかった。

謝りながら手を差し伸べた。

「すみません…」

愛想よく笑いながらその少女は謝る。

名札には『井上』と書かれていた。

「こっちこそ…。その、井上さん」

「え？あ、名札か。びつくりしました、私の名前知ってるから他に知りようがない」

「それはそうですよね。えっと、あなたは…あれ？名札は付けてませんか？」

「そういえばこの前取れてしまったままだ。」

「えっと…俺は星川 雫だ」

「あなたが星川さん。なるほどなるほど」

井上さんは興味深そうに俺を見ている。

あまりこういうのは慣れないから恥ずかしい。

「俺のこと…知ってたか？」

「はい。紺野先輩から聞いてます！」

「綾先輩から…？もしかして生徒会の関係者？」

「友達が役員で、私も手伝わせてもらってるんですよー」

「なんだか微妙な位置づけだなと思う。」

「とりあえず先輩がいるか訊いてみた。」

「はい、いますよ。少しご機嫌斜めですけどね」

苦笑いをしながらそういう。

「どうやらまだ怒っているらしい。」

「そこまで気分を害することを言っただろうか。」

「そういえば星川さんは紺野先輩と同じ学年じゃないですよね？」

「ああ。俺は一年だ」

「どういった接点があるんです？」

「中学からの顔見知りだ」

「嘘は言っていない。」

「でもよく冗談だと思われる。」

「あ、なるほど。お引止めしちゃってごめんなさい」

「いや。こっちこそ悪かった」

「それじゃあ。あ、名札ちゃんと制服に縫ってくださいねー」
そう言い残して去っていった。

元気な子だったと思う。

リボンの色からして同学年だろうな。

そんなことを考えながら生徒会室の前まで来た。

ノックをすると先輩の声が聞こえた。

扉を開けるとそこには綾先輩だけだった。

その綾先輩は驚いて俺を見ている。

「ほ、星川くん？」

「綾先輩。さつきはすみませんでした。なんか…怒らせたようで俺が来るとは思ってたよ。戸惑っている。」

「わざわざそのために？」

「ええ。そうです」

「そ、そう。…別に、怒ってないわよ？」

「そうですか。じゃ」

怒ってないらしいから帰ろうとした。

だが腕を捕まれる。

「ちょっと待ちなさい」

「…何か？」

「『何か？』じゃないでしょ。なんであなたはそう…。もうすこし気を使うとか考えないの？」

「思いません」

心の底からの本音を伝えた。

だって怒ってないと言っていたし、もう用はない。

「そこは気を使うところよ」

「はあ…そうですか」

「ええ。実は丁度、書類の整理をしていたの。手伝ってくれないかしら？」

『丁度』の部分を強調する綾先輩。

俺は溜息を吐いてそれを了承した。

五分が経過した。

そろそろ休み時間も終わりだ。

「助かったわ」

「ところで綾先輩。役員以外の奴もよくここに手伝いに来るんですか？」

「そうね。でもあまりいないわ。どうしたの？」

「いや、井上という女子がここで手伝いをしているとか……」

「井上さん？ああ、井上いのうえ茜あかねさんのこと？」

「たぶん……その人」

下の名前は聞いていなかった為知らない。

たぶん同一人物だろう。

「彼女には感謝してるわ。そういえば、井上さんには兄がいるらしいわよ」

「兄？ここの生徒……ですかね」

「ええ。私と同じ学年よ。確か晴彦はるひこって教えてもらったけど。ずいぶんヤンチャらしいしよく友達と漫才をしてるとか……」

当然というか、知らない人物だ。

だが兄妹がいるということで親近感を覚える。

というか、漫才はないと思う。

おそらくただ弄られているだけだと考える。

「そろそろ戻ります……」

「そうね。今日は助かったわ。これであとは遅刻しないようにしなさいね？」

「検討します」

まあ意味ないだろうけど。

適当に返事をして俺は生徒会室から出た。

第四話

教室まで戻る途中、何気なく携帯を取り出す。

一件のメールが着ていた。

それは玲からのものだった。

着信時間は五分前。

手伝いをしていたせいで気がつかなかった。

「五分も放置するなんて…なんたる失態だ…」

今までに三分以内で返してきた記録が今破られた。

まずは内容を見る。

どうやら今日は部活のミーティングで遅れるとの事。

ちなみに帰りも一緒に帰っている。

俺は終わるまで校門で待っていると返信しておいた。

教室へ戻り席へ座ると返事が着た。

内容は『ありがとう』の一言だけ。

でもそれが有難すぎて涙が出そうだった。

「あれ、どしたの事？」

「感激してるんだよ、唯…」

「そ、そうなんだ」

状況が読めない唯はただ苦笑いをするだけだった。

そしてようやく下校時間になった。

翔と唯はそれぞれ部活やら用事やらで一緒には帰れない。

家が近いからいつでも会えるが。

さっさと下駄箱に行き中学まで向かう。

一応母校である中学校だが、よく玲の迎えやらで行っているので懐かしさがゼロだ。

「……………」

無言で待つ。

時折、下校する生徒が珍しそうに見ている。

確かに高校生がこんなところで何してるんだと思う気持ちはわか
らなくもない。

一時間半だろうか。

それぐらい待ったと思う。

自分でもよくこれだけ待ったなあなんて思っていた。

そんなとき突然女の子から声をかけられた。

「お久しぶりです雫先輩！」

「葉月ちゃんか。…確かに久しぶりだな」

彼女は榛原 葉月はづきという玲の友達だ。

この学校に居た時はそれなりに会っていた。

受験が迫る頃になると、徐々にその回数も減っていた。

「玲ちゃんならもうすぐ来ますよ？」

「そうか。ところで」

「玲ちゃんのことなら心配いりませんよ」

先回りされた。

話の早い子で助かるが。

何のことかというと、玲に言い寄る男たちのことだ。

葉月ちゃんには駆除してもらってる。

表現の仕方はあれだけど、穏便な方法だ。

「そういうば雫先輩って未だに独り身ですか？」

馬鹿にされた笑みが向けられる。

でもなんだか逆にそれが微笑ましい。

身内以外では葉月ちゃんは数少ない異性の知人だ。

だから新鮮な気持ちになる。

「俺は異性と付き合えるほど度胸はないんだよ」

「それは否定しません」

即答で返された。

別にいいのだけれども、これが翔だったら蹴るかもしれない。

「でも雫先輩がその気になれば面白い光景が見られそうなんですけどね」

「面白い？例えば」

「例えばですか？んっふっふ、それはごく身近に起きるようなものです」

「……………」

キーワードは身近、か。

それでもって面白いと来た。

嫌でも『あの人』しか思い浮かばない。

でも葉月ちゃんとは接点ないだろう。

となると誰だろうか。

身近、身近、身近…。

「先輩、難しく考えすぎい」

「兄さん」

葉月ちゃんが呆れたあと玲が走ってきたところだった。

「お姫様が来ましたよ」

からかう様に葉月ちゃんは言った。

「お待たせしました。でも葉月ちゃんがいたなら退屈じゃなかったよね」

「私もついさつき来たからそうでもないよ。それじゃお二人とも、またね」

「うん、また明日」

「またな。葉月ちゃん」

葉月ちゃんは自転車に乗って帰っていった。

「相変わらず仲がいいみたいだな」

「うん。親友だもん」

「そうだったな」

こんな笑顔にしてくれている葉月ちゃんには本当に感謝してる。

あの子が男だったら玲の彼氏でも文句はない。

「兄さんも葉月ちゃんと仲よく何の話してたの？」

「ん？まあ世間話を」

俺たちは仲良く肩を並べて帰宅した。

第五話

翌朝。

身体が軽く揺さぶられて俺は重たい目蓋を開く。

「おはよう、兄さん」

珍しく玲が俺の部屋にいた。

学校はないけど、寝すぎるのは許してくれないようだ。

「兄さん、寝ぼけてる？」

「…少し」

まずはベッドから出る。

着替えようと服を脱ごうとしたが、昨日の夜から制服のままだったことに気がつく。

そういえば昨日は徹夜で勉強していて、そのまま疲れて眠っただ。

不思議そうに見ている玲にそれを伝えた。

「へえ、兄さんはやっぱり偉いね。でもシャワーはしてよね」

「悪い。そうするよ」

褒められたことに感動しながら、着替えを持って風呂場へ向かった。

そして用を済ませ戻る。

「改めておはよう兄さん」

「…ん」

パンを頬張りながら声を出す。

注意されてすぐに飲み込んで改めて言いなおした。

両親はまだ寝ている。

夜遅くまでの仕事だから休日は早起きではない。

「今日もいい天気だね」

「…そうか？」

曇りのような気もする。

雨じゃないだけましか。

玲もパンを食べ始めた。

それを見ていると、小動物を見ているようで微笑ましい。

傍から見ればそんな俺は奇妙な男に見えるだろうが。

「そつだ、兄さん。私この後葉月ちゃんと遊ぶからね」

「この家で？」

「うん」

あの子が家へ尋ねてくるなんて最後はいつだったか。

ほとんど玲がお邪魔させてもらっていたから尚更。

「…じゃあ、俺は外出する」

「え？いいんだよ気を使わなくても。むしろ兄さんが居た方が葉月ちゃん喜びそつだし」

「いや…やつぱり出かける。ただ両親に迷惑かけない程度に遊ぶんだぞ」

「わかってるよ」

ひとつひとつの反応が微笑ましい…。

「じゃあ出かけてくる」

「いってらっしゃい。気をつけてね」

朝食を終えると準備をしてすぐに外へ出た。

曇りのため、爽やかな日差しはない。

「あつれ〜？雫がこんな時間帯に外に出るなんて…」

「そついうお前もな…。唯」

「あれ、そうかな？」

何て巡り合わせだろうか。

もう顔も見飽きたような幼馴染と鉢合わせした。

「これから買い物？」

「まあ…散歩にでも」

「年寄りっぽいね」

散歩くらい若者もするはず。

そう思っているのだけど、間違いなのか。

唯はなにやらポケットから携帯を取り出し電話をかけた。

「…誰に電話してるんだ？」

「翔。なんか雫一人じゃかわいそうだから」

「別に俺は…」

「あ、もしもし」

結局このあと、いつもの三人組で出かけることになった。

「久しぶりだよな。俺たち三人で出かけるのって」

ふいに翔がそんなことを言い始めた。

確かにその通りだけど。

「そうよね。学校行事とか翔は部活とかで時間取れないし」

「そういう雫も大変じゃないか？お姉さんのこととかで…」

唯には姉がいる。

俺たちは幼少時代に世話になった。

今現在、柊家では姉の進路方針について議論中らしい。

ちよつと空気がピリピリしているとか。

「あの人のことだ。どうにかなるだろうな」

「雫が言うと、本当にその通りになるからな」

「侮辱されたのか…？」

「逆よ」

その後も俺たちは何気ない会話をしながら街を歩いた。

「じゃあね雫」

「またな雫！玲ちゃんに迷惑かけるなよ？」

「またな。あと翔、お前は余計なこと言うな」

様々な所を巡り終え昼には帰宅した。

玄関へ入ると、家族の物以外の靴があった。

「葉月ちゃんか…」

どうやらまだ居るらしい。

挨拶でもしに行くべきだろうか。

靴を脱いで玲の部屋の前へ行ってみた。

二人の声が聞こえるので、やはり遊んでいるようだ。迷いを消してノックをした。

「玲。俺だ」

「兄さん？ちよつと待って」

本当にちよつとした間を空けて玲が扉を開いた。

「何か用？」

「大した用じゃないんだ。…葉月ちゃんにでも挨拶しようと思っただけだ」

「雫先輩にしては良い心がけですね」

話を聴いていた葉月ちゃんが部屋の中からそう言った。

俺は部屋を覗いて見る。

寝そべって漫画を読んでいた葉月ちゃんの姿があった。

「……………」

「何ですか雫先輩？見惚れてます？」

「呆れてる」

いい年頃の少女の格好とは思えなかった。

これは偏見なんだろうけども…。

玲はどうやって過ごしているのかと少し気になった。

プライベートなことは首を突っ込まないようにしているから、よく知らない。

「あ、私は行儀よく過ごしてるの」

俺の視線で気づいたらしく、焦りながら言う。

それに葉月ちゃんが反応。

「何だか私が惨めに思えてくるんだけど」

「あつ。そういう意味で言っただつてもりじゃないよ」

「大丈夫だよ玲。私は別にへこんでないから」

そう言うものの、体勢を直し始めた。

やはり恥ずかしくなつたみたいだ。

二人の会話が始まったので、邪魔者は立ち去ることにする。

自室に戻つて最初に予習をする。

少し経つたら買つてきたおにぎりやパンを昼食として摂る。

そして再び予習やらをする。

途中で玄関の辺りから声が聞こえた。

たぶん葉月ちゃんが帰つたのだろう。

どうやら予想は的中したようで、玲がこの部屋の扉をノックした。

「兄さん、いい？」

「…いいぞ」

「失礼します」

わざわざそんな行儀の良い言葉を使う。

「そんなに気を使わなくていい」

「でも勉強中だったんでしょ？」

「たかが予習だ。それに試験前じゃないからな」

試験になればさすがの俺もあまり玲には構わない。

それなりに良い点を取っておかないと、親からの苦情がくるからだ。

しかし点数が高くても何にも評価なし。

結局はどっちでもいいんだろう。

「今更だけど兄さんって成績いいよね？」

「別に……そうでもない」

「本当？えっと、じゃあ私が前にテストだったの憶えてる？」

「もちろん」

玲のことで忘れることなどないと思つている。

もちろん、どんなに些細なことも。

これで忘れていたら恥ずかしいな。

「兄さんも中学の頃は同じくらいにテストだったよね？」

「ああ、それはな」

「その時の点数は？」

あんまり自分のことには興味はない。

だからそれだけのことでおもう出すのに苦労する。

何度が頭を捻らせて答えを出した。

「確か…合計で490点くらいだったかな…」

「うわ…凄い。ほとんどの教科満点じゃない。凄いね兄さん」

テストは五教科あった。

んで確か合計はそんなような点数だったはずだ。

満点は500点。

ただ親からは褒められた記憶はない。

だからここで玲に褒められるとは思ってもなかった。

「そういう玲は幾つだったんだ？」

「私？そのう…420点くらい？」

「…なんで自信なさそうに言うんだ」

「恥ずかしくて」

「恥ずかしいような点じゃないだろ」

言い訳みただけで、あの時の玲は体調不調で何日か学校を休んでいた。

困っていたから俺が夜な夜な協力したが、それは秘密にしておらっている。

知られると困るようなことじゃないけど念のために。

「でも…兄さんから教えてもらってこれだもん」

むしろ俺の教え方が悪くていつもの実力が出なかったんじゃないかと考える。

「俺のことなんか気にするな。次の試験に実力を出せばいい…」と思
う

「うん、頑張るね」

いい笑顔だ。

「…可愛いな」

「何か言った？」

「いいや」

こうして俺の休日一日目は平穩に過ぎていった。

第六話

日曜日。

今日が過ぎれば明日は学校だ。

少し面倒だと憂鬱になる。

でも残りの時間は有意義に使おうと思う。

街中でも散歩していようか。

「じゃあ出かける。…火には気をつけるんだぞ？」

「わかってるよ兄さん。もう子供じゃないんだから」

最愛の玲の笑顔を背に俺は外に出た。

ザーーーーー！！

扉を閉めた。

雨だった。

それはもう土砂降りの最悪な天候だった。

なぜ気がつかなかったんだろう。

寝惚けていたか。

「どうしたの兄さん？」

「いや…雨だし、家に居るかな…」

「あれ？用があったんじゃないの？だからこの雨でも出かけるんだ
と思ってたから」

期待に添えなくて申し訳ないが、特に用があった訳じゃない。

それにしてもまさかこんな天候とは気分が滅入る。

「無理して外に出る必要ないよ。家でゆっくりしてよ？」

「そうだな。そうする」

靴を脱ごうとした時、俺の携帯が震えた。
着信がきたらしい。

玲は気を使ってその場から離れた。

「もしもし星川ですが？」

『オッス！元気が青少年！わっはっは』

「さよなら」

『待て待て！切るな切るな。我が未来の息子よ！』

「どうすればそういう結果が出るんですか…？」

電話は非通知だった。

でもどこかで見覚えのある番号だったから出てみた。

結果が厄介な人だった。

この人は紺野 綾先輩の実の父である紺野 剛こんの たけしさんだ。

電話番号はどうやら前に会った時に携帯を拾われた際見られたらしい。
しい。

どこをどう伝え間違えたのか、この人は俺が綾先輩と結婚すると思っ込んでいる。

この人の暴走は娘の先輩でも止められない。

唯一止められたであろう彼の奥さんは数年前に亡くなられたそうだ。

一度、無理矢理墓参りに連れて行かれたことがありそこで知った。
その時も墓石の前で「未来の息子が来たぞー！」とか叫んでいた。
その後すぐに墓石の前で訂正した。

要するにかなり騒がしく、勘違いしている人だ。
でも悪い人ではない。

持ち前の元気で明るく振舞ってくれる。

『恥ずかしがる必要はないさ！』

「いや、別に」

『という訳で我が家へ来てくれたまえ！じゃ』

「へ…？」

用件だけ言うと電話を切られた。

掛けなおしたが電源が切られているようで、繋がらない。

「……………」

「兄さん？どうしたの？」

暫く放心していた俺を不思議に思ったらしく声をかけてきた。

それで俺は覚める。

「いや…。何かに巻き込まれようとしてるんだと思う……………」

「よく分からないけど…。気をつけてね？」

自分と血が繋がっているとは思えない程優しい妹に感激しながら、俺は傘を持ち外へ出た。

まだ雨が土砂降りだったのは言うまでもない。

「寒いな……………」

途中で風が吹いてきた。

そのせいで雨に濡れて身体が冷えた。

ジメジメしていて気持ち悪い。

目の前には結構大きい先輩の自宅がある。

飛び抜けてかなりの資産家ということはないが、一般家庭に比べれば収入も多いようだ。

ちなみに剛さんは会社を経営している。

「さてと」

俺はインターホンを押す。

一分は待たされただろうか。

家政婦のおばさんが出てきて案内してくれた。

玄関へ着くと満面の笑みを浮べた剛さんが居た。

家政婦さんは自分の仕事に戻った。

「よく来てくれた！おや？濡れているな」

「外は雨ですからね……………」

「おお、そうだったのか。これは気づかなかった！台風でも来てもらっているがな」

勘弁してほしい。

「とりあえず上がりたまえ！今からタオルを持ってこよう
そういうと剛さんは走り去った。

お言葉に甘えて靴を脱いで上がらせてもらった。

することもなく、少々落ち着かない。

そんな時に剛さんが戻ってきた。

「いやあお待たせ。はい、これで拭きなさい」

「どうも」

タオルを受け取り頭を拭く。

途中でやけに剛さんがこちらを見ていることに気づいた。

「何か…？」

「ああ、いや。気にしないでくれたまえ！そのタオルが綾の私物だ
ということとは」

「……！？」

俺はすかさずそのタオルは頭から離す。

そして直ぐに剛さんの懐へ押し返した。

これを本人に見られていたらどうなっていたことか。

玲の物でさえ使ったことはないのに…。

「と、ところで…何の用ですか？」

鼓動の早さがまだ落ち着かないが、平静を装い訊いてみた。

「ん？別にない」

「は…？」

「だから用は別にないぞ」

この人は一体、何なんだろうか。

こつという人だったと知っていて素直に来てしまう自分が情けない。

「ただ綾と顔合わせでもさせようとな」

「帰ります」

俺は靴を履こうと回れ右をする。

「まあ待ちなさい。恥ずかしいのは分かるがね、実は綾は今風邪なんだよ」

「先輩が？」

「ああ。きつと心細いだろうから見舞いをしてやってほしいんだ」
きちんとした理由があるじゃないかということはお置いておき。

それを聴いて帰るほど俺は冷酷じゃないと思っている。

だから剛さんの言う通り、お見舞をすることにした。

案内された場所は以前、一度だけ拝見したことのある先輩の部屋のドアだ。

「綾、雫君が来てくれたぞ！」

相変わらず大きな声で話しかける。

「え！星川くんが？」

中から先輩の声が聞こえた。

すぐに扉が開かれて綾先輩が現れる。

「お見舞に来ました」

「お見舞？何の？」

「何って…風邪の」

「私は元気よ？」

どういふことかと剛さんの方を見た。

同時に視線をわざと逸らされた。

填められた…。

「ま、まあともかくだ！折角だから綾、雫君を入れてあげなさい」

「え、ええ…。どうぞ」

「お邪魔します…」

俺は部屋へ入る。

香水か何かの良い香りがする。

「それじゃあパパは出かけてくるからな綾。軽くジョギングしてくる」

「いいけど…この雨の中で？」

「雨くらいどうとでもなる。またな雫くん…いや。未来の息子よ！」

「最後が余計です」

疾風の如く、剛さんは去って行った。

残された俺たちはただ無言。

元々俺と綾先輩は口数が多い方じゃない。

内心ではどう思われていることだろうか。

「それにしても星川くん。本当はどうして家に？」

「剛さんに呼ばれました」

「やっぱり…。ごめんなさいね。パパはいつもあんな感じだから」

言われなくても想像できる。

元気なのはいいことだ。

ただ限度があると俺は思う。

「こつちこそ、突然お邪魔してすみません…綾先輩」

「い、いえ。別に構わないわよ」

早口でそう言い切る。

これは少しでも早く俺との会話を終わらせたいんだろうか。

「先輩も元気なようですし…俺はそろそろ帰ります」

「もう帰るの？」

どこか寂しげに見えるのは俺の幻覚だろうか。

「ええ。これ以上お邪魔になりたくはないです」

「そんなことは気にしないでいいわ。それにこの雨だから…もう少しここで休んだら？」

「綾先輩がいいなら…」

「そうさせてもらいたいです」

正直なところ、この雨の中で帰りたくない。

こつして居座らせてもらうことになった。

だが会話は長くは続かないもので結局は沈黙の時間が続く。

綾先輩はどうも落ち着かないらしく、リズム良く指で机を叩いている。

俺は俺でこの雰囲気慣れ始め、じつと座っていた。

ただ会話がないのは少し寂しかったから話題を提供することにした。

先輩にとつてはどうでもいいのかもしれないが。

「そつえば近いうちに生徒会長選挙ですね」

「まだ先だけど、どうなるかしらね。去年はあっさりし過ぎだったけど」

生徒会長と副会長に立候補した人は綾先輩を含めて二人だった。

推薦者が一名。

梓は生徒会長が一名で、副会長が二名。

もちろんその中に綾先輩が入ったのは言うまでもない。

もうすぐで綾先輩は任期が終わりだ。

「綾先輩が入学した頃の生徒会長たちはどんな感じだったんですか？」

「あの時はまだよく知らなかったから…詳しくはないの。でも人気もあつて好かれる人だったわよ」

どんな人だったのだろう。

先輩がそう言うんだから、本当に良い人だったんだろう。

「星川君は生徒会に興味があるの？」

「え？いや…そついう訳じゃ…」

「次に立候補してみたらどうかしら？」

特に興味がないだけに、言われてもやる気が起きない。

票すら入れてもらえないんじゃないかと思つと更に気落ちする。

「実は隣のクラスで一人、会長に立候補するつて決めてる人がいるらしいの」

「もう決めてる人もいるのか…」

「私もまた立候補しようかしら」

「いいんですか、それ？」

「先生たちも許してくれるわ」

たぶん連続は事例がないと思う。

でもきつと面倒くさがって教師も了承するだろう。

また綾先輩が生徒会に入ることについては、きつと誰も文句を言わないだろう。

彼女もかなり人望があるからだ。

「ところでその同学年の人って…」

「私もあんまり話をしたことはないけど、確か名前は如月 輝だったはずよ」

「やっぱり聞き覚えがないですね…。ん？」

「どうかしたの？」

如月 輝きんづきという名前。

どこかで耳にしたのかもしれない。

学校のどこかで耳にした覚えがあるはず。

聞き間違いや勘違いかもしれない。

「もしかしたら、聞いたことのある名前かもしれません」

「そうかもしれないわね。確か彼、前まで入院してたらしいからちよつと噂も流れてるの」

「入院：？」

そうだ、思い出した。

あれはまだ春ごろだったと思う。

入学してそんなに日も経っていない時。

職員室前でその人の名前を教師が言っていた。

おそらく入院関係の会話でもしていたのだろう。

なかなか怖い顔をした教師だったのは覚えている。

「どこか体調が悪いらしいけど、詳細はさすがに聞いてないわよ」

「ともかく立候補者がいるのは良かったですね」

「ええ、きつといい競争相手になるわ」

その時のことを想像しているらしく、なにやら真面目な顔になる。

これがいつもの紺野 綾という人だ。

それにしても、この学校にはなかなか面白そうな人がたくさんいるような気がしてきた。

第七話

その後もぎこちなかったが、綾先輩と会話を続けていた。気付くと最初の頃よりも雨が弱まってきた。

そろそろ帰ることを綾先輩に伝えた後のことだった。

「ただいま帰ったぞー！」

「来た……」

俺はついそう呟いてしまった。

記憶の彼方へ行っていたが、剛さんが戻ってきたようだ。走っているのが廊下の足音で理解できる。

いつでも元気な人だと感心する。

そして意外にも優しいげなノックが聞こえた。

「何、パパ？」

「失礼。実はさつき外をジョギングしていた時」

「本当に走ってたんですね」

「そうとも雫君！雨の中のジョギングはなんとも気分爽快
なくて。実は偶然にも弟に会ったんだ」
じゃ

「叔父さんが？」

剛さんに弟がいたということは初耳だった。

かなりどんな人なのか気になる。

「ああ。で、どうやらまだ宿を取ってないらしいから、家へ泊めよ
うと思う」

「私は構いませんよ」

「よし。弟にそう伝えよう！ではまた」
颯爽と部屋から出て行く。

「……剛さんに弟がいたんですね」

「ええ。ちなみに紺野 武といます」

紺野 武たけのという人はどんな性格なんだろうか。

「やっぱり元気な人なんですか？」

「いいえ。どちらかと言えば物静かよ」

想像していたのと逆だった。

これは自分の空想だったが、剛さんと一緒の性格だとばかり思っていた。

弟さんの方はまともそうでした。

「会ってみます？」

「是非」

帰り際に俺はその武さんの顔を拝見させてもらうことにした。

「叔父さん。お久しぶりです」

「やあ綾ちゃん。大きくなったね。二年前とは大違いだ」

「武。それでその隣にいる少年が星川 雫君だ！」

「ど、どうも」

頭を下げて挨拶をする。

武さんは眼鏡をかけていて、確かに物静かな印象のある人だった。こちらの挨拶に笑顔で返してくれた。

第一印象はいい。

「君が雫くんか。兄からよく電話越しに聞いてるよ。いろいろ巻き込まれているみたいだね」

こちらの事情を察してくれているらしくそんなことを俺に話す。確かに巻き込まれてはいるのだけでも。

「兄はともかく綾ちゃんは本当によく出来た娘だよ」

「それは何となく」

「だからこれからも仲良くしてほしい」

「お、叔父さん……」

「綾ちゃんが男友達を連れてくるのは初めてだからついお願いしてしまっただよ」

男子を招いたことがなかったのは初耳だ。

綾先輩ならどんな人とも仲が良いと思っていた。

でも家にまでは招いていなかったということだろうか。

「うちの兄もああ見えて視野が狭くてね。気に入ったことにしか興味がないんだよ」

「そうなんですか？」

「だから君には何か魅力があるんだろうね。僕も初めて会ったけど、気に入ったよ」

褒められていると気がつくのに時間がかかった。

何だか恥ずかしい。

「おっと。引き止めて悪かったね。帰るのかな？」

「はい。…お邪魔しました」

「さようなら星川くん」

「また来てくれたまえ！今度は君のご両親にも会いたい」
剛さんのことは無視した。

外へ出ると雨は止んでいた。

雲の隙間から日光が出ている。

寄り道をせずに帰宅することにした。

第八話

「あれねえ。もしかして雫ちゃん？」

背後から俺を呼ぶ声。

「久しぶり〜雫ちゃん！」

「つと！」

辛うじてタツクル紛いの抱擁から逃れる。

相手は唯の姉。

柊 冬子ゆい とうこさんだった。

補足すると名前の由来は冬に生まれたからというシンプルな理由。

三人目の幼馴染でもある。

俺たちの姉みたいな人だ。

この人は唯の姉であることに間違いはないが、性格が似ていない。

でも町内では評判が良い。

どこがいいのか問われると上手く返答できない。

ただみんなを明るくする人だと思う。

俺はそれほど沢山会っていた訳ではないが、昔から人気者だった。

町内のアイドル的存在だ。

だが冬子さんはまずはこの街から出て仕事をしたいと主張している。

「あ〜。何で避けるの？」

「危険だからですよ」

「むむむ！私のどこが危険なのかな〜」

行動そのものが。

口に出して言わなかった。

言ったところで直らないし、むしろややこしくなる。

「ねえねえ。雫ちゃんは何してたの？」

「…知り合いの家から帰宅中です」

「休日だもんね〜。いいなー学生は」

「冬子さんも一応学生じゃないですか。…来年には卒業でしょうけど」

冬子さんは今は大学に通っている。

そして来年は卒業式。

これで晴れて社会人…。

あれ、想像できないぞ。

そもそも妹の唯ですら想像がつかないんだから無理もないか。

「とーつくに二十歳を超えたから、もう立派な社会人だよーん」

「立派…ですか？」

「えっへん!」

胸を張り上げる冬子さん。

立派な社会人とは思えない。

そもそもまだ学生なんだし。

口には出さないが心の中で念じる。

「そうだ〜。唯ちゃんとは仲良しだよな?」

「今更訊かれるまでもないと思いますけど」

「あの子、あれで案外寂しがり屋だから。私が出て行ったらよろしくね?」

「…出て行くって、それが前提なんですな」

「うん。ごめんね〜、やっぱりこの街に居た方がいいかな?」

「いえ、俺が決めることじゃないです」

いつまでも一緒じゃない。

だからこそ、ここで区切りを付けるのもいい教訓だ。

冬子さんも近いうちにはこの街を出て行く。

後に俺たちもそれぞれ仕事に就きあまり会えないだろう。

「ところで雫ちゃん。桂木くんとは仲直りしたのかな?」

「それも本当に今更ですね…。とっくにしました」

「よかった〜。それがとっても心残りで」

「今口から出まかせに言ったただけでしょ？」

「ありゃ？ばれちゃった？」

本当に心配してくれてはいたのだろう。

高校に入学して間もない頃、翔と喧嘩したときがあった。

理由は伏せるが、殴り合いにまで発展した。

そこを冬子さんが一喝してくれたんだった。

それでも俺と翔はギクシャクしていて、一週間はお互い無視だった。

「もうすぐ、夏も終わるね」

「…そうですね。すぐに秋です」

「そういえば。そろそろ生徒会長とかの選挙運動じゃない？立候補するの？するの、するの？」

「しませんよ。それに一年から立候補は変に目立ちますし」

そんなことないと冬子さんは言う。

実際にこの人は一年から会長をした経験があるらしい。

「ただ…既に考えてる人もいるみたいです」

「ほええ。誰、誰？」

「知らないと思いますけど……」

「お姉さんからの命令です」

なんにでも興味のある人だと呆れさせられる。

知ってどうするんだか。

「如月 輝って先輩らしいです」

「へええ。ほうほう。……誰かな？」

目を点にして俺に訊く冬子さん。

予想していたとはいえ、期待を裏切らない人だ。

俺は自分も詳しくは知らないと話す。

なら仕方ないと冬子さんも諦めた。

どうやらそこで興味が尽きたようで、最近の話題を聞かされた。

立ち話を続けて暫くし、ようやく話が終わった。

「それじゃあ、まったねえー！」

「ええ…。また」

やっぱり剛さんみたいに元気なところは変わらなかった。

第九話

休日も終わった。

俺は先週同様に学校へ行く準備に取り掛かる。

朝食を食べに下の階へ降りた。

「おはよう、玲」

「おはよう。お父さんたちもう出ちゃったよ？」

二人は既に仕事に行ったらしい。

「ご苦労様と言う機会も滅多にない。」

最後に顔を合わせたのはもう二週間前だ。

時間帯的に俺とはなかなか接触する機会がない。

「さ、早くご飯食べて行こう」

「そうするか」

俺たちは朝食を平らげて登校した。

外は程よい気温に感じた。

昨日の雨が嘘の様だ。

酷い目にあつたが、それなりの収穫もあり五分五分だった。

「兄さん。今日は私、部活ないから早く帰れるよ」

「そうか。わかった。急いで迎えに行く」

「たまには私の方から兄さんの所へ行こうかな？」

「いや、それはいい。俺から行く」

わざわざ遠回りさせるのは気が引ける。

「そう？じゃあそうさせてもらおうね」

「そうしろ。…さっさと食べて登校しよう」

早めに家を出た。

「で結局は俺らと合流する事になるんだな」

翔が俺の肩を叩きながら言った。
もちろん唯もいる。

あの後玲と別れるとまたしてもこの二人に追いつかれていた。

「今日もクールで何より」

「…唯も相変わらずその台詞なんだな」

教室へ入るといつものように席へ座り教師が来るのを待つ。

「やあ皆おはよう。休日も早々と過ぎてしまったが、今日からまた頑張れよ。連絡は以上。解散」

担任教師が去ると、すぐに始まる授業に皆備え始める。

俺も教科書やノートを机の中から取り出す。

何気なく横を見ると廊下から翔がやってきた。

「おい雫」

「なんだ、翔？」

「実はさ。宿題を忘れたんだ」

もうあと数分で始まる授業。

ちなみに翔のクラスも数学だ。

教科担任はどうやら翔たちのクラスで宿題を出したらしい。

だが翔は部活の疲れなのか忘れていたようだと分かる。

そもそもなぜ俺に訪ねてきたかと言うと、先にその宿題を出されていたから。

内容も向こうと同じようだから、写す気なんだろう。

「見せればいいのか？」

「悪いな…。恩は後で返すよ」

そう言うつと素早く自分のノートに俺の書いた内容を写し始めた。

「ほいよ。ありがとな」

あっという間に書き終える。

そして颯爽と戻っていった。

ちよつとした慌しさも消え、教室の扉が開かれる。だが入ってきたのはいつもの教師ではなかった。俺は見覚えがある。

それは綾先輩の叔父である武さんだった。

武さんは一瞬俺の方に目配せをした。

少し微笑んだ後、クラス全体に聞こえるよう話す。

「突然ですが、数学を担当していらっしやる後藤先生が急遽学校を暫くお休みします」

クラスメイト達がざわつく。

後藤という数学担当の教師は年齢も随分いつていたし体調を崩したのだろう。

ただ武さんが来るのは意外というか、全く予想外だ。

武さんは教師だったとここで初めて知る。

「そういう訳ですので、自分が代理です」

軽く自己紹介を済ませたあと、授業が始まった。

ちなみに武さんはすぐにこのクラスに馴染んだみたいだ。

「ふわぁ〜。いい先生だったみたいだな。うらやまし〜」

「欠伸しながら言うことじゃないでしょ、翔」

唯が翔へツツコミを入れた。

翔は結果的に宿題をしなくても済んだことに対して気が抜けたようだった。

というより、無駄に一生懸命になったことに後悔しているだけだ。

「ああなるって知ってたら、わざわざ写させてもらわなくてよかったぜ……」

「やっておくのが普通でしょう？ていうか、寧に感謝しなさいよ？」

「なんでお前に言われなきゃいけないんだよ……」

二人の会話を聞きながら俺は携帯を見た。

受信メールがあった。

今から三分前のものだ。

もちろん相手は玲。

どうやら葉月ちゃんの状態が悪いらしく、家まで同行するらしい。もしかしたら一緒には帰れないかもしれないと書かれていた。

「ん？どうした雫。固まっちゃって」

「もしかして玲ちゃんからのメール？」

俺は二人へ向かって頷いた。

葉月ちゃんのことにも心配なのだが、帰りに玲と一緒になれないかもしれないと思うと…。

どう解釈したのか、翔がとんでもないことを言い始めた。

「もしかして。玲ちゃんに彼氏が出来たとかの報告なのか？」

「……………」

「ちよつと翔。雫が放心状態になったじゃないの！」

「いや、冗談だったんだけど…」

「雫に玲ちゃん絡みの冗談は通じないわよ」

唯に何度か揺さぶられて意識を取り戻した。

第十話

この時間は体育だ。

今日の種目は円盤投げ。

1キログラムの円盤をただひたすら投げた練習していた。
ちなみに翔たちのクラスと合同だ。

この時間はほとんど自由みたいなもので、大半は会話をしていた。

「この種目の測定って、いつやるんだろうな？」

翔が訪ねてきた。

「確かもう四回くらいしたらって言ってたぞ」

「少ないんだかわかんないなあ」

「次の種目はハードルだったな」

「うわ、俺苦手なんだよな…。もう全部倒しながらゴールしようかとも本気で考えてたし」

「わざとじゃなければいいんじゃないか？」

「さすがに人目が気になるんだよ。教師と二人きりならやるぞ」

「…まあ、そんな機会はないと思う」

俺なら教師と二人きりなんて面談で十分だ。

会話の途中で唯が入りこんできた。

「二人とも。今は授業だよ」

「とかいってる唯だっさっきからさぼってんじゃねえかよ」

「翔には言われたくないわね。ところで稟、昨日姉さんに会った？」

「会ったけど」

「やっぱりね。やけに昨日はご機嫌だったから」

うんざりした表情で唯は言った。

「へえ。冬子さんに会ったのか？最後に会ったのはいつだったかな

あ

「あれ。翔は会つてるとばかり思ってたけど、そうでもないのね」
「何でそう思った？」

「だって翔って姉さんのこと好きなんですよ？」
すると翔は顔を朱に染めて反論した。

「ちっげーよ！」

「うわぁ。古典的ね」

「そうだったのか…。翔も変わり者なんだな」

「あのなぁ…。確かに好きだったけどよ、それは昔の話だったの。
今は別にそんなことない」

「あらら。それは残念ねー」

「その棒読みがムカツク…」

俺は二人の交際している情景を想像してみた。

なんだか冬子さんが仕切ってる様しか想像できなかった。

次に暇潰しで剛さんと組み合わせしてみた。

「…悪夢だな」

「え？何か言った事？」

「何でもない」

凄い展開になりそうだ。

主に俺達への被害が。

恋人より親子という表現の方が正しいかもしれない。

そう考えると、綾先輩は本当にあの人が育てた人なのか不思議だ。
性格が一致しない。

「ところで翔。危ないわよ」

「は？うっ！！」

ゴスツと低い音が聞こえた。

そして翔は倒れる。

「だから言ったのに」

「円盤が当たったみたいだな」

「これは痛そうね」

「俺じゃなくて良かった」

「同感よ」

「冷静に分析してんじゃねえ……」
その言葉を最後に気絶してしまった。

翔を保健室へ運んだ。

途中まで唯にも手伝ってもらったが、先に戻らせた。

戸を開けると生徒がいた。

「君は…確か井上さん」

「あ。お久しぶりです」

井上 茜。

先週ぶつかった同級生だった。

「どうしてここに？」

「保健委員みたいなものですよ。先生は今少し出てますからいませ
ん」

確かに教師の姿はない。

井上さんに留守番を頼んだということか。

「それにしても生徒会の手伝いをしたり、保健委員をしたり……。信
用されてるんじゃないか？」

「うーん。そうなのかな？ たぶん、私が兄の妹だからですね。兄は
有名ですから」

「兄って…晴彦っていう人だったよな？」

「あ、知っていたんですか」

名前は綾先輩から聴いただけだから会ったことはない。

だからどんな人なのかは想像できない。

ただ親しい友人と漫才をしているとか綾先輩が言っていた。
そのことを話してみた。

「漫才。ある意味、そうなのかも」

現場によく居合わせているようで、思い出し笑いをしている。

「そろそろ予鈴がなるから、私は戻るね！」

「ああ…。悪かったな、わざわざ」

「困ったときはお互い様だよ！それじゃあお先に」
残った俺はベッドに翔を乗せた。

丁度そのとき保険医が戻ってきた。

「あら？どうしたの？」

「こいつが気絶したんですけど…」

「そう。後は任せて」

「すみません」

あとはその人に任せた。

体操着だったし、事情は察してくれたと思う。

第十一話

保健室から教室へ戻ってきた。

昼休みということもあり既に昼食を食べている人がいる。

「翔は大丈夫だった？」

「多分。すぐに目を覚ますと思う」

唯は安心したようだった。

それにしても妙に元気に見えるというか。

食事の時間は機嫌がいいとは本当のようだ。

幼馴染である俺が今更そんなことに気がつくのもおかしい話だ。

やはり翔は人をよく見てる。

それに比べて俺は二人よりも妹のことばかり気に掛けていた。

だから他人のことは、幼馴染のことでさえもよく分からないことがある。

俺は中学の時にあった出来事を思い出した。

「どしたの？」

「…いや。ちよつと考え事」

「玲ちゃんのこと？」

「まあ…」

翔と喧嘩した日のことも思い出した。

原因は俺にあるし、唯にも関係していた。

あのときの翔は怖かった。

「弁当を食べてくる」

「また屋上だよな？いつてらっしやい」

俺は唯に見送られながら、屋上へ向かった。

「あら星川くん」

「綾先輩…ですか」

前と同様の位置に綾先輩がいた。

「先輩って、屋上によく来ましたっけ？」

「いいえ。ただ先週末来て気に入っただけよ。明日からは教室に戻るけどね」

「そうですか」

俺も同じようなものだから別に可笑しいとは思わない。

玲とは中学の時によく屋上で談笑していた。

もちろん、葉月ちゃんも含めて。

高校へ入ってから綾先輩とここで会うまで一人だった。

この学校に入って綾先輩に最初にあつた場所は生徒玄関だった。

「ところで星川くん。今日も遅刻しそうになつたんですって？」

「……………」

会って早々お説教だろうか。

ああ、そう言えば。

初めて会った時も説教をされていた気がする。

その時感じたのは迷惑心ではなく感謝の気持ちだった。

俺は親から叱られてもそれが上辺だけだと知っていた。

でも綾先輩に怒られて気がつく。

自分の為に叱ってくれる人もいるんだと。

俺にとつては嬉しいことだった。

俺は叱られた後、先輩にお礼を言った。

その時の綾先輩は面食らった顔でその俺の言葉に驚いていた。

叱っていた相手が急にお礼を言ってきたのだから。

それとも俺という人間がそんなことをいうようには見えなかったから意外だったのか。

俺は綾先輩への感謝の心を忘れていない。

「聞いているの、星川くん？」

「え…あ」

呼びかけに我に返る。

聞き逃していた。

「まったくもう。星川くんは相変わらずね」

「すみません」

「素直で結構よ」

俺はいつの間にか綾先輩との会話が楽しくなっていた。

翔と唯、玲や葉月ちゃん。

彼らとの会話も楽しい。

でもこの人と話すとき、それとは別の気持ちがあるような。そんな気がしていた。

「そろそろ戻りましょうか」

「そうですね。…長話させてすみません」

「私は楽しかったわ」

先輩の素直な笑顔を見たのはこれで何度目だろう。

第十二話

放課後、俺はメールを送る。

玲は早退するようなメールをこっちに送っていた。

今のはその確認だった。

すぐに返事は来て、今は葉月ちゃんの家にいるとのこと。

そういう訳で俺はかなり久々に一人での帰宅になる。

翔や唯はすぐに帰るわけではないから誘えない。

俺はふと『ある場所』のことを思い浮かべた。

そして俺は校門から出た。

行き着いた先は小さな公園。

それなりの遊具もあり、気軽に遊べる。

今は少しだけ子供たちが遊んでいる。

「懐かしいな」

ここにはまだ幼い頃によく来て遊んだ。

玲に翔と唯。

主にこの面子だった。

そしてたまたま冬子さんともここで合流したこともある。

最初会った時は恐くて唯と翔の後ろで様子を見ていた。

そんな俺に気がついた冬子さんは持ち前のあの妙なテンションで

俺を遊びに誘った。

俺は流されるままあの人に付いて行った。

楽しかったが、終わってみると疲れの方がでかかった。

翔はそんな俺を見てゲラゲラ笑い、玲は心配そうに俺を眺めていた。

そして原因の妹である唯は姉である冬子さんに注意していた。

だが冬子さんは悪びれた様子もなく俺へ向かって笑顔を見せた。その時の俺は、ただ息切れが治るまで休んでいた。冬子さんが原因でブランコにトラウマが出来たのは皆知っている。今でこそここへもあまり立ち寄りらない。あの頃はこの時間帯まで遊び、みんな帰宅した。でもあの日を除いて俺は残っていた。

あの日はみんなが帰ったあと俺はここに居た。玲のことは冬子さんたちに任せてもらった。珍しく俺はここに残りたいと思っていた。昼時のように騒がしくなく、風変わりする公園。それがなんとなく物珍しくて居座りたいと思っていたのかもしれない。

徐々に他の子たちも家に帰っていき、更に喧騒が止む。寂しくなってきた俺はそろそろ帰ろうかと思いはじめた。だがある子を見て気が変わった。その少女は同じくらしい年代の子で、一人ブランコに座っていた。ブランコにトラウマが出来たばかりだったが、何気なく俺はその子へ歩み寄った。

「…どうかしたの？」

俺はそう訊いた。

表面上は普通だったと思う。

でも恥ずかしかったのが強烈に印象に残っている。その少女はそんな俺を不思議そうな眼差しで見る。胸に抱いた熊のぬいぐるみを強く抱きながら。

「…ママを待ってるの」

その子は小さな声で返事をした。

熊のぬいぐるみを更に強く握りながら。

「へー…。ところで、そのクマかわいいね」
柄にもない台詞。

「…うん。ママが買ってくれたの」
その少女は少しだけ緊張が解れたようだった。
俺もそれに気をよくして話を続けた。

学校のことや周りの人のこと。

少女も同じように学校でのことを話す。

記憶に残っている内容は、その少女の学校のことだった。
どうやら俺が通っているところとは違うようだった。

少女と会話をしていた時、その少女が道路の方へ瞳を向けた。

「あ、ママだ」

「もう帰るの？」

「うん。また会おうね」

「…うん。またね」

俺たちは指切りをする。

俺は玲たち以外とやるのは初めてで、柄にもなく緊張した。
たぶん向こうもそうだったんじゃないかと思う。

少女は俺に小さく手を振り親の方へ駆けていった。

その時見せたあの笑顔が忘れられない。

それ以来その子と会うことはなかった。

その後も休日にはいつもこのようにここへ来た。

みんなそれぞれ遊び始め、俺も何かしようかと思った。

そういう時はふとブランコを見る。

あの時の記憶が蘇る。

俺はブランコにトラウマがあった為、それで遊ぶことはしなかつた。

でも見るたびに思い出す。

あの子とのことを。

近くにあるベンチに腰を下ろした。

今更こんなことを思うのもどうかと思うが、もしかしたら…。

俺はあの子に一目惚れしていたのかもしれない。

今となつてはどうすることもできないが。

でも、玲に関わる人以外でああやって会話をしたのは数少ない。

貴重な体験だったからこそ、記憶に焼きついているともいえる。

ここへ来たらあの子のことを思い出していたから。

勿論、そんな素振りなんか周りには見せなかった。

「皆には言えないよな…」

実を言えばこの事は自分だけの思い出にしたいという理由もある。いつも玲には自分のことを打ち明けていたが、これだけは別だった。

あの頃から随分経っている。

その子はもうこの近辺にはいないのかもしれない。

もしかしたら既に別の男と付き合っているかもしれない。

あのと名前だけでも訊けばよかったと思う。

「ふああ…」

眠たい。

年下の少年少女たちの元気な声が丁度良いBGMに感じた。少し寝ることにした。

第十三話

隣で声がする。

「栗ちゃ〜ん。栗ちゃ〜ん」

「ん…。と、冬子さん？」

いつの間にか公園の入り口に冬子さんが来ていた。

彼女は俺の横に座る。

手に持っているアイスを食べながら俺に問いかける。

「なにしてるのん？」

「休憩です」

「疲れてるの？」

「少し…」

冬子さんはニヤニヤしながらアイスを舐める。

なんか企んでいそうな顔だった。

「えいつ」

「うわっ!？」

案の定。

彼女はそのアイスを突然俺の顔面にぶつけた。

おかげでソフトクリームでベタベタだ。

「何するんですかっ!」

「落ち込んでるみたいだから元気付けようとしただけだよん」

「行動がおかしいですよ」

俺は蛇口へ行き顔を洗う。

「うふふ、ごめんね〜。つい苛めたくなっちゃって」

「つい、でこんなことしないでくださいよ…。それに食べ物粗末にするなって、唯にも言われてるはずでしょうが…」

「うう。ごめんちゃい」

「…反省してないでしょ？」

俺は溜息を吐きながら再び座る。

形が崩れたアイスクリームを気にせず冬子さんは食べる。
俺の顔についたのに気にしないのか。

「元氣ない理由、教えてくれない？」

「そんな大したことじゃないです」

「そう？無理しないでね」

きつとそれなりに心配してくれているんだ。

でも昔一度会ったきりの少女について考えていたなんて。
知られれば絶対に弄る理由として使ってくる。

翔にでもばれたらとんでもない。

「そう言えば玲ちゃんいないね？」

「ああ、玲は友達の家です」

「へえ…。もしかしてそれが原因？」

「いや、違います」

「ありやりや。はずれちゃった」

全然残念そうじゃない冬子さん。

俺は立ち上がるとそろそろ帰ると言った。

「うん。またね雫ちゃん。私はブランコであそぼっと」

俺はその単語に鳥肌が立つ。

少し離れると背後で子供たちの歓声が。

聞こえないふりをした。

家に着き俺はすぐに部屋に閉じ籠る。

まずは眠たかった。

夕日を見たからか、それとも冬子さんの相手をして疲れたからか。
ともかくすぐに俺はベッドに入り目を閉じた。

それから数時間後。

夢は見なかったと思う。

目を覚ましますはそんなことを考えた。

俺は居間へ行く。

「あ、やっと降りてきた」

「玲？いたのか」

玲がそこにいた。

どうやら葉月ちゃん宅から戻っていたようだ。

「葉月ちゃんの容態は？」

「うん。ただの風邪みたい。明日には治りそうだよ」

「それにしてもあの元気な子が風邪か…。玲も気をつける」

「うん、兄さんもね」

気を使ってもらえるなんて、なんて幸せなんだ。

でも時々思う。

このままでいいのかと。

いつかのために、俺は妹離れをしなければならない。

それは玲に恋人ができた時のために。

いつまでも兄が図々しく近くにはいれない。

わかっているけどなかなか出来ない。

玲本人にもその話はした。

その時は無理しなくてもいいと言われた。

結局その言葉に甘えてしまい、こんな有様なんだが…。

「どうかしたの？」

「なんでもない」

玲に恋人ができるまではこれでいいかと、甘い考えも持つ俺だった。

第十四話

「やあおかえり、綾！」

「ただいま。パパ」

いつもの威勢のいい父の姿がある。

小さい頃は友達はこの父を恐れていた。

自分は幼いころからの慣れで、これが普通と思っている。

確かに体は大きいし、声も低くて恐いかもしれない。

どうやらこの父は苦手意識を持たれている人が多いというのは知っていた。

でも根は優しい人で、母のことを今でも大切に想っている。

少しすると家政婦の人が父に相談を始めた。

たぶん仕事絡みだと思う。

私はとりあえず自分の部屋に行くことにした。

すると父は、思い出したと言って私を引き止めた。

「綾。武の方はどうだ？」

「叔父さんは慣れ始めてるみたい」

「そうかそうか。それとだな」

父はコホンと小さく咳払いをする。

「近いうちに従妹が来るぞ！」

「従妹って……あの子が？」

父の言う従妹はこの街には住んでいない。

だからもしかしたら遊びに来るついでにここへ寄るのかもしれない。

普通はそう思うけれど、実は叔父である武さんの実の娘である。

その父親が今のところこの街で生活している為、娘もそれに合わ

すつもりなのかもしれない。

私の考えは的中した。

「しばらく武共々、この街で過ごすらしい」

父は続ける。

「あいつも都合があつて、娘のあの子はこっちで面倒を看ようと思
うんだ」

「私は別にいいけど、あの子はいいの？」

「向こうもそれに賛成しているらしい。とりあえず部屋は空いてい
る所でもいいな？」

「それはもちろん構わないわ」

従妹とは叔父と同じくここ数年顔を会わせていない。

時々、電話越しでは話していたけど。

「学校の方が、まあ…転校することになるわけだ」

「それで、私と同じ学校というわけね？」

「そういう訳だ。いろいろ、案内やらしてあげてほしい」

あの子のことだから大丈夫だとは思う。

けれど引っ込み思案なところがあるから心配なんだと思う。

そこは私も同感だけど。

「もし一人が大変なら、雫くに協力してもらおうといい！」

「星川くん…？」

忘れかけていたけれど、父はなぜか星川くんにご熱心に構う。

拳句の果てに私の婿になれとせがんでいる。

向こうにとつても迷惑なはず。

何度も説得はしていたけど、そんなの聴く様な人ではなく…。

「彼は優しいからね。特に妹には！」

「まあ、確かに…そうね」

彼は一見無愛想。

でも妹さんのことになる人と人が変わるといふ情報もある。

実際、そんな感じではある。

「学年はとりあえず雫くと一緒だし、それがいいと思うんだがな。

「どうだ？」

「彼にも事情があります」

「そんなものはない」

「え？」

キツパリと言った父に驚いた。

「彼は妹がいない学校で用なんてあるはずがない」

この父は真面目な顔でそう言い放った。

聴き方にもよるけど、侮辱しているようにしか思えない。

でもこつ聴くとそれだけ妹さんを大事にしていると分かる。

そもそもなぜうちの父がこんなに詳しいのか疑うべき点はあるけど。

「詳しい話は明日にでもしよう。ちょっと出掛けなければならぬからな」

「気をつけて」

「車に撥ねられそうになったら弾き返してみせるさ！」

本気でやりそうだから心配。

ともかく久しぶりに会える従妹のことでは今は思考が一杯だった。

彼女はきつと変わっていないはず。

トレードマークであるあの『クマのぬいぐるみ』を抱えているん

だらうと私は思っていた。

紺野 皇月。

それが従妹である彼女の名前。

第十五話

そして一週間後。

気分爽快な朝だ。

俺はそう思いながら登校するため仕度を済ませる。
なぜか今日は良い日な気がする。

それを玲に気づかれたらしく、そのことを訊かれた。
気分的な問題だからなんとも言えないと答えたが。

二人でいつも通りに登校。

一見は何気ない朝だった。

「おはようございます雫先輩！あとついでに玲ちゃん！」

「ん…？ああ、おはよう葉月ちゃん」

「おはよう。なんで私がついでなのかな？」

珍しく朝から葉月ちゃんと会った。

あれ以来風邪も長引くことなく元気になっていたようだ。

「やだなー玲ちゃん。私が雫先輩大好きっ娘なの知ってるじゃない」

恥じらいもなくそんなことを公共の場で言う葉月ちゃん。

俺はいつものことだと思って普通にしていた。

その俺とは反対に、玲は顔を赤くして否定する。

「そんなの初めて聞いたよ！」

「あれ？そうだっけ。…くすくす」

「そうなの！」

そんな会話をしながらいつもの分かれ道。

二人は楽しそうに話ながら中学校へ行った。

俺はその風景を見ながらしみじみと思った。
葉月ちゃんが玲の友達で良かったと。

学校へ着き教室へ入る。

今日は珍しく翔たちと会わなかったなと思っていた。
が、実は既に二人は着いていたと知る。

「おはよー、雫」

「今日は俺たちの方が早く出たからな」

唯はともかく、なぜか翔がこの教室に居る。

まだ予鈴も鳴っていないしいんだろうけど。

「ところでさ。このクラスに転入してくる子がいるらしいな」

「そうなのか…？」

「私も今日知ったんだけど…。たぶん、本当だと思っ」

どうして二人が知っているのか不思議に思った。

でもこのクラスにいるやつらはその話をしていてと気づく。

これなら噂が広まっても仕方ないか。

ここへ転校してくる人にとってはプレッシャーだ。

「こらー。もうすぐ予鈴が鳴るぞー」

「やべっ。そんな時間かよ。またな雫、唯」

ここの担任が入ってきて翔は焦りながら隣のクラスへ駆け込んで
った。

みんなそれぞれ席に着く。

担任教師の横には転校生であろう女生徒がいた。

みんなその人を見る。

まあ気持ちは分からなくはない。

なぜならそれだけで有名になる。

だが転校生だからではなく、ある一点を凝視しているんだ。

「……っ」

気弱そうな生徒はクラスの視線に怯えているように見えた。

その女生徒は腕にぬいぐるみを抱いていた。
それに視線が注がれている。

「クマの……ぬいぐるみ」

俺は小さく呟く。

なにかが引つ掛かっている。

「えーと、この子は今日からこのクラスの一員だ。名前は紺野 皐
月さんだ。仲良くしろよ」お前らー」

普通に担任は紹介した。

紺野という苗字でこの場の全員がある人を思い浮かべたはず。

担任はそれに気がつき話す。

「ちなみに副会長の従妹さんだ」

案の定。正解だった。

全員が納得した表情だった。

「席はとりあえず一番後ろにしてくれ」

「はい」

小さい返事で担任へ言うと、設置された席へ向かう。

ぬいぐるみの一件で既に注目度が上がった。

俺もその一人だ。

あのクマのぬいぐるみ。

そう、あの少女も持っていた。

俺は僅かな期待、そして迷い。

そんな感情を持っていた。

第十六話

HRが終わると主にクラスの女生徒は臯月さんの方へ向かう。さすがに男子は遠目で見ている。

唯は俺の方へ寄ると話す。

「いい子そうだね」

「そうだな」

皆の質問に丁寧な答えている姿を見てそう思った。

ただ、ぬいぐるみについての質問は困ったような対応に見える。

「それにしても紺野先輩みたいな凛々しい人じゃなくて、大人しそうな子よね」

確かに印象としてはそれが正しいだろう。

たった一回きりの記憶の中でもどちらかと言えば大人しい印象だった。

「唯は行かないんだな」

「ほら、今はそんな隙間もないしね」

俺は少し考えた後席を立つ。

「あれ？どしたの？」

「…ちよつとな」

俺は歩みだす。

紺野 臯月の席まで。

俺が近づくの気づいた数人は気まずそうにする。道が開いた。

あまり人当たりが良くない俺だから仕方ない。

嫌われているというのかもしれない。

煩くして俺が怒っているとも思っているんだろうか。

構わず俺は臯月さんの方へ近寄る。

当の本人は遅れて俺に気がつく。
向こうは俺の顔をじっと見ている。

「……………」
「……………」
二人して向かい合いながら押し黙る。

かなり異様に見えたことだろう。

俺の場合は緊張しているだけ。

「その……………」

先に俺が声をかけた時。

彼女がぬいぐるみを握っていた両手のうち右手を離す。

そして俺の方へその手を差し出す。

小指だけを出した状態で。

そう。これは指切りの状態。

そして皐月さんは俺を見つめる。

俺はその意図を察し、小指を彼女の方へ向ける。

俺たちはどちらからともなく指を絡めた。

指を絡めたのには意味はなかったけど、そうするのがいいような

気がした。

「やっと、約束…果たせたね」

皐月さんは今日、初めて笑顔を見せた。

このことはすぐに広まった。

噂好きの連中により学年に知れ渡ることは度々ある。

覚悟していたが、やはり恥ずかしい。

あの後、担任教師が俺と皐月が仲が良いと感づき席を隣同士にした。

ちなみに呼び捨てなのは、お互いにそうしようと思ったからだ。
休み時間になると皐月はぬいぐるみを抱いたまま俺へ寄り添う。

俺は拒否する理由もないからそのままの体勢。

しかしこれがかかなり傍から見ると物珍しいようすで、かなり注目されていた。

「お前と紺野さんが知り合いとはねえ」

今は昼休みで隣のクラスから翔が来ていた。

翔が意味有り気にそんなことを俺に言った。

翔は一週間くらい前に気絶して以来、体育の時間は見学だった。どうも警戒していたらしい。

大事に至らなくてよかったが、仮病だとばれているだろうに。

俺は珍しく教室にいる。

「小さい時に、一回だけな」

「うん」

俺と臯月は翔へそう返答する。

「一回だけ？おいおいそれだけでそんなにラブラブなのか!？」

「ラブラブって…」

翔にすらそう見えるらしい。

だが実のところ、俺は内心喜んでいる。

表情にこそ出さないが、かなり今舞い上がっていた。

さつきそれを唯に話したが冗談だと思われた。

「なーんか信じられないよな、唯。…ん？」

翔が返事をしない唯の方に目を向けた。

位置的に俺は唯の顔を見れないが、翔は恐怖という言葉が似合う表情をしている。

なにがあつたんだろう。

「なんだ翔？唯がどうかしたのか」

「ちょ…待て！振り向くな」

「…なんでだ？」

「いいから！それよりお前の弁当は美味そうだなー」

焦ったように翔は俺を止める。

その意気込みに負けてやめることにした。

翔はホツと溜息を吐く。

…気になる。

だが見てはいけないような気もする。

「臯月。どうしたんだ？」

「…あ。その…」

臯月は俺の方をじつと見ていた。

何か用があるのかと訊いてみたが違うようだ。

「見惚れてたんじゃないのか？」

翔がからかい気味に言う。

臯月が顔をぬいぐるみに埋める。

同時に唯のいる方からなにやらバキツと折れた時の効果音がした。

翔の顔が青い。

今日のこいつは変だ。

「あの…雫」

「ん？なんだ臯月」

臯月は弁当箱を開けていた。

そして箸で卵焼きを摘み、俺の方へ差し出す。

「…いいのか？食べても」

「うん。…あゝん」

「あ…ん」

恥じらいながらも俺は拒否をしない。

むしろ嬉しかった。

「美味しいな」

「よかった」

「ヒューヒュー。カップル認定なんじゃないか、お二人と…も」

背後から再び物音がする。

と同時に再び翔が震える。

何だつてこんなに怯えてるんだろう。

「失礼します」

ここで思わぬ来客。

綾先輩だった。

すぐにこちらに気づき近寄ってきた。

俺の方を…正確には皇月の方を向く。

「皇月。どうやら馴染んでいるみたいね」

「うん。お姉ちゃん」

綾先輩のことはお姉ちゃんと呼んでいるようだ。

どこか幼さがある皇月なので違和感がない。

それにしても従妹とあってどことなく似ている。

「それにしても…。星川くん。随分と私の従妹と仲が良さそうね…」

凄いい気迫を感じる。

気のせいかな怒っているようにも感じる。

「ここは学校です。そういうことは謹んで欲しいわね」

「ごめんなさい…お姉ちゃん」

皇月はそつと俺の側から離れる。

玲が離れたときと同じような寂しさを感じた。

それを見て綾先輩は納得したようで、なんだか爽やかな表情だ。

「あら…？その人は具合でも悪いのかしら？」

「え？」

一瞬誰のことかわからなかった。

どうやら唯のことを言っているらしい。

「いえ。朝は元気でしたけど」

「そう？気のせいかしら」

綾先輩はそう言っただけ以上追求をやめた。

むしろ俺は翔の表情の原因について言及して貰いたかった。

「それじゃあ、放課後ね」

「うん…」

「放課後なにかあるんですか、紺野先輩」

翔が質問する。

俺も気になっていたところだ。

「ええ。皇月のために校内の案内を」

「あー。なるほど。どうもです、紺野先輩」

そういえば空気に溶け込み過ぎて忘れていた。

皇月は今日ここへ来たばかり。

確かに案内は必要かもしれない。

「それで星川くんにも協力してもらいたいんだけど…」

「え、俺…ですか？」

「ええ。パパがそう言っていたんです」

またあの人の差し金か…。

でも今回は悪いことじゃない。

俺は頷いて承諾した。

「あつ。せ、先輩っ。私もいいですか？」

「あなたも？」

突然唯が提案する。

俺と翔は少し驚いた。

自ら協力することに対してではなく、その迫力に。

「はい！私は柊 唯です」

「柊…。もしかして冬子さんという女性の身内かしら？」

「え？ええ。私の姉です」

それを聴くと綾先輩は考え込む。

まさか冬子さんの知り合いだったんだろうか。

だとしてもどうやって知り合ったのか不思議だ。

「そうね。お願いしようかしら。私も途中から生徒会に出なければ

いけませんし」

「ありがとうございます」

こうして、俺と綾先輩と唯。

この三人で放課後、皇月のために学校案内をすることになった。

「あの…。俺も参加…。あ、聞いてないっすね…。」

一人そんなことを呟いている奴がいたが、一同は気づいていなかった。

第十七話

「そして放課後だな」

「そうだな。しかし、…なんでここにいるんだ翔？」

約束通り俺と唯は綾先輩がいる生徒会室に来ている。
もちろん皐月も連れてきている。

だが翔がいる理由は不明。

「おい雫。もしかして俺が生徒会役員なの忘れていないか？」

「いや、初耳だ」

「私も初めて聞いたわよ、翔」

「うわ。唯もかよ…。言っでなかつたか？」

とりあえずこいつがいる理由が何となく分かった。

話は変わるが、玲には先に帰ってもらうように連絡した。

いつもより遅くなりそうだし、わざわざ待ってもらう必要もない
と思った。

それを伝えるためにどれほど苦労したことか…！

そもそも俺の勝手な理由で玲には迷惑ばかり。

「おーい、雫。帰ってこい」

「ハッ！」

翔のチョップで目覚めた。

「それじゃあ皐月の案内をしましょう」

綾先輩がそう言う。

俺たちは頷く。

「それと桂木くん。君には残っている雑務をしてもらいたんだけど
構わない？」

「まあそのために来ているようなものですしね。別に構いませんよ」
翔は綾先輩から仕事の指示をされ一緒には来ないことになった。

おそらくこの後には部活もあるだろうに。
友人ながら天晴れだ。

「それじゃあ行つてくるね〜」

「ああ。また明日な、唯。雫たちも」

昼休みとは打って変わって元気になつていような唯。

思い出せばあの時、唯は一言も発しなかったから心配だった。

どうやら心配無用で安心した。

そして俺たちは校内でよく移動教室で使われる教室を教え、体育館やグラウンドの位置。

それらを臯月へ伝える。

一時間もしないうちに基本的な場所は全て回った。

時折俺と臯月は唯の強い視線を感じたが、振り返ると違う方を向いているので気にしなかった。

そんなこんなで放課後を過ごした。

「それじゃあこれくらいにしましよるか」

「結局、最後までいましたね。綾先輩」

「悪いかしら？星川くん」

「いえ、別に」

剣呑な雰囲気になりそうなところを唯が話しを逸らす。

「ところで紺野さん…あ、ややこしいね」

「…『紺野さん』でいいです」

臯月が答えた。

「うん。じゃあ紺野さんは雫とはどこで知り合ったの？」

なんだそんなことかと思う。

というかわざわざ臯月に訊かなくても、俺に言えばいいのにな。

「それは私も気になるわね…。星川くん”なんか”といつ？」

何気に『なんか』って単語を強調する綾先輩。

もう慣れたからいいんだけどな…。

「小学校三学年…。夏休みの時、公園で会ったの」
クマのぬいぐるみで顔を下半分隠し上目づかいをしながらそう言う。

公園で夕日が沈む時間帯とは憶えていたが、その他のことは正直憶えていなかった。

よく憶えているなと感心する。

「かなり前ね。それでよく、”この”星川くんだって分かったわね」
次は『この』を強調した先輩。

やっぱり俺に対する悪意が込められている。

皐月と唯はそんなことに気がついてはいるはずもない。

皐月は話を続けた。

「確信はなかったけど……。でも、あの時の男の子だって思ったのぬいぐるみを更に強く抱く。」

なんか形が崩れていてグロテスクに感じるんだが…。

「愛の力つてもものなのかしらね…」

ふいに綾先輩が深刻そうな表情で俺にとってかなり重たい発言をする。

「愛っ!？」

「うおっ…。いきなり耳元で叫ぶなよ唯」

綾先輩の発言の直後、俺のすぐ横の唯が珍しく叫ぶ。

他に人がいないからよかったものを。

皐月は皐月でそんなこと気にしていないようだ。

てゆうか、俯いていてよくわからない。

「どうしたんですか、柊さん？」

「ど、どうしたって…。な、なんでもありません」

「そう?でもあまり廊下で大声を出さないでね」

「すみません…」

なんか今日は唯も翔も変だなと俺は感じていた。

「それでは柊さん。ついでに星川くん。また」

「はい。さようなら、紺野先輩。紺野さん」

「さようなら…。またね…雫」

「またな、皐月。” ついで” に綾先輩」

再び俺と綾先輩の間に火花が飛び散る。

唯は俺を、皐月は綾先輩を引つ張りながら離れていった。

第十八話

私たちは星川くんたちと別れた後、生徒会室に来ていた。皐月はまだこの周辺の地理は詳しくないから、一人で帰らせることは避けた。

本人も生徒会室に残るのを拒むことはなかった。

でも、もしかしたら星川くんたちと帰りがかったのかもしれない。そんな風に悩んでいた時、桂木くんが声をかけてきた。

「紺野先輩。とりあえず言われた仕事はやりましたよ？」

「そう。ありがとう。もう部活に向かつていいわよ」

「わかりました。お先に失礼します」

戸を開けて廊下に出ようとした桂木くんはふいに振り向いた。

「なんか雫が迷惑でもかけました？」

「え？いいえ、なにも」

「そうですか。なんか考え込んでたからもしかしたらって」

「でもどうして星川くんだと？」

「大抵、紺野先輩が悩みこむ理由って雫関係ですしね」
言われてみればそうだった気がする。

向こうの何気ない一言に大袈裟に悩み、そして怒る。

まるで子供のようだと言っている。

でも次に会えばいつものように会話していて気に留めなかった。

「あいつはああ見えて、結構『女』に耐性ないですからねえ…。玲ちゃんや唯くらいですし」

翔は敢えて冬子の名は出さなかった。

「その玲という人はもしかして」

「あいつの妹ですよ。あいつ、昔から妹一筋でしてね。中学二年だったかな。唯の告白もその辺りが理由で断ったんですよ」

『本物のシスコンですよ。』と、彼は苦笑いしている。まさか柗さんが前に告白していたとは思ってもみなかった。確かに仲がよさそうだったけれど、まさかそこまでとは。もし未だに彼に対して未練があるのなら、皐月の恋路の妨げになるのかもしれない。

その皐月はぬいぐるみを抱いたまま眠っていて、今の話を聞いていないけれど。

そもそも、皐月が持っているものが恋愛なのかも確証はない。

「雫が何か言っても軽蔑しないでやってください。あいつはあいつなりに他人とうまくやっていきたいと思ってるはずなんで」

「ええ。憶えておきます」

そう言う桂木くんは満足したような顔で出て行った。軽蔑しないでやってください。

その言葉を聞いた時、もしかしたら自分は他人から見たら彼を軽蔑している風に見られているのかもしれないと思った。

「…そうね。彼はパパが認めた人だから、いい人なのよね」

星川くんと会った時のことは今でも忘れない。

意外な展開だっただけに、インパクトが強かった。

あれ以来、彼のことが目についていた。

それまでは気づかなかったことでも、それ以来彼を見つけては注意する日々が続いていた。

中学校の卒業式。

あの日の自分は珍しく落ち込んでいたと思う。

友達とは進路が違ったり、学校が恋しかった。

そんなとき、星川くんが珍しく自分から声をかけてきた。

『高校は俺も紺野先輩と同じところを志望しますよ』と言われたときはかなり驚いた。

入学した高校はそこまで有名とは言えなかったとはいえ、それなりにレベルの高いところ。

そう簡単に入れるのかと呆れてもいたけど…。

その時の私はどうかして、『楽しみにしています』と返した。その日、私は彼に一つ提案をした。

紺野ではなく、綾と呼んでよいと。

彼は一瞬時が止まったかのように呆然としていたけど、それに了承した。

それ以来、私のことは紺野先輩ではなく綾先輩と呼ぶようになった。

その呼ばれ方は彼が一番最初だった。

それからパパもそのことに気がつき余計な騒ぎになったのも覚えている。

ママがいたら直ぐに静められただろう。

「あなたも、面白い人に眼をつけたわね」

私は眠っている皋月の頭を撫でながらそう呟いた。

第十九話

「おかえりなさい、兄さん」

「ああ」

兄さんが帰ってきた。

今日は珍しく兄さんの方から一緒に帰るのを断った。

最初は驚いたけど、葉月ちゃんに相談したら、『ついに妹離れを決意したのよ』と言われた。

そう言われてみればそうなのかもしれない。

本人に訊けばいいことかもしれないけど、もしそう決意したのなら余計な口出しはいらないと葉月ちゃんに止められた。

今日は朝から兄さんの様子が少し変だった。

それはそれを決意した瞬間だったのか。

それともただ調子が良かっただけなのか。

そんなことで迷っていた。

「今日は放課後どうしたの？」

私は葉月ちゃんに止められたのにも拘らず訊いてみた。
少し興味があったから。

「実は転校生の校内案内をしてたんだ」

「転校生の？兄さんの学年？」

「ああ。同じクラスだった」

それならそういう役目になっても不思議じゃない。

兄さんも学校では普通の人なんだなと安心した。

「その人って女の人？」

「え？そうだけど…なんだ？」

「ううん。なんでもないよ」

道理で浮かれているはずだ。

どことなく今の兄さんは機嫌が良かった。
もしかしたら相手に惚れたのかもしれない。
なんだか嬉しいような寂しいような。
複雑な心境になる。

でも兄さんが幸せならそれでいいと思う。

いつまでも私のためだけに生きて欲しくないから。

「少し疲れた…。今日の夕飯はいらなくて、母さんに言ってくれ」
「うん。わかった」

そして兄さんは階段を上がっていった。

「うん。どんな人なんだろう」

兄さんが興味を持つ人のことが気になっていた。

このことを明日、葉月ちゃんに相談してみようと決めたのだった。

夜中。

俺は小腹が空いて目を覚ました。

夕飯はいらなと言ったが、いざとなると少々堪える。

この時のために買い置きしていたスナック菓子を食べることにした。

見つかったら叱られるだろうな、と考えた。

「……ふう」

臯月という少女。

彼女は間違いなくあの頃の少女と同一人物だ。

そしておそらくは俺の初恋の相手。

しかしまともに会話したのは今日くらい。

妙にいつものグループに溶け込んでいたからいいが、やはり知らないことだらけだ。

「まずは…友達からだよな」

あの一回以来会ってもいなくなっただから、それが妥当だろう。

こんな日が来るとは思っていなかったから無性に恥ずかしい。
まさか綾先輩の従姉妹とは考えもつかなかった。
でも綾先輩の笑顔。

あれと皇月の笑顔が被って見えたのかと思うとなんだか納得する。
今まで玲を抜かして綾先輩と唯くらいしか、まともに異性と話したことはない。

どう会話をすればいいのか悩んでしまう。

また明日会うんだから余計に悩む。

しかも隣の席だ。

似合わないと思ってるけど、本当に緊張する。

「誰かに相談できればいいんだけどな……」

このとき俺は冬子さんも女性の一人だということを素で忘れていた。

第二十話

「それで、その子と友達になりたいんだな？」

「まあ…はい」

俺は今、ある先輩に皐月とはどう友達になればいいか質問している。

この人との出会いは少し前に遡る。

俺はいつものように登校し、いつものように唯たちに抜かれた。

二人には先へ学校へ行ってもらった。

結局追いつくこともなく特に急がず歩いていた。

そこで思わぬ遭遇があった。

それは井上 茜さんだった。

向こうもこちらに気がつき近寄ってくる。

「おはよう。朝から会うなんて初めてだよね」

「そうだな」

最後に会ったのは保健室だったか。

結構久しぶりだ。

ここで井上さんを追いかける人がいることに気がついた。

どうやら一緒に登校している人がいたらしい。

「どうしたんだ、茜ちゃん？」

「あ、輝さん。この人、知り合いなんですよー。だから挨拶に」

「へえ。はじめまして。二年生の如月（かくづき）輝（あき）だ。よろしく」

「如月…輝先輩ですか」

この人の名前には聴き覚えがある。

こういふ接触もあるんだとしみじみ感じた。

「それで君は？」

「あ…。星川 雫です」

「なるほどね。じゃあ、星川くんでいいかな？」

「はい」

この呼ばれ方は綾先輩に次いで二人目だ。

教員は除く。

「それにしても、井上さん。彼氏がいたんだな」

「えっ、ええ！？」

言ってみると井上さんが動揺する。

「彼氏って…誰のことだ？」

一方の如月先輩は自分のことを言われたと理解していない。

この態度でわかった。

付き合っていないんだな。

ちよつと予想外だった。

仲良さ気だったから、てっきり恋人かと思っていた。

「な、何言ってるのよ…。私なんかと輝さんが恋人なわけないじゃない」

「ん？ああ、俺のことだったのか。まあ確かに、付き合っているのではないよ」

その言葉に井上さんが少々落胆したように見える。
いろいろあるんだな。

「あ、忘れてた。晴彦が先に走って行ったけど、追いかけないのか？」

「兄さんが？…放っておきましょう。どうせまた輝さんに構ってもらいたいんですよ」

「それはそれで嬉しいような、気持ち悪いような…。まっ、晴彦だしどうでもいいか」

晴彦という名も綾先輩から聞いている。

井上さんの兄だと。

なんだかこの二人に馬鹿にされているような感じがする。
仲が良い上での扱い方なんだろうな。

「ところで如月先輩。生徒会長に立候補するとかしないとか…」

「え？本気だったの、輝さん？」

「あれ？おかしいな…。口外してないのに…。待てよ、まさかあのバカ」

あのバカとは恐らく見ず知らずの晴彦先輩を指していると思う。
いや、これはただの憶測だけど。

「まあ兄さんでしょうね。でも輝さんが立候補したら、私は投票しますよ」

「それはありがたいな。でも、競う相手が結構大変そうだよなあ」

「あの…それって綾先輩のことですか？」

俺は訊いた。

他に該当する人がいなかった。

「そうそう。紺野 綾さん。あの人、今でも副会長やってるし実績はあるんだよな。もしかするとまた立候補しそうだし」

「確かに紺野先輩は凄い人気だもんね。ファンクラブもあるって噂だし」

事実、翔がいうには存在するんだよな。

そのクラブってのが。

「だとしたら、その人たちは確実に紺野 綾さんの方へ入れるんだろうし…。俺なんか、有名人じゃないから尚更心配だ…」

「そうとは言い切れませんよ輝さん。後輩の女子には人気だから」

「え、ホント？」

「食いつきましたね如月先輩」

「あははは…」

如月先輩は頬を赤くして照れ笑いを浮かべる。

ともかく綾先輩と如月先輩の会長は想像し易いな。

綾先輩はあのままだろうし…。

「この人もきつと普通な生徒会にするとと思う。」

「でもどうして生徒会長に？如月先輩は興味があつたんですか？」

「ああ、そのことなんだけど…。ちよつと賭け事をしててね」

「あ、あのことか？」

井上さんは思い出したようにそう言う。

如月先輩は俺に説明する。

「実はバカも含めて俺の友達と賭けをしたんだ。そうしたら負けちゃつてね。実際に興味もあるからな」

「それに美月さんも応援してましたしねー…」

「なつ。べ、別に美月は関係ないよっ！」

明らかに動揺している。

その人はきつと如月先輩の大事な人なんだろうな。

「まあ、こんな不純な動機だよ。恥ずかしながらね」

「いえ。動機はともかく、やる気があればいいと思いますよ」

「ありがとう」

話しているうちに学校へ到着した。

「それじゃあ私はお先に〜」

「じゃあね、茜ちゃん」

井上さんは先に校舎に入った。

「ところで星川くん。何か悩み事はないか？」

「え？」

「いや、生徒会長になるなら他の生徒のことも知っておいた方がいいかなつて。少しでも紺野さんに追いつきたいからさ」

この人のやる気は充分感じられた。

きつといい競争相手になるんだろう。

綾先輩も実際に楽しみにしているようだし。

それはともかく悩み事。

あるにはあるが、気恥ずかしい。

でも先輩からの助言も頼りになりそうので、流れで俺は相談するこ
とにした。

そして昼休みになり、今に至る。

「星川くんはきちんと青春してるな」

「…ま、まあ。今までに深く考えたことなくて。…どうすればいいのかわかるよ」

「気持ちには分かるよ。…俺も、そんな感じだしね」

「如月先輩も？」

「ああ。身近にいるけど、気持ちは伝えられないんだよな、これがもしかすると勘違いされているのかもしれない。

俺はただ臯月と友達になりたいだけなんだけど。

ただ興味があったから話を聴くことにした。

「失礼ですけど、お相手はどんな人なんです？」

「ん？…この学校の三年生で、友達なんだ」

頬を指で搔いて恥ずかしそうに言う。

「まっ、俺の話は終わり。星川くんのことだけど。今はとにかく話をするしかないな。同じようにしてる俺はまだまだ想いを伝えていないけどね…」

「そうですね。そうします。まずは会話…ですね」

「ああ。頑張れよ。なにかしら成果があったら知らせてくれ」

俺の肩を叩いて如月先輩は爽やかな表情で言う。

なんか後輩の女子の人気者だというのが分かる気がする。

「…如月先輩も。頑張ってください」

「もちろん。…卒業式までには告白するよ」

「それ、期待していいんですよね？」

「う…。プレッシャーになるなあ…。よし、俺はここで誓うよ。卒業式当日で告白してみせる！」

「卒業式で、ですか…？」

「ああ。もちろん恥ずかしいけど。本気だからね。多分、晴彦辺りが茶化しそうだけど」

卒業式にはまだ気が早い。

でもあつという間に感じるだろう。

「卒業式、楽しみにしてくれよ」

「ええ。もちろん」

卒業式は中学までとは違い簡単なものだと言先輩から聴いていた。

そんな卒業式のどこで告白をするんだろうか。

考えられるとすれば、会長からの生徒への挨拶か。

来年にある卒業式。

その日のことを俺は楽しみに、そして期待して待つことにした。

第二十一話

私は榛原 葉月です。

そして星川 玲ちゃんの大親友。

その玲ちゃんが私に相談事だと言って昼休み屋上での話し合いです。

ここにはいろいろな思い出があるな、なんて思ったり。

主に雫先輩絡みだけど。

「それで、何かあったの？」

「あつたつて言うか…。兄さんが変なの」

「変？」

重度のシスコンの時点で変だと思っただけど…。

それとはまた違う問題みたいで。

「実は兄さんのクラスに転校生が来たらしいの」

「あつ、それが女子で一目惚れしたみたい…とか？」

「なつなんで解つたの？」

思いついたことを言ってみただけなんだけど。

まさかの中するなんて思ってもみなくてちよつと驚き。

でもそれはそれでいいと思っただけどな。

雫先輩はこれを有効活用してシスコンから抜け出せればいいし。

なにか問題でもあるのかな、なんて考えていたら玲ちゃんが話に出す。

「別に兄さんに恋人が出来るくらいいいんだよ？でもでも。なにか納得できないの」

「あ…そゆこと」

薄々感じてはいたけど…。

うん、間違いない。

玲ちゃんはブラコンね。

間違いないと思う。

あれだけ兄に優しくされてれば自覚しないうちにお兄ちゃん大好きっ子になるわよね。

つまり嫉妬してるんだと理解する。

「でも雫先輩が幸せならいいんじゃないかな？」

「うう……」

「聴いてるかーい？」

「やっぱりおかしいよ」

「へ？」

突然そんなことを言い出す。

私、おかしなこと言ったかな？

なんて考えていたけど、どうやらそれは私に向けてではないらしく。

「あの兄さんが急に恋に落ちるなんて…信じられない」

「そっちなんだ…。でも玲ちゃん。人間なんてそんなものだよ？私も玲ちゃんもいつか、そんな日が来るっつてば」

「そうなのかな？」

「そうそう。例えば、私が既に雫先輩に惚れてるとか」

そんな冗談を言ってみた。

少しからかってみたくなってしまったから。

するといつもは軽く受け流す玲ちゃんだけど、今日は違った。

「わ、私は認めないよ！」

「ちよつと玲ちゃん。冗談だつてば」

その剣幕に驚きつつ、私は宥める。

これは兄同様、重度のブラコンなんじゃないかと思われれます。こつなると私の手には負えない気もする。

家族の問題は他人が背負うものじゃない。

そんな逃避を頭に思い浮かべていた。

「そう言えば玲ちゃん。私は中学からの付き合いだけど、雫先輩っ

て今までにそういう事例はないの？」

「うん。私の知る限りでは。いつも見てたから」

「左様ですか…」

「いつも、ねえ。」

御暑いことですこと。

またからかいたくなつて私は意地悪をする。

「やっぱり玲ちゃんはブ・ラ・コ・ンなんだ〜」

「なっ！？ブ、ブラコンじゃないもん！」

「そんなに強く否定したら、雫先輩が悲しんじゃうよ？」

「うっ」

扱い易いというか、素直というか。

やっぱり私の親友は楽しい。

これはただの個人的な心配だけど、雫先輩よりも実は重症だった
り。

ありえそうで怖いし。

どうかこの娘には一般的な人生が過ごせますように。

そんなことを祈ってみた。

「うう〜。絶対におかしいよ、兄さんは」

おかしいのはあんたもだよ。

玲ちゃん。

第二十二話（前書き）

所謂番外ということで…。

第二十二話

これはまだ星川 雫が小学校の頃の話。

この時から雫は周りよりも大人びていた。

無邪気さを失くし、彼なりに密かに妹の玲を可愛がっていた。

だが誰しもそれには気がついていて、あえて何も言わなかった。

桂木 翔、柊 唯とは同じクラス。

この二人以外の人間とはあまり話しをしていない状態。

当時の雫も大層人間関係というものに執着していなかった。

両親もそんな雫を見放したように、玲の方ばかりに構う。

それ自体は雫も望むことで、本人はなんら不満はなかった。

さて、彼はこの日も翔と唯との誘いを断り一人帰宅していた。

いつもは玲と帰るのだったが、今日は玲は友人たちと帰るらしい。

さすがに毎度自分と帰っては友人関係に輝が入ると思い、雫は一人になった。

つまり自ら断ったのだ。

重度のシスコンの苦渋の決断だ。

ランドセルを下ろし、公園のベンチに座る。

もうすぐ夏休みだ。

これは雫にとっては大変喜ばしいことだ。

学校のような騒がしい場所は彼にとって好まない領域だった。

どんなに翔と唯が気を利かせても、雫は他人と関わろうとしない。

人見知りなのだろうと考えられるが、それにしても拒絶が強い。

この頃の雫は玲と関わりのない人物とは一切会話をしなかった。

そんな性格のせいでもある。

さて置きベンチに座る幼い雫は、黒いランドセルの中からある物を取り出す。

それは唯の姉である冬子から無理矢理貰った鬘だ。

しかも女装用だ。

どこでこんな物を手に入れたか不思議である。

今日、ランドセルの中に隠していたが不安で堪らなかった。

さつさと本人へ返却したいが、すぐに会える相手ではなく、このまま持っていた。

「どうしろっていうんだよ…」

ポロリと本音が洩れた。

さすがの冷静な雫もどうもあの冬子には対処が思いつかない。能天気というか、楽観的というか。

おかげでブランコへの恐怖心が植えつけられたことを少々恨みつつある。

鬘を渡した際に、『雫ちゃんなら女の子になれるよん』といわれ
ていた。

完全に遊ばれている。

本気で頭を悩ませている時、隣に見知らぬ女性が座った。

その人物は買い物袋を置くと雫の方を見る。

とっさに雫は鬘を隠そうとしたが、どうも体が固まってしまっていた。

「こんにちは、ぼく。一人でどうかしたの？」

現代で見知らぬ子供に易々と話かける人を雫は初めて見た。

その女性はもちろん当時の冬子よりも年上だった。

おそらく大学生か、もしかしたらどこかの主婦かもしれない。

そんな大人びた顔つきの女性だった。

「なんでもないです」

雫はそう早口に言うのと立ち去ろうとする。

が、女性の瞳に吸い込まれたかのように身動きが取れなかった。

「ぼく、鬘を持つてるけどどうしたの？」

「知り合いから無理矢理渡されただけですよ……」

「あら、どうして？」

「ん……女装、させたかったのかも」

これはただの予想だ。

でもあの冬子なら真面目に有り得る話だが。

女性は一人頷く。

「確かに女の子にも見えるわね、ぼく」

「やめてくださいよ……そんな恐ろしいこと……」

本気で気を落としていた。

「お世辞じゃないわよ？ぼく、もしよかったらその鬘被ってみない？」

「え」

「ほらほら、きつと似合うわよ」

凵から鬘を奪い取りそれを頭に被せる。

あつという間の出来事で凵は反抗する暇もなかった。

身長差も大きな要因であった。

「きゃー可愛い！」

「……………うう」

珍しく泣きべそをかく。

しかしそれがまた女性の意欲をそそつたらしく、喜んでいた。

おそらく女性はサディストだ。

というか、そんな危ない貌をしている。

間違いない。

「ぼく、お名前は？」

「……し、しずく」

「しずくちゃんね？もしよければ私のうちに来ない？娘にも会わせたいわ！」

「え、ええ……？」

図々しいどころの話じゃないと凵は内心思った。

初めて見たときよりも女性の頬は紅くなっていた。

これは興奮している。

雫は悟った。

まずい人に捕まった、と。

「え、遠慮します！」

「待ちなさい」

立ち去ろうとした際、ガシツと肩を掴まれる。

雫は女性の方へ向き直る。

一瞬で怖気づいた。

それほど子供にとって怖い眼つきだったのだ。

「おいで」

「は、はいいい！」

あの雫が怯えている瞬間だった。

「ここが私の家よ、しずくちゃん」

「あ、あの…」

「何か質問？」

「その、この髪は取っていいですか？」

「駄目！」

「ひいつ」

雫は怖気づく。

最早、この女性は只者じゃないと子供ながらに悟る。

男を女装させるのが趣味なのか。

はたまた少年が好みなのか。

どちらにせよ雫にとっては迷惑な話だ。

いざとなれば大声で助けを呼ぶことも考えた。

だが道を歩いているときの会話を聞くと、どうも悪い人とは思えなかった。

「あ〜んいいわあ。その怯えた目！かあいい〜」

「うげえ」

女性は唐突にそんなことを言いながら抱きついてきた。

やりたい放題だ。

「さあ、中に入りましょう」

既に雫は諦めていたのだった

「ただいま！あなた！。あやー」

「おお！帰ったな我が愛妻！！」

パワフルな男が現れた。

二人は強く抱き合っている。

どうやら夫婦のようだ。

少し遅れて雫と同年代くらいの少女が玄関へ来た。

とてもそんな年頃の少女の親とは思えない女性の若さ。

雫は娘であるう少女と対面する。

少女は不思議そうに雫を見ていた。

「ママ、この子は？」

「ん？この子は男の子のようであって本当は女の子である、しずく

ちゃんよ」

「男です！！」

雫はすかさずツツコミを入れる。

「はっはっは！妻に湯を入れる男がいたとは！私でさえ怯えている
というのにな」

「あなた、余計なこと言う口は？」

「ひゃい！？」

厳しそうな男から出たとは思えない奇声。

娘の方は呆れているようだ。

「さて。しずくちゃん、もうその鬘は取ってもいいわよ」

「先に言ってくださいよ……」

「しずくちゃん。この一見怖い男の人が私の夫よ。おじちゃん
いわ」

「まだそんな歳じゃないんだけどなあ」

「それでこの子が娘の『あや』。ほら、しずく挨拶」

「は、初めまして……あやです……」

おどおどした様子でお辞儀をする。
雫も釣られてお辞儀で返す。

それを見ていた夫の方はこれまた豪快な笑いをした後にこういった。

「ふむふむ。気に入った！この少年は将来息子にしたいぞ」

「あら、あなた。それってあやの婿にしたいってことかしら？」

「うむ！」

「えー。わたしはパパのお嫁さんになるのー」

「な、なんて可愛いことを言う娘なんだ……誰の子だ？私だ！」

雫が黙っている間に訳の分からない事態になった。

とりあえず玄関ではなんだからということ、和室へ移動した。とても広く、雫は感嘆していた。

娘のあやという子は宿題がどうかで自室へ戻ったようだ。

「はい、しずくちゃん。おやつよ」

「どうも」

「しずく君！ビールを飲もう！」

「え」

さすがにこれは女性が止めてくれた。

ほっとしたのも束の間。

「そこはワインでしょう？」

「…帰りたい…」

一時間は過ぎた。

「一人で帰れる？しずくちゃん」

「大丈夫です」

夫の方は酔いつぶれて眠っている。

結局女性が玄関まで見送ってくれた。

「いつかまた来て頂戴ね？今度は娘と遊んでくれたら嬉しいわ」

「は、はあ」

「うちの子、結構恥ずかしがり屋だったりするから。無理に仲良く

してとは言わないけど、考えておいてね」

なぜかこの時、雫は女性へ違和感を持った。

この時の女性はなにか思いつめているような雰囲気があった。

「それじゃあね。気をつけるのよ？」

笑顔で手を振って言う。

雫はお辞儀をすると帰宅する。

なんだかまたここへ寄りそうな気がする。

そんなことを思い浮かべていた。

余談だが女性の名前は紺野こんの 咲さき。

この三年後に病死してしまうなんて、雫は考えてもいなかった。

第二十三話

如月先輩との会話から数時間。

今日最後の授業は数学だ。

皆黙々と武さんの説明を聴いている。

俺はふと隣の皐月をちらりと見た。

「…すう」

寝てる。

「じゃあ次の練習問題を…出席番号十二番の人。頼むよ」

教師であり、皐月の父である武さん。

あの人は気が付いていないらしく、淡々と授業を進めていた。

問題を当てられた生徒は問題の解答を黒板へ書いていく。

そつと皐月の肩を叩く。

俯いている皐月の反応は特になかった。

「……むう」

とりあえず放置しよう。

強く叩いたりしたら逆に迷惑になりそうだ。

それに武さんも気が付いていないようだから何とかなるだろうと

思っていた。

問題の答え合わせが始まった。

俺はそれを聴き、ノートに写した。

「雫…。…あれ、紺野さん寝てるの？」

「そうなんだ。一応、起こそうとしたんだけど…」

授業が終わると唯がすぐに近付いてきた。

とりあえず返答をして訊き返した。

「ところで何か用事か？」

「うん。まあね。翔が放課後に話があるからちよっと待っててだ
て」

「放課後って…。もうその放課後だぞ」

「あ、そうだったね。ごめんね」

それにしても何の話だろう。

表情に出たのか唯が話し出した。

「別に雫にとってはどうでもいい話だと思っよ？」

「いや、翔は基本的には真面目だから…。俺には耳の痛い話かも
な」

「それって説教とか？」

「あり得るだろ？」

翔はあれでも常識人だ。

わざわざ呼び出すくらいなんだから真面目な話だろうと俺は読ん
だ。

しかし唯はそれを最後まで否定した。

「それじゃあまたね。何の話だったか後で電話でもして教えてよ」

「内容にもよるけど…。それより唯。お前、掃除…」

「ばいばい」

颯爽と教室から出て行った。

俺は心の中で『逃げたな』と思った。

自分自身は掃除の担当じゃないから翔が来るまで教室の中に居た。

五分も経たずに翔はやってきた。

「悪いな雫。さっきまで移動教室でさ」

「本当は早く玲の所へ向かいたかった」

「ハハ！相変わらずシスコンだな」

悪意のない笑いだった。

玲関連の話ではないことは俺の中で確かになった。

「それで話って？」

「あ。とりあえず移動いいか？ほら、紺野さんもいることだし」

「ん……。おはよ…雫…。あと桂木 翔…」

どうやらこのタイミングで起きたようだ。

なぜか翔をフルネームで呼んでいたが、深い意味はないだろう。

「臯月。もう放課後だ」

「お姉ちゃんの所に行かなきゃ…。ばいばい、雫」

のんびりとした口調で臯月は言った。

そして身支度を素早く済ませ、教室から出た。

これで教室に残るのは俺と翔だけになったから、移動するのは止めにした。

「話なんだけどよ…。ほら、前に唯が俺に冬子さんのことが好きなんだろ？とか言ってたよな」

「あつたような…なかつたような…」

「いや、あつただけだ」

「ん。それで？」

「協力してくれ！」

翔は俺の両肩に手を置く。

そしてそう頼みこんできた。

正直よくわからない。

そのことを口にした。

すると翔はご丁寧に説明してくれた。

「あのときは昔の話だって言ったださ。でもな、実は今でも懂れてるっていうか…まあそういうわけなんだ！」

だが俺には理解できなかった。

「だから！俺はまだ冬子さんの事が好きなんだってば！」

「ああー。そうか。つまり助言が欲しいんだよな？」

「ああ！お前、唯と同等に冬子さんと仲いいだろ？」

「むしろ俺より翔の方が…」

「年数的にはそうかもしないけど、そこまで親密じゃないんだよ」
まさか翔から恋愛相談されるとは思わなかった。

どうも俺からの助言が欲しいらしい。

「ところで、唯には？」

「言えるはずないだろ。なんか後が怖い」

「金取られそうだな…。口止め料として」

「そういうわけだから、まともな思考回路を持ち合わせているかもしれない雫に相談したんだ！」

「そうか。なんだか言葉が気になるけど、翔には世話になってるからな」

「悪いな、雫！ちなみに基本的に俺の方が世話になってる」

「そういえば前に数学の宿題を写させてから見返りが…」

「そのうち纏めてやるから」

とりあえずさっさと俺は玲の許へ向かいたい。

お互いに簡単に話をして結論をまとめた。

「翔。今日じゃ決められない」

「だよな」

流星に急すぎだった。

本当なら唯にも仲間になってもらいたい。

ただ良からぬところで冬子さんに知られるかもしれないから恐いのだ。

さっきの口止め料の話は軽い冗談。

「悪いな引き留めて」

「いや。それじゃあな、翔」

「ああ。またな」

俺たちは玄関まで一緒に向かった。

第二十四話

翔と別れ、校外へ出た。

天気は曇り。

雨は予報だと降らないらしいが、雲の色を見ると今にも降り出しそうだった。

玲と合流するために、中学校へ速足で向かう。

いつも通りの時間に到着する。

高校からここまで離れているとはいえ、徒歩で来れば丁度いい時間で着けるからいい。

とりあえず校門の近くで玲がやってくるのを待った。

部活帰りの生徒もちらほら見えてきた。

そろそろかと思っていたところに葉月ちゃんが現れた。

「雫先輩。今日も御苦労さまです」

「……？今日は自転車じゃないのか」

「あははは……。ちょっと壊れちゃいました」

「パンクか？」

「いえ。後輪が外れました」

何しでかしたんだ、この娘は。

「大変じゃないか？いつも自転車なのに」

「いえいえ平気ですよ。それにしても私の心配してくれるなんて珍しいですね？」

「そこまで酷い人間じゃないつもりだ」

「む。それは失礼しました」

「そんな悪戯心満載の笑みを向けられたら謝罪に思えない」
その後も会話を続けた。

度々弄られかけたが、軽く受け流す。

「そういえば雫先輩。今日は少し急ぎ気味でここへ来ましたよね」
「まあ、そうだけど…。なんで知ってるんだ？葉月ちゃんは学校に
いただろ」

「実はずいっと尾行していたんです」

「そっか」

「あれ？反応薄いですね」

「気が緩んだだけだ。…あほらしくて」

「ひっどーい！」

尾行の一件はどう考えてもあり得ない。

たぶんこの学校のどこかから、歩道での俺の様子を眺めていたんだろつ。

例えば体育館のギャラリとか。

あそこは周囲は見渡せる位置に建っているし。

「それにしても玲ちゃん遅いですよね」

「別に先に帰ってもいいぞ」

「暇なんでお付き合いますよ？」

「どっちでもいい。…でも、帰り遅くならないか？」

「あら。また心配されちゃった」

「真面目に言ってるんだけどな。話によれば遠いんだろ？」

「そういえば、雫先輩は来たことなかったですね。玲ちゃんばかりで」

「それはそうだ。行く理由がないんだからな」

玲が話してくれた内容によれば、葉月ちゃんの両親は現在別居して
いていいらしい。

葉月ちゃんは父親と共にいるとのこと。

その父親も仕事で忙しいらしく、あまり居ないとか。

その話から随分経っているし、もしかしたら離婚を済ませてしま

ったかもしれない。

玲もその辺りは詳しく聴かなかったらしい。

他所の家の話を楽しげに周りに話すタイプじゃないし、当然か。

「じゃあ今度玲ちゃんと一緒に来てください。楽しみにしてますから」

「勝手に決められてもな…」

「強制はしませんよ。ただ拉致するだけなんで」

「強引だろ、それ」

「あ、雫先輩。玲ちゃん来ましたよ」

玄関の方を見ると玲がこちらに手を振りながら走って来ていた。

「それにしても他の生徒から見れば、私たち逢引していたように見えたくもしいですね」

「また妙なことを言い出すよな、葉月ちゃんは」

「ここで玲がこちらに到着」

「お待たせ、兄さん。葉月ちゃんも居てくれたんだね」

「幾らでも待つてやる」

「私は自転車があれば先に帰ってたかも。そうだ玲ちゃん」

「何。葉月ちゃん？」

「今度暇な時に雫先輩と一緒に遊びに来てよ」

「兄さんと一緒に？」

「そう！まだ家に来たことなかったし、そろそろ招待するべきだよ」

「兄さんはいいの？」

「玲がいいなら」

話は進み、今週の休みに行くことになった。分かれ道。

葉月ちゃんと別れた後に玲は言った。

「兄さんってどうして今まで葉月ちゃんと遊ばなかったの？」

「何でって、そこまで親密でもないからな」

「そうかな？私から見れば仲良しだけ」

玲が言うなら俺と葉月ちゃんは仲良しなんだろう。

俺も彼女と話すときは翔や唯、皐月たちと話すように気が楽だ。
ならそれは友達と言っただろうか。

「そう言えば兄さん。今日ね」

「自宅に着くまで今日の出来事をお互い話していた。」

第二十五話（前書き）

また番外です。

第二十五話

これは雫が中学生の頃に紺野家へ再度寄った頃の話。

何気なく妻の眠る墓へ寄ることに決めた剛。

妻の名は紺野 咲。

娘の綾がまだ小学生の頃に、病気で亡くなった。

彼女は剛に並んで、若しくはそれ以上にパワフルであった。

そして母として優しい女性でもあった。

なによりも、可愛い男の子を見ると女装させたり、泣き顔を見るとゾクゾクするという癖がある人物。

ちなみに小学生の星川 雫は犠牲者になりそうになった。

どうも本人はその当事を覚えていないのか、中学生の時に再びやってきた時は初めましてと言ってきた。

昔のことだからつい忘れてしまったのだろうか。

それでも自分は覚えている。

実のところ、綾が彼を覚えていたのかは知らない。

でもあの子のことだから思い出しているのではないかと思う。

天候は雨。

傘もいらぬ程度の雨の日だ。

仕事帰りに買っていた酒を暮へ供えた。

「咲、ワインは勘弁してくれよ。売り切れだ、たぶん」

言い訳のような台詞を呟いた。

妻の咲はワイン派だったらしい。

「綾はやはり良い子だ。あと、雫くんも相変わらず綾を気に入って

るぞ！うむ間違いない！」

気合いの入った姿はいつもと同じだった。

「これは感だがな。綾の進学先の大学を雫くんは受ける。なぜならあれで雫くんは綾に依存の傾向がある。こっそり交際しているかもしれない！もちろんそれなら喜ばしいことだが、お前の願いはまだまだ達成できなさそうだ」

いつになくシリアスな顔。

剛は昔を思い出す。

まだ元気だったころに妻の咲が言った言葉を。

剛は口を再び開いた。

「『しずくちゃん 女装計画！』は難しいなあ。ガードが堅くてな、はっはっ！」

真面目な表情を崩して、そんなおかしなことを言うのだった。

「パパ？どうしたの、急に笑い出して。…傘も差さないで」

「昔のことを思い出していたんだよ。そうだ綾。今度雫くんをここへ連れてこよう」

「星川くんを？どうして？」

どうやら検討が付かないようだ。

そうなると綾も昔、雫くんが妻と会ったことを忘れていたのか。

「ちよつと、な。さて、最後に挨拶してから帰ろう！」

二人は目を瞑り、咲への挨拶を済ませる。

そして二人は車に乗り込んだ。

「ねえパパ」

「なんだ、綾？」

「本当にどうして星川くんのことを気に入ってるの？」

「はて？」

「はて？って…」

「強いて言うならこんな息子がいたら楽しいだろうなあと思ったのかもしれない」

「パパらしいわね」

二人が自宅に着いたあと、綾を先に家へ入れて剛は雨の中ランニングを始めた。

近所の公園付近まで走ると、一旦止まった。

「あれ…。剛さん？」

「おお、おお！ 栗くんじゃないか！」

偶然にも栗と接触した。

「どうしたんですか、こんなところで。…傘も差さずに」

「気分転換さ」

「はあ…そうですか。剛さんらしいですね」

「うむ。なんかデジャブ」

「え？」

「ところで栗くん。ちょっと付いてきてはくれないか？」

「自宅ですか？」

剛は首を横に振る。

「お墓参りだ」

きよとんとする栗の背中を押しながら進んだのであった。

第二十六話

私、榛原 葉月が雫先輩と玲ちゃんと出会ったのは中学に入学して間もない時だった。

小学校は元々あの二人と別。

だから接点は玲ちゃんとクラスメイトだったこと。

まだクラスに馴染んでいない私は一人で昼休みの廊下を歩いていた。

教室などの位置を把握するためでもあったけど、なんだかそうゆう気分だった。

まだ時間もある。

折角だから屋上にでも寄ろう。

先輩たちがいたらすぐに立ち去ろうかな、なんて考えた。

屋上の扉は開いていた。

誰かいると直感で察した。

でも騒がしくないし、怖い人はいなさそうだと思った。

だから進んだ。

「玲か？」

最初に聞いた声はその一言だった。

その人物は分かる通り雫先輩だ。

当時の印象はあまりよさそうな男じゃないだ。

なんだか他人に興味はなさそうだし、幾ら容姿がよくても好めない。

でもどこか私の叔父さんに雰囲気似ているかも。

先輩は私を見るといかにもどうでもよさそうに仰向けになった。

なんだかムツとしちゃってわざと近づいた。

隣に私が座ると、先輩は迷惑そうに睨む。

でもそんな視線なんて慣れっこ。

先輩は目を閉じた。

それは本気で私を拒絶しているという表現しているんだと思った。それは違ったと知る。

「俺みたい奴の近くにいない方がいい」

「はい？」

「お前、新入生だろ？俺はあんまりこの中学で評判良くない。折角入学したのに災難な目に合うかもしれない」

「そういえば確かに制服着てないですもんね。あ、ズボンも制服仕様ですねー」

先輩は黙る。

私は質問してみた。

「『れい』って、彼女ですか？」

「…ちつ。…妹」

舌打ちしながらも教えてくれた。

「やっぱり私と同じ新入生ですよね？知ってるかも。先輩の名前は？」

「星川……栗」

「星川……。あつ、やっぱり知ってます！同じクラスだ」
すると先輩は興味を持ったように視線を合わせた。

鋭い眼つきだけど、どこか優しそうな表情だった。

「そうなのか？」

「はい。私は榛原です。名前は葉月」

「榛原、か」

「葉月ちゃんって呼んでくださいね」

さすがに抵抗があるような反応が現れた。

でも、それがなんだか可愛らしく見えてしまう。

「そうだ。その『れい』って人とここで待ち合わせ？」

「違う。さっきのは感で言ってみただけだ」

「もしよければ私と友達になりませんか？」

「あのな…。俺は教師から見れば不良なんだ。って、そもそも唐突すぎる！」

「私に気を遣ってくれてるし、不良には見えませんよ？今日は時間ないんで、次に会った時に返事よろしくです！」

「あ…おい！」

私は無視して階段を下った。

情けで友達になりたいと言ったつもりはない。

単純にやっぱり良い人そうだったから。

「そして程無く兄妹とは程なく友人関係になりました」

「へへ。それがきつかけだったんだね、兄さんと葉月ちゃんは」

「はあ…。来て最初の会話が昔話か」

俺は今、葉月ちゃんの部屋にいる。

約束(?)通りに休日には玲と共にここへ訪れた。

親も不在なようで、案外静かだった。

そして今までは昔話を聴いていた。

「それにしても兄さん。女の子だからってすぐに私だと思わないでね？」

「あの時は丁度寝起きだったんだ。玲の夢を見ていたから、つい」

「つい、って零先輩。つくづくシスコンですね」

「んだよ。悪いのか？」

「いえいえ。ただ玲ちゃんも幸せ者だな」と

「葉月ちゃん。それでこの後はどうするんだ。昔話は俺からは出ないぞ」

「私もだよ。前に一杯話しちゃったから」

「二人とも昔話だけの為にここに来たわけじゃないでしょ？だから遊ぼう！」

「単純だなー…。」

「で？何して遊ぶんだ？特になら帰りたいんだが」

「あ、そうだ。葉月ちゃん、もう二人友達を呼んでいいかな？」

「ん？いいよ、玲ちゃん。いつもの二人ね」

「うん」

「おーい。俺はどうすれば…？」

星川 雫を兄にもつ星川 玲。

彼女もまた、ブラコンである。

兄の愛情を余すことなく受けた結果のことだ。

これでどうにもならないなら本気で兄の雫を嫌っていたに違いないが、現実にはブラコン。

雫が紺野 咲と云う女性と会う時間の頃。

玲は友人たちと帰宅するのだった。

当初は兄と帰るつもりだったものの、その雫が珍しく断った。

その時はいつもと変わらぬ対応で応えた。

が、今は誰から見ても落ち込んでいた。

友人たちは慰めながら歩くことになっていた。

「玲ちゃん、元気だしなって！」

「あの星川兄のこと。どうせ気まぐれに決まってる」

一人は活発そうな女子で、もう一人は眼鏡をかけた無表情な女子。

二人は玲の横でそう話をする。

当の本人というと。

「別に元気だもん。落ち込んでないもん。兄さんが一緒に帰ってくれないからって気にしないもん、いいもん。どうせまた他の女の子から告白されてるんだよ」

念仏のように愚痴る。

二人はやれやれと息を吐いた。

「ブラコンだねー玲ちゃんって」

「ぶらこん？」

初耳だつたらしく、不思議そうに反応した。
眼鏡の子が口を開く。

「つまり、兄大好きな子だねって言いたいよね？」

「こそ！」

それを聴くと玲は顔を真っ赤にする。

そして言い返す。

「ちっ、違うもん！！」

「またまた玲ちゃん」

「明らかに嘘」

「うう」

既にクラスでは誰もが認識している。

もちろん本人は知らないが。

話をするうちに段々元気を取り戻していた。

「玲ちゃんはお兄さんが王子様だからねー。結婚したいか思ったことあるっしょ？」

「なななな！！？」

「判りやすいね、この子」

「ち、ちがうもーん！」

少女の声が響いたのだった。

「ということがあったわけよ！どつどつ？」

途中から来た里中さとなか、桜花おうかは得意げな表情で言う。

その横で眼鏡の少女、瀬川せがわ、里香りかは無言で頷く。

「へへ。何だか楽しそうな話だったね」

「全然楽しくないよー！私ばかり苛められてたもん！」

「ところで話の渦中である玲ちゃんのお兄さんだけど…」

「…流石は星川兄。この状況下で寝ている」

雫はこの二人が来てすぐに眠ってしまった。

どうやら元々睡魔がきていたらしい。

「今話を聴かせたら雫先輩も喜んでたんじゃないかな？玲ちゃんがブラコンって知れば」

「だ、だから〜！」

「むふふ。玲ちゃんは可愛いな〜」

「…桜花は親父臭いから可愛くない」

「むう！里香なんか…頭が良くて、冷静で…」

「桜花ちゃん。それ褒めてるだけけど…」

「まあまあ玲ちゃん。見てて面白いからいいんじゃないかな？」

「…私としても褒められることは嬉しい」

「く〜！里香の悪い点が思いつかない！」

この騒がしい中でも、雫は隅っこで眠っていたのだった。

第二十七話

数日後

ここ最近は生徒会の立候補者の演説があつた。結局出たのは二人だけでそれは綾先輩と如月先輩だつた。他は推薦者さえ存在せず、どちらかが生徒会長になればもう一人が副会長を務める方式になつた。

この学校は本当に適当なことをする。

そして投票日が明日へと迫つた日のことだつた。

「粟はどーすんだ？」

「どうするって…票のことか？」

「ああ、そのこと」

翔が俺に明日の投票を誰に入れるのか尋ねた。

実のところまだ決めかねている。

二人とも人材的には抜群だと思つた。

今まで綾先輩くらいしか上級生を知らなかつたから前までは迷いなく綾先輩だつたと思つた。

けど、如月先輩の演説やそれまでの行動を見ると綾先輩と互角なんじゃないかと思つた。

しかもどちらもあり合ひ。

俺はどちらにするかで悩んでいたところだつた。

「まあ俺は紺野先輩にするけどさ…。如月先輩も凄い人っぽいけど紺野先輩は実績あるからな」

「私も翔と同じ。如月先輩もいいと思つけど、やっぱり知名度がね」
唯の言う通り。

今回は綾先輩がいるということが如月先輩の誤算だ。

既に綾先輩のことはほぼ全校生徒が認知してる。

如月先輩もそこそこだけど、相手が相手なだけに苦勞するはずだ。

「そんでお前は？」

「まだ…決めてない」

「そっか。ま、明日だし早く決意しろよ」

「ところで紺野さんは？」

「私…？」

たぶん皐月は綾先輩に決めているのだろうけど。

でも予想外の返答がきた。

「雫と同じにする…」

ぬいぐるみで顔を隠しながら小さく呟く。

「そうなんだ。雫も頼りにされてるね？」

よくわからないが、唯に睨まれている気がする。

表情こそ笑顔んだけど、なにか違和感が。

それは置いておき明日の投票のことを考えていた。

場所変わってある廊下。

「あ、紺野さん」

「あら？如月くん。奇遇ね」

二人は偶然にも鉢合わせた。

輝は軽く笑みを浮かべながら話す。

「やっぱり紺野さんの人気は凄いな。俺なんか圧倒されっぱなしだ

よ

「そうですね？如月くんも随分人気者のように思えるけど」

「えっ？そうかな…？実際は俺よりも晴彦の方が有名なんだけどな」

二人は小さく吹き出す。

「そっか。紺野さんってどうして立候補を？」

立候補の理由は先日の演説に含まれていた。

それでも輝はあえてその理由を訊いた。

綾はその意味を理解し、返事をした。

「本当の理由…ってことね？」

「はい。俺は演説の通りですけどね…」

輝は演説の際に仲間と賭け事をして負け、立候補を決意したと本音を言った。

そのとき会場だった体育館はざわめいた。

でも輝は続けていった。

立候補したかった気持ちは最初からあった。

仲間が賭け事というもので自分を後押ししてくれたのだと。

「素敵だと思えますよ？自分に素直で」

「紺野さんに褒められると本当にそんな気がするよ」

「…私の本当の理由…ね。実際、よくわからないわ」

「そっか。でも、なんとなく俺にはわかるけどね」

「あら。それは何でしょうか、如月くん」

茶化すように綾を答えを促す。

輝は一瞬苦笑いをしたが、言ってみることにした。

「好きな人のため…とか」

「…よく意味が理解できないんだけど」

綾は眉を顰める。

「唐突だったな。例えば昔からそれなりに仲が良い知り合いがいて、その相手は自分のことを頼りにしている。それでその人の思いに合わせようと立候補した…。とか？」

「面白いことを言うのね。如月くんって」

「でしょ？まあ、晴彦ほどではないけど」

この場にはいない友人を茶化すように言う。

だがそれが本心からの台詞ではないことは誰から見ても明らか。

綾は輝の言った言葉を復唱する。

もちろん言葉には出さないが。

「それって…私が気にかけている異性がいるってことでいい？」

「異性かはともかく、まあ今のは俺の妄想だとも思ってたよ。ちょっと興味が出ただけだから。　　げっ。もうこんな時間か。ごめん、紺野さん。俺、仲間の分の飲み物買う途中だった！それじゃあまた！」

そう言うと輝は立ち去った。

走らなかつたのは偉かつたと思った。

そこは綾も感心した。

「好きな人のため、ね」

もう一度その言葉の意味を考えていたのだった。

翌日。

投票が始まった。

それぞれの学年で時間が違うため、混むことはない。

遂に雫たちのクラスの順番が回ってきた。

「翔達のクラスはもう終わってるわね。昨日言った通り、紺野先輩でしょうね」

「ああ。そうだろうな」

唯と話をしている時、皐月に肩を叩かれた。

「…雫。決めたの？」

「決めた。よく考えてみたんだ。だから後悔はしない」

「そう。…私も自分で決めることにするね？」

「それがいいな」

そして用紙を貰う。

紺野 綾。そして如月 輝という名前が書かれている。

俺は選んだ名前の上に丸を付ける。

その紙を折り畳み、投票箱へ投下した。

そして更に翌日。

投票結果が発表される。

それは昼休みに放送で流されることになっている。

最近では俺はよく教室にいるようになった。
臯月が転入してからこうだ。

おかげで翔ともよく会うようになってる。

「いよいよだな」

「誰になるのかな」

翔と唯は結果が待ち遠しいようだ。

まあ二人しかいないんだから、どっちも役員にはなるんだが。

でも俺も内心は興味を持っていたりする。

ちなみに俺が投票したのは如月先輩だ。

なぜかと問われれば即答はできない。

でも彼は一生懸命だった。

自分のことを皆に伝えるために努力していたことはよく知っている。

綾先輩のように最初から周知の的である人が相手だけに必死だった。

俺はその努力と、やる気で彼に投票することに決めた。

もちろん綾先輩が劣っているということではない。

ただ俺にとっては、今回は如月先輩が一生懸命やっていたところをよく見ていたからだ。

いつも傍らには、おそらく晴彦先輩であろう人がいたのを覚えてる。

晴彦先輩はその親友のために精一杯活動をしていた。

その友情が羨ましく、そして美しく見えたことも理由に含まれる

一票だった。

そんなことを思っているとき、放送が流れた。

『これより、投票の結果を発表します』

待ちに待った結果の発表が遂にやってきた。

第二十八話

俺は放課後、生徒会室へ訪れていた。

綾先輩に会うつもりで。

「失礼します」

俺は中を見た。

やはり綾先輩がいた。

他には誰も居ない。

「星川くん。来ると思ったわ」

若干呆れたように俺に声をかけた。

「先輩。お疲れ様です」

「どうも。労われるとは思ってもみなかったわ」

「その」

「別に落ち込んでいないわ」

当選の結果はこうだった。

紺野 綾先輩が四割。

如月 輝先輩が六割。

結果、如月先輩が会長となり、綾先輩が引き続き副会長となった。

俺のクラスも結構驚いていた。

意外、といえば失礼だがつきりその逆だと思っていた生徒が多いと思う。

書記などは後日発表することだった。

「私は『二番』が合うのかもしれないわね…」

「二番、ですか…」

たぶん中学の時も生徒会長に立候補していたんだと思う。

でも今回のように副会長になった。

なにがいけなかったのか、本人は悩んでいるんじゃないか。

「ところで星川くん。あなたはどっちに投票したのかしら？」

「…そういうのって、言っていていいんですか？」

「終わったからいいの」

確かに終わったからといっていいとは限らない。

別に言ってもいいが躊躇う。

俺が入れたのは綾先輩じゃないから。

「俺は…如月先輩に入れました」

「そう」

いつものように冷静。

でもいつもとは違う、冷め切った目で俺を見つめているように感じた。

「なぜ、と訊いてもいい？やっぱり、私じゃ不安だった？」

「いや、違います。俺個人は如月先輩に投票しようと思った。…それだけです」

「だからどうして？」

「如月先輩と、その周りの人たちの活動に目がいったからですかね

…」

「…そう」

さつきよりも少し間を置いて返事がきた。

今度は俺から視線を外していた。

その視線を追って見た。

夕日が眩しい。

「やっぱり、友達想いの人がいいのかな…」

どういう意味なのだろうか。

俺はなんだか綾先輩がか弱く見えた。

「どうでしょうね。俺にはわかりません」

「でも実際に星川くんは如月くんへ投票したでしょ？」

「そう…ですね」

これ以上まともな返事が出来ないような気がしていた。
たぶん俺じゃ綾先輩の納得できる答えは出せない。

「ねえ、星川くん。一番になれると思う？」

「え？」

「私は何でもいいから、一番になれると思う？」

「なに言ってるんですか。今まで十分に働いていたし、ほとんどの生徒も教師も認めてると思う」

違和感というか言葉にし辛い雰囲気が漂う。

「どうして立候補したのか、考えてたのよ」

「立候補の理由、ですか？演説の内容で言っただけじゃ？」

「あれは建前よ」

確かに綺麗事過ぎると思った。

あれは本心じゃなかったということか。

誰でもそういうことはする。

だから別に綾先輩だってやっても不思議じゃない。

「本当の理由を考えてみたの。それを考えるきっかけは如月くんがくれたの」

「如月先輩が？」

「ええ、とても唐突だったけど」

綾先輩がまだ冷めた瞳で俺を見据える。

俺は蛇に睨まれた蛙のように動けなかった。

「私はただ星川くん。好かれたかったのよ。立派でなければ私と話してくれない。そう思ったの」

「好かれたかった？」

急に何を言い出すんだろうと思った。

好かれたかった？

誰に？

「それなのにその人は私に票を入れなかった。やっぱり私は無理なのかしら」

「らしくないですよ、綾先輩。とにかく、明日から頑張ればいいじゃないですか」

何て言えばわからずにそう言ってしまった。

綾先輩の瞳はようやく普通になった。

とは言つもの、呆れた表情だったが。

「星川くん」

「はい？」

「本当に、相変わらずね。これで気が付いてもらえなかったのは驚いたわ」

「…？」

「何でもないわ。それじゃあまた、星川くん」

よくわからなかったが、取りあえず俺はここから出た。

廊下に出て生徒会室の扉を閉める。

「…ふう」

いつの間にか雨が降っていたことに気付き気落ちした。

第二十九話

「……………」

「どうしたの？」

皐月が心配そうに俺に声をかけた。

俺は昨日のことを考えていた。

綾先輩のことだ。

ああ見えても、まだ落ち込んでいるかもしれない。

朝からそのことに思いつめていた。

かと言って励ますような言葉もなく、いつも通りに接すればいいのかもしれないとも思っている。

「いや…。そうだ皐月。綾先輩の家に泊まってるんだよね？」

「うん」

「昨日の綾先輩、どうだった？」

「お姉ちゃん？…元気だったよ？とても、笑顔だったとても笑顔か。」

ならこっちが深刻に考える必要はないのかもしれない。少しほっとした。

「なあ皐月。好かれたいって、どういう時に思う？」

「…？好きになってもらいたい時だと思うの」

「そりゃそうだよな…」

あの時に綾先輩が言った言葉。

確かに好かれないといっていた。

あれはどういう意味だったのか、それを確かめたかった。別に気にしなくてもいいはずなのに、引っかかっていた。

「みんな今日も元気かー？明日はやっと休みだし頑張って授業受けるよー！じゃないと先生が後で注意されるんだからな」

担任のお決まりの挨拶。

また日常が始まる。

そのあとはちよつとした話を俺たちは黙って聞いていた。そしてSHRが終わり、十分休み。

「失礼します。星川くんはいますか？」

綾先輩だった。

ここへ来ることだけでも珍しいというのに臯月ではなく俺を指名していた。

これには隣の臯月も意外そうだった。

「おう紺野。そこに座ってるぞ」

「ありがとうございます」

担任は俺の方を指差す。

綾先輩は俺を確認すると笑みを浮べた。

他人から見れば普通の笑みだったかもしれない。

でも俺にはなんだか裏のある笑みに見えた。

何となくだけ…。

「星川くん。あなたには生徒会役員になってもらいます」

「断ります」

驚いた。

でも反射的に俺は即答した。

返事の後で綾先輩の言葉を理解したようなものだ。

「拒否されるのは予想外だったわね」

「今後はそうなると思ってください」

どうして俺に役員になれと言ったのか。

そこが不可解だ。

どう考えても頭がおかしいとしか思えない。

「そう…。臯月。あなたはどうする？」

「私？どちらでもいいよ…？」

「なら入りなさい。星川くん。もう一度訊くけど、どうかしら？」

「…わかりました」

そう言つと満面の笑みを浮べて教室から出て行つた。

「どうして最後は了承したのよ？」

唯が当然の質問をする。

今は昼休みではないから、翔はいない。

同じ時に居たら唯の隣で同じことを訊いていただろう。

「臯月が入るからだ。…なにか悪いのか？」

「べつにつに」

「…なら何でそんなに睨むんだよ」

「睨んでないわよ。それより、本当にいいの？玲ちゃんの迎えとか」

「…考えてなかった」

「全く。今なら取り消せるんじゃないの？」

「ああ…いや、無理だろうな。あの人のことだし、一度言ったことは遂行する」

中学の時からそうだったから間違いない。

「はあ…。まあ玲ちゃんにはちゃんと説明するのよ？」

「わかつてる」

「案外早く仕事とかあるんじゃない？ほら、もうすぐ私たちって修学旅行だし」

「詳しくは知らないけど、それはそういう係の奴がやるだろ。どっちにしるさぼるさ」

「凄い役員ね…」

唯は呆れた目で俺を見る。

なるとは言つたが、仕事を真面目にするとは断言していない。

玲とはここ最近一緒に帰る回数が減り気味だ。

生徒会の仕事で余計に減るのは御免だ。

「でも紺野さんがいるから生徒会は安心ね」

「……………」

その臯月は何だかボクっとしていた。

「臯月？」

「え…何？」

ようやく意識がこちらに戻ってきたらしい。もちろん話の内容は聴いていないだろう。

「大したことじゃないよ。ただ紺野さんなら生徒会で上手くやっていけるだろうなーって」

「ありがとう、唯さん」

恥ずかしいのかクマのぬいぐるみを強く握り、顔を埋めた。

そろそろ変形したぬいぐるみに慣れてきた。

「……………」

再び何か考え込む臯月。

その考えなどわかるはずもなく、俺は邪魔をしないようにしていた。た。

いや、臯月はむしろ何も考えていないのかもしれない。

玲ちゃん達と遊んだ日から大分経った。

どうもあれから何度か雫先輩が玲ちゃんと一緒に帰ることを断ることが増えていた。

そういう時は玲ちゃんは部活で忘れようとしているのが目に見えてわかる。

でも最後には一人で帰ることになるんだけど。

できるだけ私はそのときに一緒に帰るようにしてる。

可哀想で仕方がないから。

それにしても

「ブラコンだよねえ」

本人は全否定している。

けど、私たち他人から見たらそうとしか思えない。

今にして思えば、学校で会話するときも兄の話はよくしていた。

本人には悪いけど、重症だと思つよ。

その本人は今は掃除でない。

終わればあとは部活か帰宅だけど、多分帰宅すると思う。

うちの部活動は特に厳しいわけではないから、無断で休んでも大丈夫。

とは言え休み過ぎは流石によろしくない。

だから度々顔は出している。

「お待たせ葉月ちゃん」

「来た来た。どうする？」

「帰ろつか」

「…また先輩は無理だった？」

「うん」

今日もか。

最近はそれが普通になりつつあるけれど。

私たちは帰宅することにして、玄関を出た。

帰宅部の人たちは案外多いと実感する。

どれだけこの中学が緩いかと言われればまず部活動を挙げる。

強制的に入ることはないし、休んでもどうこう言われない。

大会が近いところは流石に練習がきついけど、他校に比べれば断

然楽。

とまあ、そんなことを考えていたわけだけだ。

そこである人と接触した。

「あれれ〜？玲ちゃん」

「あ、冬子さん！」

見知らぬ女性がこちらへ向かい走ってきた。

冬子さんと呼んでいたけど、どこかで聞いた事があるかもしれない。

「そつちの子はお友達？」

「はい。榛原 葉月です」

「はじめまして。私は柊 冬子だよん」

柗という苗字で大体理解した。

確か雫先輩と同級生の柗 唯先輩のお姉さんだと思っ
話で少し出てきたことがあったかもしれない。

うちのお父さんとお母さんの会話でも出ていたような
実はかなり有名人だったりするのかな？

「奇遇ですね、冬子さん。お買い物ですか？」

「うんうん。おなかがあつちやつて。てへ」

「相変わらずお元気そうで」

「すごい元気よ。ところで雫ちゃんは？」

「兄は学校です」

「そっか。残念だな、詳しく訊こうと思ったのにい
冬子さんという女性は大袈裟なりアクションをする。

それにしてもあの先輩を『ちゃん』付けで呼ぶなんて。

あの無愛想な先輩からは印象付けにくい。

「訊くつて、何をです？」

「最近の雫ちゃんは何か悩み事があったっばいから、それを聞き出
そうかな。って。えへ」

なぜここでウィンクなんだろう。

「悩んでいる…」

「うん。玲ちゃんは気がつかなかった？」

「はい。そういう風には」

「なら私の勘違いかもね。でも相談はいつでも引き受けるって伝え
てね」

「わかりました。わざわざありがとうございます冬子さん」

「困ったときはお互い様だよ。唯ちゃん共々、よろしくね？」

そういうと彼女は去って行った。

「凄い人なんだね。冬子さんって」

「昔からああなんだよ。ちよつと羨ましいな」

「羨ましいってことは、ああんりたいの？玲ちゃんは」

「なりたいて言うか、自分に嘘をつかないところが私は好きだな」

確かにあれは嘘なんかつかない性格だと思う。
やっぱり玲ちゃんと雫先輩の周りは楽しい人が沢山いる。
そんなことを再び思い知らされた私でした。

第三十話

武は兄の剛から呼び出された。

学校が終わったたら兄の家に向かった。

「待っていたぞ武」

「何か用ですか？」

玄関の前でそう訊く。

すると剛は手をふらふら振りながら言った。

「いや別がない。ただ話でもしようとな」

兄はそういうと僕の背中を押して中へ連れ込んだ。

「それでこの地での仕事はどうだ？」

「慣れた。なかなかいい子達ばかりで逆につまらないかな？とこ

ろで臯月は？」

「臯月ちゃんも綾と仲良しで相変わらずだぞ！それにあの少年とも

仲が良いらしいな」

「あの少年。ああ、雫くんのことだね？」

「その通り！」

正直な話、雫くと仲が良いのは意外だった。

噂だと雫くんはあまり人と関わるうとしていないらしい。

だからうちの娘と仲が良いとは思ってもみなかった。

「ところでお前のところの奥さんは大丈夫なのか？」

「心配はいらないよ」

妻は今は自分と一緒に暮らしていない。

僕と娘だけがこの街に来た。

妻も仕事の関係でここへは来れず、向こうに残ることになった。

「兄さんこそ、大丈夫なの？綾ちゃんのこと、一人で看きれてないのにつちの臯月まで世話をしてもらって」

「心配無用！家政婦さんもいるからな。それに、子供は好きだ」

「…悪いね。こっちも落ち着いたら臯月と暮らすよ。それで兄さん、仕事の方は何ともない？」

それを訊くと兄は顔色が変わった。

いや真面目顔になったというべきか。

「正直な話、順調とは言えないな。だからと言って倒産するとかいう話ではないがな」

「順調ではないということは、また？」

「ああ、まただ」

そうか、またか。

ともかくこれは僕にはどうすることもできない。

その後、兄とはこの後も他愛無い話を続けていた。

俺は放課後に強引に拉致された。

拉致だから強引で当然なのだと思うけど。

あのあと臯月たちと帰ろうとしたら、綾先輩が颯爽と現れて俺を引きずりだした。

結局今日は玲とは帰れず、断りの連絡を入れることとなった。

「綾先輩…。俺、今日は帰りたいんですけど」

「残念だけどそれは無理よ。今日は自己紹介だから」

「紹介？」

「ええ。顔合わせよ。星川くんはさぼっていて居なかったから。その後はすぐに帰って構わないわよ」

顔合わせをするのか。

名前とクラスくらい言えばいいか。

そんなことを思っているうちに生徒会室へ到着した。

後ろからついてきていた臯月が初めに入って行った。

「さあ、入るわよ」

そして俺たちも中へと入った。
紹介といつてもあつさりしたもの。

すぐに自己紹介は終わり、即解散となった。

俺も帰ろうかと思つたが、如月先輩に声をかけることにした。

「如月先輩。一応今後ともよろしくお願いします」

「こちらこそ。それにしても随分放棄していたよな、君も」

苦笑いを浮べる。

すると綾先輩が近寄る。

「星川くんと如月くん。どことなく二人は似ているわね」

「俺と星川くんが似ている？例えばどこが？」

「言うならその雰囲気ね。詳細は伏せます」

「貶されてるのかな、俺は……」

如月先輩が軽く落ち込んだ。

とは言つてもそんなに気に留めていないように見える。

正直俺はこんなに感情豊かな人と似ているようには思えない。

しかも雰囲気なんて尚更。

「皐月。…寝てるわね」

綾先輩が皐月の頭を撫でている。

寝ている皐月はぬいぐるみを机に置いている。

そのクマが俺を見つめているような気がしてなんだか居心地が悪い。
い。

恐れ、というんだろうかこの感情は。

「私はこの子が目を覚ますまで待つけど、二人は帰ってもいいわよ？」

「そうさせてもらいます」

俺はそう返事をする。

「それじゃあ、俺もそうしようかな。またな、紺野さん」

如月先輩も帰ることにした。

俺たちは順に部屋から出た。

「星川くん。また今度」

「ええ…。また」

俺たちは出て直ぐに別れた。

如月先輩はどうやら自分の教室の方へ戻っていったようだ。
友人でも待っているのか。

「…っ」

扉から見つめられているような感じがする。

あのクマだろうか。

薄気味悪くなった俺はすぐに退散した。

それから一日が経過。

今日は土曜日。

学校は休みで、部活もないから家にいた。

もう午後だし外に出るつもりはない。

「平穩だな」

最近はいろいろ騒がしかったりしたから、今日はゆっくりした時間の流れだったように思えた。

玲は葉月ちゃんの家にお邪魔させてもらっている。

今はこの家に俺一人だけ。

自分の部屋で暇潰しにテレビを点けたが、たいして興味を示すものはなかった。

教科書も見えていたが飽きてしまった。

ベッドで仰向けになる。

取りあえず寝よう。

第三十一話

気がついたら日付が変わっていた。

昨日の夕食は抜いたから空腹だ。

着替えもしていない。

まずは食事を済ませてから風呂へ入ることに決めた。

俺は下の階へ降りる。

「おはよう兄さん。昨日は寝てたの？」

「そうだ。なにかないか？」

「パンなら」

「それでいい」

早速食パンを貰いジャムを塗った。

頬張っていると玲がこちらを見ていることに気がついた。

「どうした？」

「えっと、最近一緒に帰れないみたいだけど。なにか大変なの？」

「いろいろあったんだ…。いろいろ…」

最近の出来事では綾先輩に無理矢理生徒会へ入れられたこととか。

「そうなんだ。葉月ちゃんと帰ったりするからいいけど…」

「悪いな。俺の都合で」

「仕方ないよ。あ、そうだ。冬子さんが何かあればいつでも相談し

てって」

「冬子さんが？…嫌な予感しかしないな」

「もう。そんなこと言って。私たちより長く生きてるんだから頼り

にしてもいいと思うよ」

「長く生きていてあれだからな…。余計に心配なんだよ。唯も大変

だろうな」

「それもそうかも…」

でも本当にあの性格が冬子さんの本当の姿なのか。
俺はそれに自身を持って答えられない。

もしかしたらあの性格は演じているだけなのかもしれない。
だとすれば家族をも騙しているということになるから、現実的ではないかもしれない。

もし、あれが演技なら、何か厄介事を抱えているのかもしれない。
… 確証なんて何も無い。

あの人はあれで大人だ。

時と場合はきちんと考えるだろうけど、働くなら普通にしてもらいたい。

「兄さんって、冬子さんのこと苦手だったりする?」

「ある一点だけを省けばそんなことないぞ」

「あ、ブランコだよな?」

「……………」

冬子さんに無理矢理やらされたあの技。

あれのせいでトラウマになった。

以来、乗っていないし話にも出さなかったブランコという代物。

原因となった本人はそのことに気がついているんだろうか。

よくよく考えてみると俺は冬子さんとあまり会った機会が少ない
と思っていたが、それでもなかったのかもしれない。

他人とあまり遊ばなかった俺を外へ出してくれたのはあの人だった。

唯と翔に会わせてくれたのもあの人だった。

冬子さんは子供ながらに年下の俺のことを気遣ってくれたんだろ
うか。

だとしたら少ないながらも友人を与えてくれたことに感謝だ。

ただ、昔からあの性格だからどうもこの考えに自信が欠ける。

冬子さんには悪いけど、そんなに大人の考えを持っていたのか不
思議だ。

「玲は冬子さんとは仲がいいのか?」

「今更だよ。最近はそんなに会わなかったけど、兄さんよりは仲良しな自信はあるよ」

確かに昔から冬子さんに懐いていた。

懐きすぎて、玲を取られたように感じて冬子さんに嫉妬したこともあった記憶がある。

恥ずかしい話だ。

「ところで兄さん。今日も出かけないの？」

「特に出かける理由もないから…。家にいようと思った」

「暇なら一緒に出かけない？」

「出かけるって…」

「デートだよ。デート」

「でーとお!？」

「きゃっ！急に大きな声出さないでよ」

玲と一緒に出かけるなんて久しぶりな気がする。

それだけで俺は内心喜んでいる。

たぶん玲には分かると思うが、今の俺は少しにやけていた。

それも普通は見分けがつかない程度に。

むしろ他の人は俺を見て薄気味悪く思うだろう。

「いつ出る？」

「お昼からにしようよ。身支度もあるし」

「そうだな。ちゃんと着替えなきゃな」

「そんなに張り切ることかな？」

「玲とデート出来るんだ。当たり前だ」

妹相手だから別に異性と行くような感覚とは違う。

でも楽しみだった。

急に休日が楽しく感じた俺は柄にもなく…まあ、止めておこう。

そして昼。

あの後風呂に入り、仕度も済ませた。

飯はまだだ。

外食にすることに決めていたからだ。

「じゃあ行こうか、兄さん」

俺たちは久しぶりにプライベートで手を繋ぐ。

昔を思い出す。

「こういうときには限って、”あの人”が現れたんだ…」

「あれれ〜？お二人とも仲良くお出かけ〜？」

「あ、冬子さん」

「…冬子さん。やっぱり出たな…」

そう。

なぜか昔から俺たちが出かけるときにこの人と遭遇する。恐ろしく運が悪いのか、それとも良いと思っただけなのか。未だに結論は出ていない。

「兄妹仲良しでいいな〜。恋人さんみたいだよん」

「もっ、もう。冬子さんったら」

頬を染めてもじもじする玲。

「あ〜かわいい！うちに置いておきたいくらい」

「冬子さん。抑えてくれ」

今日もいつもの冬子さんだった。

さつき変なことを考えていたからか。

これは冬子さんの演技なんじゃないかと疑ってしまった。

そんな疑念を振り払い、俺は冬子さんを注意した。

「うう。雫ちゃんのケチンボ」

「それで結構ですよ。俺たちは行きますんで、それじゃ」

「ひ、酷いっ。自分の彼女を見捨てるなんて…雫ちゃん。私はただの遊びだったのね！」

「…怒りますよ？」

「うわーん。雫ちゃんこわーい」

棒読みで冬子さんが言う。

本当に子供っぽい人だ。

玲も苦笑いをしている。

「兄さん…。冬子さんとはそういう仲だったの？」

なんだか別の意味に見える気がしてきた…。

拳が震えている。

これは…もしかして。

「玲。怒ってるのか？」

「別に。怒ってないもん」

「そうは見えないんだけどな」

これは怒っている。

断言できる。

理由はわからないが、とにかくさっきの質問の返事を出すことに決めた。

「冬子さんとは普通の仲だ。恋人なんかじゃないぞ」

「本当？」

「ああ」

「えー雫ちゃん乗り悪いよ」

「静かにして下さい…」

それを聞いた玲は落ち着いたようだった。

「なーんだ。心配しちゃった」

「心配？」

「うん。でもそうだよ。兄さんが冬子さんみたいな凄い美人さんと付き合えるはずないもんね」

酷いことを言われた気がする。

でも玲だから構わない。

翔だったら殴る。

「あらあら。玲ちゃん褒めすぎだよ。私は特に美人じゃないもん」

「そんなことないです。羨ましいです」

「例えばどこが？」

俺がそう訊く。

「えつとね〜。スタイルいいし、勉強も出来るし、人気者だし、それからとっても良い人なところとかかな」

「玲ちゃんお世辞が上手いね〜。びっくり」

「本当ですよー冬子さん」

玲の話を聴いていると冬子さんはまるで万能だな。

唯一、性格があれなだけで。

「でもね玲ちゃん。私は別に雫ちゃんと呼き合ってもいいんだよ？」

「え？」

「…は？」

突如、冬子さんがさっきの話を蒸し返してきた。

「むしろ結婚してもいいくらいだよん 年上の私が嫌なら同い年の唯ちゃんとお付き合ってもらいたいな〜」

「なななな、何言っているんですか冬子さん！！」

「あらら？どうしたの玲ちゃん。そんなに焦って」

「ど、どうしたも何も…！」

かなり今の玲は不自然だと思う。

でも最愛の妹である玲だから妙でも構わない。

これが翔だったら蹴りだ。

理由？

いや、ないけど。

「まあそれは置いておき〜。二人の邪魔をしないように私は退散しまーす。ばいばい二人とも」

そう言うつと冬子さんは行ってしまった。

言いたいことだけ言って去って行ったな、あの人。

ともかく俺たちは商店街へ向かった。

特に店の中に入るでもなく、手を繋いだまま歩いていた。

「そろそろお昼ご飯にする？」

「そうだな…。そうしよう」

俺たちは昼食を摂る事にした。

店はどこでもいいとの提案だったから、ラーメンにした。

「いらつしゃいませ」

中へ入るとスープの香りが漂っていた。
空いている席へ座って店員を呼ぶ。

「醤油と味噌一つずつで」

「醤油一つ、味噌一つですな?」

「はい」

「畏まりました。お待ちください」

注文を済ませた俺は用意された水を飲んだ。

「私がいっつも味噌ラーメンなの覚えてくれてたんだね」

「忘れようがないだろ? いっつもそれだったし」

数少ない家族全員での食事。

親が麺が好きでラーメン屋に来ていた。

そのときはいつも玲は味噌だった。

何気ない会話を十分ほどしていると、店員がやってきた。

「お待ちどう様です」

「…えっと、冬子さん?」

遠慮がちに玲が言う。

俺はまさかと思ってその店員を見る。

いつもの笑顔がそこにある。

ああ、やっぱり消えてはくれないか。

「な、なんで…」

「私、今日だけここでバイトなの。てへへ」

「有り得ない…」

「私なら出来ちゃうのよん」

そうか。

この近辺では冬子さんは云わずと知れた超人だ。
侮っていた。

まさかこんなところにも居るなんて…。

「じゅっくり〜」

そう言い冬子さんは仕事へ戻っていった。

「冬子さんってやっぱり凄いね、兄さん」

「いろんな方面でな」

それにしてもさっき別れたときは正反対の方を歩いていたはず。なんでこっち側にいるんだろうか。

もう冬子さんなら何でも出来るんじゃないかと本気で思い始めた。

第三十二話

「ありがとうございました」

最初の店員の挨拶が背中越しに聞こえる。

あの後から冬子さんは姿を晦ました。

妙な緊張を持つことなく堪能できた。

「美味しかったね。兄さん」

「そうだな。次はどうする？」

「公園に行かない？久しぶりに」

「…公園？」

「うん」

断る理由はない。

だから俺は公園に行くことにした。

「偶然だね。雫ちゃんに玲ちゃん」

「あ、冬子さん」

「…また…なのか」

俺は呆れ電信柱に寄り掛かる。

当然のように彼女はそこに居た。

片手にはアイスを持ち、もう片方の手には缶ジュースを持っていく。

見たことがない黒い缶だった。

「公園で二人とも遊ぶの？私も混ぜて混ぜてー」

子供のようにはしゃぐ。

いい大人のする行動ではない。

「別に遊ばないです」

「え」

不満気に声を漏らす。

この年齢になって公園の遊具で遊ぶのは恥ずかしい。
そんなことなどお構いなしの冬子さんは俺の腕を引っ張る。

「あそぼうよ〜」

「一人でやっていけばいいでしょう…」

「二人以上の方がいいよ？」

「…玲」

「うんわかった。冬子さん。私が付き合います」

「わーい」

玲と冬子さんは遊具へ向かって歩き出す。

ここまではほのぼのとしているが俺にはわかっている。

このあとの惨劇を。

「も、もうだめ…」

しばらくしないうちに玲が戻ってきた。

「冬子さん、昔と変わらないんだね…」

今も遊び続けているその本人を見ながら玲は言った。

「あの人はどんなに年齢を重ねてもああなんだらうな」

「羨ましいような…ちょっと怖いような」

俺達が中年になったとき、冬子さんはああやって遊んでいるのか。

もしかしたらそれに巻き込まれそうで未来が怖い。

玲も同じような考えをしていたのか表情が硬い。

「二人とも〜。遊ばないの？」

「疲れましたよ〜冬子さん」

「ええ〜もう？私はまだ大丈夫だよん」

「玲とあなたを一緒にするのが間違いです」

あれだけ運動をしていて汗一つ見せない冬子さん。

所詮公園の遊具、と割り切ってしまう気にならないだらう。

でもその遊び方が常人を超えているからどうしてもおかしいと思

う。

幼い頃もこの遊び方で俺を巻き込み、ブランコでのトラウマを植えつけることになった。

さつきもそのブランコで遊んでいたようだったが、見てみぬふりをした。

見るだけで吐き気が…。

「ねえねえ。このあとは何するのんっ？」

「もう帰ります…」

「ええー。折角遊び相手になったのに」

まさか、さつきから接触していたのって…。

俺たちを遊びに巻き込む為だった？

……いや、まさかそんな子供じみた考えの為にわざわざするか？
するのが冬子さんなんだけどさ。

「…どうする玲？」

「できれば帰りたいけど…冬子さんが健気に見えるし」
冬子さんは瞳を潤ませてこちらを見つめていた。

だけど俺はそんな目をされても動じない。

そんなことこの人もわかってる。

この人の対象は隣にいる玲だと思う。

玲は情に弱い面があるからそこを狙われた。

「そもそも冬子さん。あなたももう遊んでいる暇はないんじゃないですか？」

「そうなんだけど…」

珍しく気落ちしている。

その様子を見て思い出した。

就職関連で今、親と喧嘩中だったことを。

謝ったほうがいいと思ったときには冬子さんは俺達に背中を見せて歩いてた。

「あ、冬子さん」

「……………」

玲の呼びかけにも応じず立ち去った。

彼女なりに自分を保つために俺達と絡んでいたのかもしれない。

どちらにせよ彼女はもうすぐで俺達と気軽に会える機会が減る。

今のうちにしたいことをやらせてあげるべきだったんだろうか。

あの人があんなに子供じみた性格なのは、寂しいからじゃないだろうか。

そんなことを俺は考えていた。

第三十三話

雫たちが公園に居た時刻。

桂木 翔は部活帰り中だった。

眠そうに目を擦りながら欠伸をしている。

一見頼りなさそうな感じだが、それでも人望も厚く人気者だ。

昔からの付き合いである雫と唯。

この二人はそんな中でも特別だった。

どの知り合いよりもこの二人には自分の気持ちを全て吐き出せた。

(雫たちは何してんだろうな)

雫は無口で唯は対照的に社交的。

そんなグダグダなメンバーでも、一緒に居ると落ち着く。

それでも高校に入学して間もない頃、ある件で雫と喧嘩をした。

雫は怒っているわけでもなく、ただ困惑していたようだった。

原因は中学の時に唯が雫に告白していたこと。

そしてそれを断ったことも。

それについては二人の問題だから深く追求する気はなかった。

いつかは唯もそういう行動を取ると思っていたし驚くということはない。

二人が恋人になろうが幼馴染としての付き合いは変わることはない。

だが断った理由が妹の玲ちゃん絡みだと聞いた時はさすがに不快だった。

あいつは妹を優先にする男だった。

今でこそ落ち着いてきている方だが、あの頃の雫はかなりのシスコンだ。

他人の唯よりも、妹を取ることは有り得ないことじゃなかった。俺は雫に訊いた。

「お前、唯から告白されたんだってな」

「…ああ、知ってたのか」

少しばかり遅い質問になってしまったが、本人の口から聞きたかった。

「でもさ、どう見ても恋人には見えないよな二人とも」

我ながら白々しい演技だったと思う。

雫は多分気が付いていなかったと思う。

「付き合っていないからな」

「へー。そりゃ驚いた。まさか俺に気を使った訳じゃないだろうに」

「…なるほど、翔は理由が知りたいんだな？」

「ああ。何で断つたのか不思議だな」

「特別好きでもない。玲との時間が減る。…それだけだ」

人それぞれだが、そんな理由で唯の気持ちを断つたことに腹が立つた。

気付けば俺は殴りかかっていた。

個人的な願望だったが、できることなら二人一緒になってもらいたかった。

唯は雫を求めていたし、それを俺に相談したこともある。

俺もそれには協力的で影ながら協力してはいた。

でも雫本人はどう思っていたんだろう。

雫は本音をあまり言わない。

俺や唯のことは友達だと思っっているとは思うが、信頼しているのか。

あいつは本音を妹にしか言わない。

友達の俺達にさえも本音で語ったことは無かった。

俺は恐くなった。

もしかしたら俺や唯は頼りにされていないんじゃないか。

そもそもあいつにとっては玲ちゃんが全て。

その玲ちゃんが俺達と仲良くしたのがそもそものきっかけのようなものだった。

もし、玲ちゃんが俺達を拒めばあいつも俺達には興味を示さなかつただろう。

そんな嫌な考えが思い浮かんだ時もあった。

「うう…さびい…」

汗を掻いた後もあって、風が冷たく感じた。

その冷たさで俺は目が覚めた。

さっきまで雫のことを考えていたが、綺麗さっぱり断ち切れた。

(嫌なことは忘れなきゃな)

ふと歩みを止める。

前の方から冬子さんが向かってきていた。

顔は俯いているが、間違いない。

「随分久しぶりだなあ」

部活があるし、向かうも忙しいから都合が合わなかった。

雫と唯も含めて会うことは滅多になかった。

そういや雫に協力を申し込んだが、どうなったことやら…。

「冬子さーん！」

俺は呼んで手を振った。

気がついた冬子さんは手を振って返す。

しかしどこか寂しげに見えた。

「久しぶりですね。元気でした？」

「久しぶり〜。私は元気よん。君は？」

「見ての通りです」

その後、五分ほど立ち話をして別れた。

その時に俺は思った。

「元気、なかったよな…？」

いつもの冬子さんには思えなかった。

まあ少し経てば昔のように元通りだろう。
「あつ！好みのタイプでも訊いておくんだつた…」

その日の夜。

柘 冬子は唯の部屋のベッドで伸びていた。

「姉さん。自分の部屋で寝てよ…」

「……………」

「無視しないでよお」

帰ってきた時から姉さんは元気がなかった。

年がら年中元気が取り得の姉。

そんな姉の消沈さに驚きつつも、いつもの態度で接することに決めた。

「ねえ…唯ちゃん」

「なに？」

「私、遊ばないで真面目な大人になったほうがいいのかな？」

「へ？」

あの姉が…不真面目でもなぜか有名人の姉が有り得ない一言を。

「どうしたの突然？具合悪い？」

「やっぱりこの歳で遊び呆けているのって駄目なのかな…」

「姉さん。誰かに言われたの？」

誰に言われても動じないような人だ。

そんなことを気にするタイプじゃないと思うんだけど。

「うん。栗ちゃんに」

「…………栗に？」

「うん」

栗の言うことなら姉さんも多少なりとも動じる。

でもそんなこと前にも言われていたけど、その時はなんともなかった。
「……………」

やっぱり両親との喧嘩で悩み始めた頃だからなのかもしれない。

「うう… 雫ちゃん、私のこと嫌いなのかな？」

「それはないと思うけど… あ、どうだろ…？」

「どっち？どっちなの？」

「苦手意識はありそうかなあ。ほら、昔公園で遊んだとき。無理矢理ブランコに誘った時、あれから妙に苦手意識が出るような」

「がーん！楽しませようと思ったただけなのっ！？」

「姉さんの遊び方は雫には適応外だったのよ」

それにしても今になって思う。

どうしてあの時、雫と玲ちゃんを遊びに参加させたのか。

まあ遊び相手を増やしたかっただけなのかもしれないけど。

それでも私たちよりは年上だったから、少しくらい企みがあったかも。

「そうだ雫ちゃん。告白したの？」

「え？な、なんなの突然」

「雫ちゃんによう。どうなの？」

「はあ…。元気がないと思ったら、元に戻ってるし」

前々からよく訊かれていたこと。

でも思い出したくない。

断られたといったらどんな反応をするんだろう。

「雫ちゃん？どしたの？」

「何でもない。告白はしたよ」

そういうと姉の表情が驚きの顔に変わった。

「えっうそっ！？」

「ほんとほんと」

「いつ？どーして相談してくれなかったの？」

「頼りないから言わなかったの」

「それでそれで？もしかして密かに付き合ってる？」

「…ううん」

そう言つと姉さんはその意味を理解したようでも黙りこんだ。

「そっか…。ごめんね、無神経なこと訊いて」

「もう。姉さんが謝るなんて珍しいね」

「でも大丈夫。いつか必ず家の男になるわ」

「その自信、どこからくるんだか…」

私は呆れて溜息を吐いた。

姉さんが元気になってよかったと思う反面、もう少しあの女々し

い姉さんを見ていたかった気分だった。

第三十四話

外の空気もかなり冷えてきた。

生徒会の仕事は特になく、俺は平凡に過ごしていた。

さぼっていただけなのはこの際無視。

忘れていたが、もうそろそろ修学旅行がある。

俺は他の人に比べてそれに興味を持てずにいた。

今はそれよりも前にあるテストの話の方が個人的に重要。

大まかな行き先は決まっているが、未だにコースは決まってない。

HRにその話があったから、朝から皆はその話をしていた。

もちろんそれは俺の方も例外ではなかった。

「てっきり忘れてた。って感じだよね、雫は」

「良くわかってるな、唯」

「って…やっぱり忘れてたんだ」

覚えているのは大分前のことくらい。

二年になつて少し経ったときに旅行の行き先アンケートがあった。

そこで俺はどこでもいいというような内容を書いた気がする。

「皐月。お前は楽しみか？」

「わからない」

「そうか」

まだ先の話だし、それでもいい。

今日も皐月はぬいぐるみを抱いているが、身近にいる俺達にはち

よっとした変化がわかるようになった。

実はこのぬいぐるみ、毎日違う物なんだ。

どこかしら些細な違いがあり、本人に訊くと毎日入れ替えている

と答えられた。

今日のこれも昨日とは違う物だと俺達は知っている。

潰れているクマの顔は時々気味悪いけど。

「そういえば班はどうするんだろ？ほら、うちのクラスは話遅いし」

唯がそんなことを言った。

「班？そういえば決めてなかったな…」

「雫と一緒にいい…」

皐月が俺の方を見て言った。

俺は頷く。

「そうだな。仲間がいれば居心地悪くなくていい」

俺はあまり話せる人がいない。

そういう人と当たってしまえば空気が悪くなるだろう。

そういう意味でも、この二人と当たってもらいたいと願う。

翔は他クラスだから一緒に班になることはないだろう。

そう考えていると予鈴が鳴り、それと同時に武さんが入ってくる。

いつも数学の授業はピッタリの時間に始まる。

武さんの真面目さが伝わってくる。

「それでは日直さん。号令を」

武さんの合図で日直は号令をかけ、授業が開始された。

授業が終わると同級生達は一気に仲間内で集まって会話を始めた。

俺は隣にいる皐月を見る。

予習だろうか。ノートに問題集の答えを書いていた。

唯の方を見た。同じく勉強中だ。

教室を見渡すと一部の人は勉強をしている。

「そういえば再来週はテストか…」

テストが迫っているのを忘れていた。

前に玲とテストの話しをしていたのを思い出す。

中学の方は終わったと思う。

「あー疲れたっ」

俺の肩をぼんと叩きながら翔が言った。

「…わざわざそれを言う為に来たのか？」

「まさか。ちと暇だからな。来てみた」

「帰れ」

「つれないこと言うなよ。どうせまた昼休みに会うんだし」

「だったら今会わなくてもいいだろ」

「別にいいじゃん、いいじゃん」

短い休み時間なんだ。

ゆっくりしたかった。

でも別に翔が嫌いなわけでもないし、話くらい聞いてやることにした。

「それで。本当は何の用だ？」

「いやさ、また宿題やってないんだ」

「俺にやれってことか？」

「後で奢るから！また後の休みにくれればいいから！」

「…暇だから。いいけどさ」

「ありがとっ」

用が済むと翔は戻っていった。

いつの間にか机には宿題らしきプリントが乗っていた。

俺は残り少ない時間の間に書き終わることに成功した。

多分これは翔のために全くなってるないだろう。

そして昼休み。

俺たちはいつものようにこのクラスで弁当やら買ってきたパンやらを食っていた。

頃合を見て翔にプリントを渡す。

「ほら。合ってるか自信ないけど…」

「お、サンキューな。雫が書いたんだし、心配ないな」

「またあんた雫にやらせたの？」

「いいじゃねーか。友達なんだからさ」

「友達だからって何でも頼み込むのもどうかと思うわよ？」

「ならたまには唯に頼めってか？嫌だね。後で俺が恥をかく」

「どーゆー意味かしら？」

翔と唯がそんな風に会話をしている。

俺と玲はそんな中で黙々と昼食を食べていた。

俺達のあとに二人も食べ終わり、更に雑談と化する。

主に再来週のテストについてだ。

「テストかあ。本番はともかく、それまでの自主勉強が大変なのよね」

「あー分かるような気がする」

唯の言葉に翔が受け答える。

「ところで紺野さんって前の学校ではどんな感じの成績だったの？」

唯が玲に質問。

玲は突然のことに少々戸惑いつつも、ぬいぐるみで顔を隠して返事をする。

「真ん中…くらい」

「なら俺と唯とそんなに変わらないか…のか？」

翔が疑問形で言う。

「となると、やっぱりこのメンバーの一番は雫なわけね」

「雫…頭良い？」

「知らないのか紺野さん？こいつ、結構な頭の持ち主だぞ」

「そうなんだ」

「褒めすぎだな」

「姉さんに次いで、成績優秀なのは間違いないわね」

「そりゃ冬子さんは少し多く人生歩んでるし、勝ち目はない。」

「じゃあ…私、雫と勉強しようかな」

「俺と？…教えるのは苦手なんだけどな」

「なら俺も入れてくれ！相変わらず数学が…ピンチだ」

「あ、じゃあ私も」

「なんでそうなる…」

こうして何故かこの三人は俺の家に来ることになった。

放課後。

翔は部活を休み、唯は用件を素早く済ませて玄関に集まった。

「雫の家にお邪魔するの、随分久しぶりね」

「最後に行ったのは中学卒業辺りだったよな？」

「そうだったな…」

あの時は確か冬子さんは来なかった。

そもそもそんなに会う機会がないから、ここ最近の遭遇率は珍しい程高いと思う。

「あ、そういや雫。玲ちゃんに言わなくてよかったのか？」

「玲は部活だから心配はない」

「そうか。…ってことは、今日もお迎えはなしってことだな？」

「ああ。お前のせいで」

「わりいわりい。今度宿題の件も含めてお礼するって」

会話が弾み、結構盛り上がった。

楽しい時間はあっという間。

すぐに俺の家に着いた感覚だった。

「お邪魔します」

口々にそう言い中へ入る一同。

俺は取り合えず自分の部屋に案内した。

この人数が入るには狭いと思ったが、なんとか入りきれた。

「雫の部屋自体が凄く久しぶりね」

唯が俺に声をかける。

俺は無言で頷く。

「俺も同じく。まあ、家自体に入らなかつたんだしそりゃそうだけどな。にしても、あんまり見栄え変わらないな」

「構うのは玲だから俺は何もしないんだ」

「まだ妹に管理任せてるのかよ…」

「道理でちよつとお洒落なわけね」

呆れ果てた翔だったが、すぐに教科書を出す。

「で、早速だけどここ教えてくれ」

切り替えが早い奴だと誰もが思っただろう。
このあときちんと勉強会が始まった。

第三十五話

翔たちは雫と分かれたすぐ後、玲と遭遇した。

「あ。翔さん、唯さん。来てたんだ？」

「お、久しぶりだな。野暮用でちよつと」

「何が野暮用よ」

三人は少し会話をする。

「あ、そうだ。玲ちゃんにも紹介するね。この人は…あれ？」

唯が臯月を紹介しようと振り返った。

だが既に臯月は居なかった。

「どうしたの？」

「あ、うん。何でもないわ。またね」

「はい」

翔と唯はすぐ隣にある自宅へ帰る。

そして玲も帰って行く。

そんな中、先に帰っていたと思われていた臯月は物陰からこっそり見ていた。

単純に恥ずかしくて隠れていたのだ。

ただ距離を取りすぎた為に帰ったと唯たちに思われていたが。

「あらあら。やっぱりここに居たのね」

「お姉ちゃん…」

背後から声をかけたのは紺野 綾だった。

「帰りが遅いから心配したのよ？」

「ごめんなさい」

「私も不注意だったわね。星川くんの家に居たのね？」

「うん」

それを確認すると綾は一人納得したように頷く。

臯月は次の言葉を待つ。

「帰りましょうか」

「うん」

二人は仲良く並んで帰宅した。

「お邪魔しました」

皆は帰った。

残された俺はまだ帰っていない玲を迎えに行こうかと思っていた。だがその前に玲が帰ってきた。

「ただいま。ついさっき唯さんたちと会ったけど、家に来てたんだね」

「ああ。勉強をな」

「へへ。皆偉いね」

その後、何気ない日常会話を繰り広げた。

その頃、紺野家では剛と武が電話で会話をしていた。

「娘達はまだ帰ってこないな。心配だ」

「生徒会の仕事もあるだろうし、それ関係だと思っけどね」

「それもそうか。ところで武！今週の休日は空いてるか？」

「予定はないかな。午後は空いてるし」

「丁度いい！休日に皆と遊ぶんだ」

「皆？ああ、綾ちゃんと臯月のことか」

親子のスキンシップみたいなことだ。

兄はそういうのを心がけている。

「ちなみに保護者はお前一人だ」

「あれ。行かないんだね」

「まあな。よろしくな？」

「わかった。…そうだ。隼くんも呼ぼうか？」

「もちろんだ！」

兄のお気に入りの少年だからこうなるのは予測できていた。

あとはその本人次第。

無理に呼ぼうとは思わない。

でも綾ちゃんと皐月とは比較的仲が良いらしいから、同年代の話し相手としては居てもらいたい。

「今週の日曜日にする？」

「細かな予定はお前が決めていいぞ。帰ってきたら綾たちに教えておこう！」

自分は行かないのに張り切っている兄。

相変わらず飽きない人だ。

「それにしても本当に栗くんのことを気に入ってるね」

「ふむ。彼は自分の友人によく似ているところがあって実に懐かしい気分させてくれる。あの性格もどことなく似ている」

「兄さんの友人って…。多すぎて判らないな」

「そういうお前もな。最初はその友人の子だと思っていたんだがな」
「…。とにかく綾の婿候補が居てくれるだけで幸せだ！」

「あ、最終的にそこなんだね」

そして日曜日。

俺は武さんに誘われ出かけることになった。

最初は断ったが、綾先輩たちの話し相手にもなってほしいと言われ承諾した。

玲は葉月ちゃんと会う約束をしていた為に留守で、暇だった俺には丁度よかったのかもしれない。

翔たちも誘ってみたが、翔は部活。そして唯も冬子さんと出かけるとのことで無理だった。

「こんにちは、栗くん」

「どうも」

合流場所は紺野家前だった。

あの元気な剛さんはどうやらいないらしい。

「ああ、兄は仕事だよ」

俺の心を読み取ったかのように武さんは言った。少し遅れて綾先輩と皐月が出て来る。

綾先輩とはここ最近あまり会っていなかった。

生徒会関係の仕事も特にないし、学年も違う。

会う機会などほとんどないのは仕方がない。

どこか虚しく感じる気がしていたが、顔を見るとそれがなくなっ

た。
「お久しぶりね星川くん。本当に来たのね？」

「武さんからの誘いだから無下に断れなかっただけです」

「いや〜最初は即否定していたような気がするけどね」

苦笑いする武さん。

綾先輩は先に車へ乗ってしまった。

皐月はおろおろしていたが、綾先輩の後に続いた。

すぐに車内で会話を始めた。

「やっぱり仲がいいね。あの二人は」

武さんは嬉しそうに呟いた。

俺は助手席へ乗る。

もちろん運転手は武さんで、残りの二人は後部座席に座っている。

俺は武さんへ質問をすることにした。

「ところで、行き先のことはいないなかつたんですけど」

「そうだったね。済まない〜えつと〜どうしようか？」

「決めていないんですか〜？」

「本来は兄が僕の役目をするはずだったからね」

強引に武さんに押し付けたのだろうか。

娘の綾先輩にあれだけ執着してるんだからそれは考えにくかった。

「…お父さん」

「なんだい、皐月？」

「私たちはどこでもいい」

「そうか…困ったなあ」

後ろの皐月の意見に苦笑いをする武さん。
優柔不断な面もあるのだろう。

実際、人の良さそうな人だがまんまその通りらしい。

「栗くんはどうか？何処か行きたい所は」

「俺？…いや、特に。任せます」

「うーん仕方ないな。僕が決めちゃうけど、いいね？」

俺達は口々に賛同の意見を言う。

武さんは行き先を決めたようで、困った表情が消えた。

車内では綾先輩と皐月が主に会話をしていて、俺達男二人は無口だった。

「さて。到着」

武さんは車を止めるとそう言った。

行き着いた場所は大きな建物の前。

会社だと思う。

「ここは？」

「は。ここはね、兄の会社だよ」

「パパの？」

「そうだよ綾ちゃん。やっぱり僕じゃあれだから、交代しようかなって」

「それはいいとして仕事じゃないのか？剛さんって」

「兄は社内にいるだろうけど何もしてないよ。そもそも今日は兄は休暇を取っているからね」

それでなぜ会社にいる…。

「って、じゃあどうして一緒に来なかったんだ…？」

「あとでサプライズするつもりだったんだよ。そういう人だから、兄は」

確かにそういう人だ。

それにしても本当に自由な人だと思う。

「それじゃあ呼んでくるよ」

武さんは車を出て、社内に入って行った。
五分もすると社内から武さんが戻ってきた。
そして愉快そうな剛さんが見える。

二人は車内に入る。

運転席は剛さん。

そして武さんは後ろへ。

「やあやあ零くん！久しぶりだね！」

「は、はあ」

「いや〜本当はもう少し後で合流しようとしたんだが。まあ、いつか」

どこまでもマイペースな人だと思う。

「それでそれで。どこへ行きたいのかな、皆は」

「それを決められなかつたってさっきもいつたらう、兄さん？」

「おっと。忘れていたぞ。じゃあ我が家へ戻ろう！」

「え、なんでなのパパ？」

「いや。折角零くんが来たんだし、綾とのお見合いっぽいものをするよいかと思った」

「ちよつとパパ！」

綾先輩は父親を叱った。

それにしても『っぽい』とはどういう意味だったんだか。

俺達は本当に紺野宅へ戻っていった。

そして家の中。

武さんは邪魔になるからと出かけてしまった。

できればいて欲しかった。

和室へ案内された俺は座らされる。

綾先輩と対面する形となった。

そしてそんな綾先輩の横に剛さん。

俺の横には皐月が座る。

「うむ。お見合いっぽいな！」

「まだ言ってたんですね…それ」

この場合皐月は何の役なのだろうか。
剛さんと合わせて親？

「パパ。変なこと言わないで」

「変なこと？大真面目だぞ」

「尚悪いわよ！」

親子喧嘩が始まった。

まあ剛さんは笑っているが。

俺と皐月は綾先輩が言い終えるまで黙って待っていた。

「さてと。雫くん、綾はどうか？」

「どうって……」

「学校での話した」

「…学年も違いますし、わかりませんね」

「だそうだ綾？」

「なんなの、この質問？」

綾先輩と同意。

突然過ぎて意味がわからない。

「ふむ。実はだな」

俺達は急に態度が変わった剛さんの言葉を真面目に待つ。

「やっぱりなんでもない」

「ちよ、パパつたら！」

豪快に笑いながら剛さんは綾先輩とじゃれていた。

「皐月、寝てるし」

俺はさつきから黙っている皐月を見た。

その皐月は寝ているだけだった。

「また来なさい雫くん。今度は本格的に結婚式の話をしようじゃないか」

「お断りします」

きっぱりと言い放つ。

だがそんなものはこの人に効くわけもなく、笑い飛ばされた。
「ハッハッハッ。恥ずかしがらなくてもいいんだぞ」

俺と綾先輩は揃って溜息を吐いた。

ちなみに皐月は部屋で寝ているとのこと。

「頻繁に来られるのは困るけど、また来てもいいわよ星川くん」

「どちらにしても、剛さんに呼び出されるだろうけど…」

「そうだったわね」

俺と綾先輩はほんの一瞬だけ笑みを交わした。

ほんの一瞬。

久しぶりにそれでお互いの意思の疎通が出来たように思えた。

第三十六話

ふとこんなことを思い浮かべた。

なぜ俺は綾先輩と同じあの高校を選んだのか。

正直よくわからなかった。

中学の卒業式当日のあの日。

俺は先輩と同じ高校へ行くと言った。

あれは勢い余って言ったような言葉だった。

先輩は驚いた顔をしていたが、すぐにいつもの表情に戻っていた。

そしてその後、俺は『綾先輩』と呼ぶことを許された。

その時は嬉しかったのか動揺していたのかも分からない。

俺もいつもと変わらない佇まいで了承した。

ただ今思い出して思ったことは。

慕っていたんだということ。

テスト前日。

その日の学校、とは言え三年生は別の日に行くが俺達一、二年は
慌しい。

別にこの世の終わりではないが、やはり自分の将来にも関わる数
値だ。

理由はどうあれこの生徒はやる気に満ちている。

それは俺の周りにいる唯と翔も同じで、臯月もそれとなく頑張っ
ている。

俺はというと、いつものようにやるつもりでいる。

そして放課後。

「今日は俺達のクラス、明日のための自習だったぞ」

「あ、やっぱりそうなんだ。私たちもよ、翔」

校門付近で俺達は合流していた。

いつも通り俺と皐月は二人の話に耳を傾ける。

「この後どうする？また雫に教わるのか？」

翔は俺に問いかける。

実はこの一週間ほど俺の家に集まって勉強をしていた。

もちろんテスト対策でだ。

家には親も時間的に居ないし、玲も部活で迷惑をかける相手がないからよかった。

まるでそれが習慣のように俺達は集って教えあっていた。

「そうだな、今日は」

少し考えて翔へ言った。

「今日は個別に勉強した方がいいんじゃないか？」

俺は翔の意見にそう返した。

「そうか。そんじゃ今日は解散だな。まっ、俺と唯は雫と別れても

途中まで一緒だけど」

「迷惑なことだね」

「お互い様だっつーの」

俺達はそれぞれ自宅へ帰宅した。

俺は自分の部屋へ入り、明日の教科の勉強をすることにした。

取り敢えず机の上に問題集などを出す。

それから二時間ほど勉強をした。

ここで回答を間違えた気づき、消しゴムを取ろうとする。

「…？」

そこで気がついた。

筆箱を教室に忘れたことを。

この時間は机の引き出しにあったペンを使っていてそこまで頭が

回らなかった。

机の中に消しゴムもあるかと探したが、見つかることは無かった。わざわざ学校へ戻るか。でもそれは効率が悪いと思う。

それともこのまま勉強を続けるか、もしくははやめて休憩にするか。

「仕方ない……」

面倒だとわかっている。

でも俺は学校へ戻ることにした。

部活帰りの生徒と度々すれ違った。

そういえば、玲と葉月ちゃんはもう帰っているだろうか。

「あつた」

教室には誰もいなかった。

居残りで自習をしている人物はどうやらこの階にはいないらしい。図書室なら誰がいるのかもしれない。

俺はついでに図書室へ寄ってみた。

「……………」

中に入るといつもより多い人数が中にいたことが分かる。

普段はあまり利用されないからちよつと珍しく感じる。

立ちっ放しも恥ずかしいから適当な場所に座ろうと辺りを見る。

混んではいるが、そこまででもないから席は空いている。

ただ見知らぬ人間の隣はやはり躊躇してしまう。

帰ろうかと思つた矢先、肩に手を置かれた。

「あなたも勉強かしら、星川くん」

「綾先輩？」

それは綾先輩だった。

そういえば綾先輩たち上級生はもう部活とかないんだっけ。

そもそも綾先輩は部活に入部してないらしいが。

「なんで綾先輩がここに？テスト勉強は随分前からやってたんじゃ」

「だからって勉強しない理由にはならないでしょう？」

「……ごもつとも」

「それにしても意外といえるのね。…星川くん、生徒会室に行きまし

よるか」

「いいんですか？」

「ええ。今は誰もいないから」

別にこのまま帰ってもよかったが、お言葉に甘えて立ち寄りさせてもらうことにする。

途中、教務室まで寄って先輩は鍵を取りに行く。

俺は先に生徒会室前に着く。

そんな距離は離れていないが。

「御待たせ」

綾先輩は鍵穴に鍵を差し込む。

そして俺達は中へ入った。

「それにしても星川くんが図書室にいるとは意外だったわ」

「……ところで、綾先輩は何の用で向こうに？」

「予想通り勉強よ。でも人数も多そうだからここにしたわ」

「家でやればいいんじゃないですか？」

「それもそうね。まあでもいいじゃない細かいことは」

俺達は適当に座り勉強を開始した。

「……………」

「……………」

お互い黙々とペンを走らせる。

一見堅苦しい空間だが、俺はこれが好きだ。

騒がしかったりするよりはよっぽどまとまな空間だと思う。

勉強しながらそんなことを頭に浮かばせていた。

「星川くん？どうかしたの？」

「あ……。いや、何でもないです」

つい綾先輩に視線が往っていた。

急に恥ずかしくなる。

「そう。もしかして解らない問題でもあった？」

「そうじゃないです。すみません、今日は帰ります」

「確かにもう遅い時間帯ね。それじゃあ一緒に帰りましょう。鍵を

戻すから校門で待つてて」

「はい」

そのまま俺は綾先輩の言われるがまま校門で待つことになった。

「それじゃあ帰りましようか、星川くん」

「…そうですね」

なぜわざわざ一緒に帰る必要があるのだろうか。

そもそもなんで断れなかったんだろう。

どこか自分はこの人に服従しているような気がしてならない。

「ところで皐月とは上手くやれてるの？」

「まあ、翔たちも含めて仲良くしてますけど…」

「けど？」

「他の同級生とはあまり」

仲が悪いわけじゃないが、皐月は他のクラスの人とはあまり関わろうとしない。

元々人見知りみたいだから無理はさせるつもりはない。

「ところで…星川くん。あなたは皐月と付き合い気はないの？」

「なっ、なにを急に言ってますか!？」

「いえ。だって皐月もあれだけあなたに懐いているし、あなたも満足じゃないようでしたから」

「……………」

確かに会った時から気にはなってる。

好きなんだと思うし、その気持ちに嘘はない。

ただそれが恋なのかは別とする。

そういえば如月先輩に相談して以来か、皐月のことで悩むのは。

今のような友人関係でいいと思っっている自分がいる。

今持っているこの感情が恋愛か親愛のようなものと訊かれたら答えられないだろう。

「付き合いなら私にも相談して。いろいろ協力するから」

「別に付き合いあって決めたわけじゃ…」

「星川くん。これ以上、あの子を迷わせないであげて」

「え？」

綾先輩が真剣な目で俺を見据える。

初めてこの人と会った時の見た瞳に似ていて少しデジャブを感じた。

「あの子は星川くんのことが好きなのよ？もちろん恋愛感情。いつも側にいるあなたが気がつかなかった訳じゃないわよね？」

「知ってましたよ…それは。だけど気持ちの整理が出来てないんだ。本当に俺が臯月をそういう気持ちで見てるのか。自信がないんです」「好きなんじゃないの…？」

「それはまあ。でも、どういう意味の好きかは正直…」

綾先輩はどういう心境で俺を見ていたんだろうか。たぶんがっかりしてるんじゃないだろうか。自分でも情けないと思う。

こつやつと追求されればされるほど、臯月への感情がわからない。好きとしかいいようがない。

「そうか」

なんか今わかった気がする。

この好きは玲に向けたような好きと同じであると。つまり、恋愛じゃない。

好きな相手には違わないが、今はただの友達としか思ってた。なかった。

そう思ったら何だか申し訳なく思ってきた。

「星川くん…？」

綾先輩が黙っている俺を心配そうに見る。

俺はそれに気がつき目を逸らした。

「すみません…先に帰ります」

「あ、ちよつと！」

俺は先輩を置いて先に帰った。

第三十七話

翌日、俺は学校には行かなかった。

これは単純に風邪だった。

その日のテストは後日行うとのことになり、それ以降のテストはやり遂げた。

そして更に数日後。

「雫。今日って先週休んでたテストだよな？」

「ああ」

唯が俺に告げ俺はそれに生返事する。

思えば今日はろくに誰とも会話をしていない。

なんだか昔に戻ったような錯覚が起きる。

きっと、唯と翔もそう感じたと思う。

そんな心配そうな顔だった。

「…行かないの？」

今度は皐月が俺に訊く。

時間も時間だし、いい加減向かおう。

「今から行く」

俺は担任の許へ向かった。

「おつ着たな。早速だが3教科やってないものがあるから、終わり次第持ってくるように。場所は…そうだな、会議室にきなさい」

「わかりました」

会議室へと向かう。

てつきり監視役の教師がいるかと思っただが誰も居ない。

俺がカンニングをしないと信頼しているのか、それとも面倒だからか。

取り敢えずさっさと終わらすことに専念した。

「お、やってるなー」

「いえ、終わりました」

「なんだもうか？お前のことだしカンニングしてないな」

「言うまでもなく」

「うんうん。だろうな。それじゃあ解散していいぞ。また明日な」

俺は帰宅する為に玄関へ向かう。

丁度生徒会室を通る。

俺は何気なく中を盗み見た。

中には数人の役員がいる。

もちろん、如月先輩と綾先輩も。

二人は意外と合うらしく話し込んでいた。

もちろん二人が付き合っているということはないし、如月先輩には他に好きな人がいるということとはわかってる。

それでもその光景が気に食わず、俺はイライラしたまま帰宅した。

「ただいま」

「おかえりなさい兄さん。あれ？疲れてるの？」

「ん、ああ。ちょっと寝る」

「うん、わかったよ」

更に翌日。

この日は数教科テストが返却された。

俺達いつものメンバーは平均値よりも上で好調だった。

「やっぱり雫と勉強するといつもよりいいわね」

「だよな」

唯と翔が昼休みの昼食時にそんな意見を交わしていた。

「お前らが頑張ったからだろ？」

「素直に感謝の気持ちをもらっとけて」

翔が俺の肩を叩く。

少し痛かった。

「雫」

「ん、なんだ皐月？」

「放課後…生徒会室につて、お姉ちゃんが」

「綾先輩が？…わかった」

そして放課後。

掃除当番でもない俺はすぐに教室を出る。

生徒会室へ向かう気はなかった。

つまり逃げようとしていたんだ。

「あ」

「…げ」

そこで井上さんと鉢合わせた。

彼女は俺を見るなり言った。

「紺野先輩が呼んでますよ？」

「…わかった」

おそらく俺の行動を読んで井上さんを寄こしたんだろう。。

「お気をつけて」

井上さんの声が背後から聞こえたのだった。

「失礼します」

「どうぞ星川くん」

やはりそこには先輩しかいなかった。

昨日の光景が嘘のようだ。

そういえば俺が来るときに限って他の生徒会の人間がいない。

これは偶然だろうか。

「何ですか」

「その前に座ったら？」

「いいです」

「そう」

綾先輩は少し間を置いて話す。

「用件は皐月のことなんだけど、あの子にきちんと行ってほしいの」

「皐月に…」

「ええ、そうです。あなたの気持ちを伝えてあげて言うことは決まっています。」

ただ本人の前で言う勇氣がない。

「本人の前で言うのは恥ずかしい？」

「はい」

「なら私にいいなさい。それを伝えてあげるから」

「え？それって」

「いいから。さすがにあの子も無理強いはしないと思うから
皐月の前で言うのも抵抗があった。」

でも綾先輩の前で言うのには更なる抵抗がある。

だがこれはこれで都合がいい。

「分かりました。俺は皐月のことは好きです。でもそれは友人としてです」

「ありがとう。きちんと伝えておくわ」

綾先輩は俺に帰れと言うように見つめる。

それに従い俺は部屋から出て行った。

帰り道、俺は玲の迎えに行こうかと思いついた。

返事はなかった。

たぶん部活で忙しいのかもしれない。

もう一度、やはり止めておくと送った。

帰ってもやることがないから、あの小さな公園のベンチに座るところにした。

来てみると今日は小さな子供もいなかった。

ベンチに一人座り、じっとブランコを眺める。

そういえば、初めてここに来てから何度も幼い頃の冬子さんたちを眺めてたな。

あのブランコに乗っていた冬子さん、唯、翔。

俺と玲は二人で遊んでいたけれど、玲はやっぱり他の子とも遊べなかったと思う。

でも俺は他人に興味がなかったから、その気持ちが分かっている

も答えてあげられず。

結局、冬子さんには結果的に助けられたんだよなー…。
ふと回想。

「……………ろくな日じゃなかったな」

かなり曖昧な記憶だったが。

でも新鮮な日だった。

まあ玲は玲で楽しそうだったからいいか。

ただなぜ俺だけが苦しかったのかは謎。

玲は普通に遊んでいたのに…。

「冬子さんと最初に遊んだのが原因だな」

順序が違ったら玲が俺の立場だったのだろうか。

何だか被害者が俺でよかった気がしてきた。

今までブランコになんか近寄ってもいなかったが、今日は座ってみた。

「狭いもんだな…」

座るのも難しく、もうひとつ大きめの方にした。

「いい歳した男がブランコか。おもしろいもん見れたな」

「!!!」

いつの間にか近くにはポテチを食べながら成人男性が立っていた。

まだ若い男は俺を無表情に近い顔つきで見ている。

俺はブランコから離れる。

「なんだ。別にオレのことは気にしないでいいぞっと」

そういつとその男がブランコに座った。

「ほら、オレン方が年上なのに座ってるだろ？こんで恥ずかしくない」

ポテチを摘まみながら言う。

「んあ？無言だなー。あつ、オレは不審者じゃないぜー。っと、サングラス忘れてたぜ」

サングラスにより余計に不審者すぎる。

「んでよー。オレっちさ、暇なわけさ。話し相手、オーケー？」

「いや…悪いけどそろそろ帰る」

「まあまあ、落ち着けて。五分でいいからよ五分？」

「長すぎる…。」

「んじゃさーベンチ行くか」

流れに乗って俺はその男とベンチに座ることになった。

終始ポテリは食べていること男。

これは逃げるべきだろうが、意外と隙がない。

「それで、話というのは？」

「あゝ、簡単なことさ」

ポテチの袋を畳む。

俺の方を見るとその無表情な顔をしてこっちを向いた。

見知らぬ男は俺の肩を強く掴んだ。

表情こそ無だが、眼だけは意志が窺えた。

「決して間違いだけは起こすな」

「え？」

「む、警報か。じゃあな少年。お前みたいな若いの見たら言いたくなっただけだから、忘れてもよし」

何気にポーズを決める男。

そして男は一礼すると立ち去って行った。

「何だっただ…」

なんだか変わった不審者だった。

ただどこかで見ただことあるような。

あんな知り合いはいないんだが。

「…まるで剛さんみたいな関わりにくい人だったな」

結局、目的が明確ではない人だった。

「あ、雫先輩。どうしたんですか、こんな所で？」

「葉月ちゃんか。部活は？」

「サボりです。玲ちゃんは学校です。それで一人ポツンとどうしたんですか？」

「何だか、変な人に会った」

「不審者…？」

「多分」

葉月ちゃんは興味を示したようで特徴を訊いてきた。

とりあえず説明。

「あの、雫先輩」

「ん？」

「たぶん今朝ニュースでやってた窃盗犯かなと。大量のポテトチップスを盗んだとか何とか」

「……………」

「無事で良かったですね」

ああ、見たような気がしたのはそれか。

「つて、そんな変人だったのか?!」

「ちよ、驚かせないでくださいよ。それにしても雫先輩って大声出せたんですね。これはレア…めもめも」

今日は色々と焦った日だった。

第三十八話

とりあえず葉月ちゃんとそのまま公園のベンチに座って雑談。

「ところで雫先輩たちってそろそろ修学旅行じゃないですっけ？」

「…ああ、そういえばそうだったな」

「興味なさそうですねー」

「あんまない」

「キツパリと言い切りましたね…。ちなみに行き先ってどこですっけ？」

「……………」

「……………」

「そういえば修学旅行があると記憶はしていたけど、行き先は聞いていなかったな。

去年、つまり綾先輩たちの時はどこか海外だったのは覚えている。

「… 国名覚えてないな。」

「重症ですね、色々」

「興味ないからな」

「それで済ませ様とするのもどうかと。まあこの話はまたいずれにしましょう」

「だな。…よし、最近学校はどうだ？」

「また無理矢理話しを逸らしましたね」

「旅行の話は終わったんだからいいだろう」

「それもそうですけどね。しかしよくある内容の話題ですね。ちなみの玲ちゃんと共に仲良く過ごしていますよー」

「ならよし」

「はい」

「…話題って面倒だな。」

もう思いつかない。

翔みたいな単純なやつになれば思いつくのだろうか。

相手は葉月ちゃんだしそんなに気を使う必要もないが、あまり異性と交流する機会もないしな。

唯とかは除く。

「では雫先輩。こちらから」

「ん」

「最近はいいい表情してますよね」

「…は？」

「いえ、数年前よりは表情が緩いかなって。遭ったばかりの頃は目つきが悪いただけでなく、無表情過ぎましたから」

「自覚は…していたけどさ。でも最近と比較するような変化はあるか？」

「ありますよ。やはり紺野先輩の影響かもしれないですよ」

「綾先輩か…。あの人とは何気に付き合いあるからな」

「ええ。玲ちゃんよりも短い付き合いでよく同等になれたものですよー」

「どつという意味だ？」

「いえいえ、お気になさらず」

気にしないことに決めた。

…なんだか考えるのも面倒になってきた。

「ところでもういい時間ですけど、帰ります？」

「そうだな。送ろうか？」

「それは雫先輩に迷惑がかかりますよ。遠回りになりますから。それじゃあまた、玲ちゃんと遊びに来てくださいいねー」

「機会があつたらな」

帰宅。

変な不審者に遭ったりして今日は変化のある日になった。
玲の顔を見て落ち着こう…。

「ただいま……げ」

玄関へ入り靴を脱ごうとした時。

並んでいた靴がひとつ多いことに気がつく。

親でもないし、玲のものは別にある。

そしてこの見覚えのある靴…。

「あ、おかえりなさい兄さん。お客さんだよ」

「やあやあ栗くん！お邪魔しているよ！」

「やっぱり……」

疲れた日にはあまり会いたくない剛さんだった…。

第三十九話

「今日はどうしたんですか剛さん？」

「ん？いやまあ…それにしてもこの茶菓子は美味しいな〜！」

「ありがとうございます。急だったものでこれくらいしかありませんでしたけど…」

「いやいや。気を使わせて悪かったな〜」

「話そらさないでくれませんか…」

この人は今日もいつもと同じく、こんな人だった。

「それじゃあ私はここで。兄さん、またね」

「ん、勉強か。がんばれよ」

玲が退いた後、剛さんは満足そうな表情で言った。

「うちに息子がいたら、嫁いできて欲しいものだ！」

「おことわりします」

「例えばの話さ。そう本気の見ないでもらいたいな〜」

「…それで、いつ帰ります？」

「お泊りするかな」

「却下で」

「即答だな〜はっはっは！」

さすがは何事にも動じない人だ…。

密かに不動の剛とでも呼んでやろうか…。

「まあ雫くんの顔を拝みに来ただけさ。そつだそつだ。また家に遊びにきてくれたまえ！」

「はあ、まあ…それは別に」

「ほう。数年前、いやちよっと前まではこれすらも断られたものだが。雫くんも変わったな〜」

「どつという目で見ていたのかよくわかりましたよ」

「冗談だ！自分は罵倒していいから、綾だけは嫌わなくてくれ！」
「いや、この会話でなぜそんな台詞が出るのか不思議すぎる…」

三十分後。

「この頃の綾は今よりも女々しくてなー」

「……………」

「時々妻に似たものを感じたこともあって怖かったが、可愛い者だろっ！」

「……………」

なぜか昔のアルバムを取り出し、昔話を語り始めた。

流石は親馬鹿…綾先輩の話ばかりだ。

「昔は今と髪型が違うが、どうかな零くん」

「…まあいいんじゃない」

「いやいや、ちゃんと見なさい」

チラリと視線を向けた。

確かにどう見ても綾先輩の写真だし、髪型も今とは少々違う。

「…ん？」

どこかで見たような見たことないような容姿だなと思う。
しかしいつだろう。

「それでこれが私の妻だが、なかなかの別嬪だろう」
胸を張っている。

とりあえずそちらの写真も覗いてみた。

「…なぜだろ、胸焼けみたいなのモヤモヤが…」

頭の中ではあまり思い出したくないと言っているような気がする。

なにを思い出したくないんだか…。

自分のことながら分からない。

「　　うーむ…、やはり忘れていたか」

「　　剛さん？」

「　　よしつ。今日は家に来るといい！…もっと話をしようじゃないか」

「　　は、はい？」

「　　では往…」

　　俺は拉致された。

　　とりあえず玲にはメールしておいたが。

第四十話

さて。

俺は車の助手席でさっきから語り続ける剛さんを見た。本当に娘のことになると嬉しそうな顔をする。

「さてそろそろ着くな。そういえば着替えを忘れたな」

「着替え？夜中に返してくれば別に」

「いや、泊まってもらおうかと」

「……………」

断ることなど出来ないだろう。

「ただいまー！！」

「邪魔します」

しかし綾先輩たちからの返事などなかった。

「あー。そういえば家政婦と一緒に外食すると言っていたのを忘れていた！」

「ところでなぜ貴方は一緒にいかなかったんですかね？」

「…綾に付いてくるなと言われた」

「…そうですか」

先輩も反抗期ということか？

いや、たぶん剛さんが綾先輩の台詞を勝手に脳内変換でもしたんだろう。

「ご飯にするかい、雫くん」

「いえ、今はいいです」

「そうか。なら風呂にするといい。寝床を用意しておくから時間的にもいつもの睡眠時間が近い。」

お言葉に甘えることにした。

風呂場は広がった。

普通の家じゃなかった。

これが感想。

「あとは…いい湯つてとこかな」

久しぶりにゆったりとした時間を過ごしている。

しかし何か不安が残る。

いくらなんでもこの家に厄介になり過ぎているような気がして落ちつかない。

いい歳だし甘えるべきではないと思うが、それは考えすぎなのかもしれない。

だが綾先輩にとっては俺がここに滞在することが迷惑なのではないかと思う。

もちろん、今この家に居候している皐月にも。

「…やっぱり考えすぎか」

「大人になろうと背伸びしているだけだ。誰にでもあるある」

「はあ…。…しかし気配を感じさせない人ですよね、たまに」

「そうか？自分はそんなつもりはないがな」

「意識していたら性質が悪い。それで、どうして背伸びしてると思いました？」

「無駄に悩んでいる顔をしていたからだ」

表情に出していたらしい。

気が緩むとそういうところが表情に出ると、玲にも指摘されている。

「まあほとんど無表情だから、ある意味それはそれで良い！」

「そろそろ上がります」

「まあ男同士、仲良く談笑していようじゃないか」

「結構です」

「そうか？そうそう、寝床だが綾か皐月ちゃんの部屋。どちらかにしておいてくれ」

「…正気ですか？」

「正気だ。できれば綾にしてもらいたいが、昔なじみの臯月ちゃんが可哀想だしなー……」

「他に部屋は沢山ありますよね？」

「まずほとんど掃除が行き届いていない。家政婦の人にもしないように言っているからな！」

「いや……なら帰りますが」

そういつと剛さんは俺の肩に手を置いて言った。

「やだ」

「子供ですか……」

「まあ自分の部屋でもいいが、小汚いぞ？色々書類とか小物とか散らばっててだなあ……。あーついでに一緒に掃除するかい？」

「遠慮します……」

「まあ綾の部屋にしたまえ。あとで本人に説明するから」

「いや、だからそれはまずいでしょ」

「うんまずい」

俺は呆れるとか以前に言葉を失った。

「……あの、わかっていて言っていた？」

「そりゃ年頃の異性同士が同じ部屋で過ごすのはどうかと思っぞ。だが娘のため娘のためとだな」

「その思考がオカシイ……！」

その間の出来事。

「ただいま」

「……ただいま。あ。」

「どうしたの、臯月？」

「この靴」

臯月は靴を指差す。

綾はその靴を見て少し驚いた顔をした。

「もしかして……星川くん？」

「……」

「どうしたの臯月？」

「靴を見ただけで理解できるんだね…お姉ちゃん」

「っ！それは貴女もでしょっ。って、話を聴きなさい」

二人は居間へ。

皇月は眠そうにしているが、堪えていた。

「眠いのなら寝てもいいのよ？」

「…雫を待つ」

「律儀というか、本当に懐いているわねえ…」

それでいて素直。

この性格が羨ましいと思う。

「いや、だから帰りますっつてば…」

「遠慮しないしない！」

「……………」

「……………」

ああ、また強引に連れて来られていたんだ。

でも最後には付いて行く星川くんも甘い。

「おや？二人とも帰っていたのか」

「…ただいま」

「ただいま。あと星川くんもお疲れ様」

「…どうも」

なんだか疲れた表情をしている。

かわいそうに。

「お疲れ様？雫くんは自分と共に風呂場でリラックスをしていただけだぞ」

「それがお疲れ様なのよ」

「よくわからんなあ」

「自覚ないところがこの人らしいよな…」

「うん。叔父さん…こういう人」

「で、結局お泊りすることになったわけだが」

「まだ肯定してないですけど?」

「…そこで」

「聞けよ」

「まあ当初は綾か皐月ちゃんのリビングに入れようかと思ったが」

「何言ってるのよ!!」

「私は別に」

「俺はいやだ…」

「しょーがないから帰らせる。ちえ」

ちえ、じゃない…。

まあ帰れるからいいか。

とりあえず綾先輩の方を見てみた。

目を逸らされた。

皐月の方を見てみた。

見つめられたから見つめ続けてみた。

「……………」

何となく意思の疎通が出来た気がする。

「それじゃあ送ろうか」

「いえ、歩いて帰りますよ」

「そうかい? いやでも遅いし危ないだろうに」

「本当に大丈夫です。お世話になりました色々」

ここで携帯電話のバイブレーションが。

「おや? 電話か何かじゃないのかい?」

「そうみたいね。星川くん、出ていいわよ」

「ん…」

携帯電話を手に取り、名前の表示を確認する。

非通知だった。

玲ならわざわざ隠す必要もないし、もちろんのこと唯たちもない。

「…どしたの、栗」

「おや。どつしたんだい?」

「あ、いや。ちょっと失礼します」

一応この部屋から出て電話に出ることにした。
幸い向こうも粘り強いみたいで切れていない。

本来ならどこの誰かもわからない人間からの電話には出ないが、
そのときは深く考えていなかった。

「もしもし」

『雫』

「…何、母さん」

電話の主は母だった。

母は他人の電話からだとか公衆電話からだとかからでも平気で連絡する主義だ。

今回も驚くことはない。

『ちよつと今日は早く帰ってきたんだけど、あなたがいなかったから心配だね。玲も内心早く帰ってきて欲しいはずよ』

「そんなことより…用件つてのはそれだけ？」

『息子を心配して電話するのが不満？』

「……………」

心配、ね。

「今日は…友人の家に泊まることにするから」

『友達つて、翔くん？』

「違う…べつの」

『そう。友達と一緒にならいいんだけど…、迷惑かけちゃ』

「そういうことだから、それじゃ」

俺は最後まで聞くことなく通話を止めた。

どうせ本気で心配しちやいなんだ。

だからどんなことを言おうと関係ない。

玲のことだけ気にかけておけばいいんだ、あの人たちは。

そして雫は綾たちのいる居間へ戻る。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3029/>

少年の日常

2011年4月14日21時40分発行